

THE SENRYU ZASSHI

No. 373

7月川雑川柳祭

祭光天 題

> 才 4 3

雜誌社主催 111

本社六月句会

變

5 む

歩 水

道

3

句 句 朝

9

賞 話 題

Ŧi.

拾

四

題 (当日発表)

合各題天位 N. 路 郎 選 天 位 K 不 朽

昌男・与呂志・白水・水堂・月都・薫風子・永断・一三夫

投句

だけの方は郵券三十円

同封(メ切毎月五日

紫香・淡舟・いさむ・潮花· 文林・庸佑・

狂

11 村 好 洞 賞

LIB

顕

所 時

六月

雑川柳まつりの

特別課題

題として出されます。欠席をする上

特別課題」へ応募できなくなります。

(支部句会で出句ずみの方は作句せぬ)

t

日(土)午

時

明

大阪市天王寺区下寺町二丁目バス停前 市電下寺町又は日本橋三丁目下車) (電話四九二六〇)

麻 (489) 生 路 郎

梅竹春

志莊巢

選選

後水北

藤谷川

社 句 会 部

電話住吉 切 六〇八一番

111

柳

雑

誌

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

スマートでのもい

0.S.K.

是公公一区

川雑 婦 人 友

やす倍加運動にご協力くださ 百名突破記念を機に 雑婦人友の会連絡事務所 員募 0 集 会

人が

!

*

大阪市生野区中川町二ノ三〇 花

大 阪・名古屋・伊勢を結ぶ・・・

16.00 8.00 15.40 18.00 18.40 17.40 19.40 9.00 12.00 14.00 20.00 12.40 20 40 11.40



大阪市天王寺区上本町6

麻生路郎

人叱る根気もつきた顔となり

落選になるほどという顔をされ

老夫婦やいとのおかげばかり説き

未亡人銀行だけは自分で来

年老いぬロシャ語は遠うに忘れたり

浴衣だけあれば夏中くらせる気



 る 泥 集

 本 地 柳 壇

 (20)

 大 門 講 座

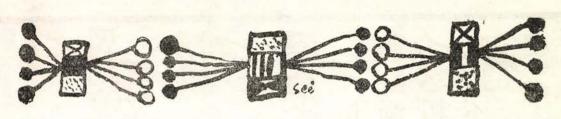
 私の作句法

 苦本多久志…(元)

 (元)

 (元)

 (元)
 創作鑑賞批評……戸田 古方…(10) 言葉のあや……麻生 路郎…(三) 表 紙………野 尻 弘 表 紙……… 野 尻 弘 近 路 川片独柳者 り 備前支部川柳大会……永松 東岸…(三) 母・井上信子について…大石 婦人友の会川柳大会……藤村 不朽洞の人々……豆秋氏の巻…(元) 批評家を育てましょう…金井 小新 柳多留の成立をめぐりて…… ウイと川 JII 不平」 柳 六 0 加柳……東野監賞……原生 鑑 賞……… 月 榔……… 壁……直原七面山・(三0) 奥津啓一朗…(1五 鶴子…(三人) 梨花…(天) 文秋…(三) 路郎:-(10) 大八…(九 日満…(宝) 旋風…(三





ねんぶつで割切っているいい育ち 豐中市 田 古 方

ここすえと唇の色罌栗の色 子持伸居もったいないが口につき 大阪市

西宮市 岩 本 1/4 久 志

扇雀に似たはりますと酌いでくれ 勘定を取りに来られた夢で覚め 金借りに来ていい下駄と替えて去に オヤッこの娘口紅さえもつけていず

米子市 鸭 美 笑

琴のうら春の埃りをはたいとく 坐るべきとこへ丹前でも坐 雨の昼選挙参謀湯にひたり 株式のバーの専務にさせられる 静養に春の大山開け放ち バス降りて名所の雨へほっとかれ 大阪市 īE. 本 水

客

スト解除妻と子供は出かける気 豐中市 111 紫 否

> 女好し酒好し友の旅便り 停年に近く北海道へ行くプラン

兵庫県 1] 西 無 鬼

出来上りを見れば我田引水だった 三振り程は親も楽しんでるブラン 7

大阪市 西 V わ を

栞

女事務着物になってなまめかし 長寿法こちらが先と寝ています

うず潮を一人で眺め恐くなり 州本鳴門観潮

月煌々見て呉れようが呉れまいが 資本家は先ず交渉をつっぱねて 入院をしたので焼けばっ杭 が燃え

類母しい女医で勿論M過剰 低音におよそ縁な言書記長よ 解散のように卒業散って行く

東京都

宫

田

不

転げたとは云わず年寄ビッコひき 通勤の窓から桜見るばかり 四月馬鹿天気予報もウソを云い 大阪市 須 崻 豆

中着切りも混り吉野行電車

惚れ切って瑳峨や富士子に見えるひと ウール着た素足ネオンの灯を歩き 大阪市 丸 尾 潮 花

ホノルル市 內 藤 草 郎

何をして暮すも一つ漬物屋

殼をつき破った広いひろい天地

鳥取市 大 西

歩

縄のれん見栄も汚職もなかりけり 土地ッ子の眼が憎んでるスキー客

秋

大阪市

北

]1]

春

巣

出不精も遺伝するのか親と子の 道草をせよと駅前テレビジョン ノーハット主義はモスクワでも流行り

奈良県 方

T

ホノルル市 讴 佐 間 柳 葉

喋れない歌手が英語でよく唄 既製服小兵に合わぬ仕立なり 一枚舌戦後の子等は驚かず

六十の眼には桜もあせて見え

市

古

田

主

井

堂

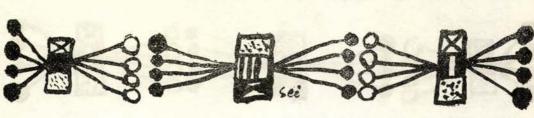
ライターがつかず女給マッチする お茶をつぐことも日課の女秘書 ほっくりと旦那一号の宅で逝き 字部市 国 弘 *

休

モーニング着でもつはサンドイッチマン 限が醒めりゃ夢の話の老夫婦 大阪市 安 岡 珊 枝 郎

大阪市 藤 il:

収入が無くなり食える世と分かり 見晴らしのいいとこお墓ばかりあり



間の抜けた顔でスピード罰せられ 普天氏へ

満ち足りた上に金婚祝われる

下関市 桜 III 不

水

何もかも打っちゃらかして鼻毛ぬく

顎ひげをしごいて寝たり無精者

岡山県 浜 田 久 米 雄

へそくりのきょうの入れ場はここにする

鉄瓶の湯垢が山の寺と知り

寝不足の眼へライターの火が明し

大阪市 德 永 雅 美

工員の悔みは妻で済ましとき

大阪市 武 部 否 林

アドバルン君もおちつけないらしく 限をつむり人の心の奥に触れ 大胆に喋りまくるも二十才代

出雲市 尼 緑 Z 助

生きとし生きて眉毛はねあがり 晩酌へめざしがけむる春央ば

長生きのまだ養子と合わず昼の酎

大阪市

水

谷

竹

荘

女客手料理一皿ずつほめる

よろめくとこないかと旅の宿できき

たわむれに云った言葉にすがりつき 鳥取市 杉 湖

山

尼崎市 小 文 月

山口県

工場長慰安会にも気を配

役得を集中攻撃してつぶし

手のたわぬとこで赤線嘲笑い 良妻でないが賢母と世間ほめ

無蓋車で牛ものんびり春へ乗

丹前を着ると女の飲みっぷり

倦怠期被害御近所まで及び

日本の稚気を埴輪の姿に見

勇ましや妻町会に出ると云う

裏町の方はブランにない視察

叔父死亡

逝く春を電波にのって来た計報

何事もなかった事にする化粧

春の旅転落記事を寒う見る

神棚へ徴税令書を置き忘れ

勝負師が易断本部へ電話する

よく見れば左手がない懐手

長 野 井 蛙

市 野 甦

光

岡山県 直 原 t 面 山

鳥取市 河 H 満

アメリカの風邪も土産のうちに入れ

岡山県 福 島 鉄 児

岡山市 服 部 + 九 Ψ.

尼崎市 谷 JII Ξ

司

スタンドを消せば隣もしんとなり

娘の結婚

地酒よしここの宿屋の路 の答

西宮市 若 林 草 右

初孫のおむつを嬉しそうに干し

豊中市 足 寸. 春 雄

た顔も泣いており

卒業式いねむっ

熊本県 有 働 芳 仙

天皇のお越しヘフイルムどっと売れ

葉桜になり恋愛も二期に入り

妻だけが財布を持っている家計 ロカビリー人種が違うように見え

広島県 田 季 赞

安月給割勘代が多すぎる レベーター海底へ行く音でおり 三月十三日十四日関門トンネルを通る

大阪市 山 本 薬 光

運勢に励まされてるガード下 若草に生きる力を知った試歩

倉敷市 木 村 Ŧ 容

民主々義老後は少し淋しゅお

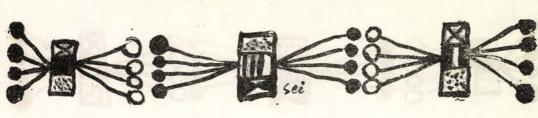
倉敷市 田 垣 方 大

アブレては困るが骨は惜む方

螢光灯思わせぶりなともりかた バネの出た椅子へ容疑者坐らされ

加賀市 那 谷 光 郎

▽恋楽し花見の金を借りに来る



買わされてよかった土地の価が上り

村 味 平

加賀市

夜桜のそぞろ歩きをかぎつかれ 朝風呂の会長とやらで硬骨漢

大阪市 木 村 水

堂

尻に敷く妻も映画の恋へ泣き 日曜を夫婦で習う観世流 花の下酔わんと損な顔で飲み

おとなしく野球聴いてるノーマネー

他界され今度は誰にとりいる気 倉敷市 水 谷 谷

水

寺町はひっそりとしてさくら咲き 流会にするかと茶菓子淋しく見

岡山県 田 村 藤

波

本職を忘れて医者の選挙戦 撞き捨てて戻る桜の下の鐘 真夜中に叩けば医者も風邪とやら

踏切を急いで子供の靴が脱げ

告白がとても一夜で済まぬなり

岡山県

岡

田

夜

潮

行楽の春にそむいて坑に入り 卒業へ早や呉服屋がもみ手なり

ひとり旅宿の廊下に雨蛙

玉島市

E

井

Ξ

林

坊

138 善人へ斯うまで神は背を向ける 大臣を呼び捨てにする評論家

茨木市 下 Ш 清 潮

> 生年月日聞けば我が子の死がつらく 当社では骨のずいまでしゃぶる気か

岡山県 本 田

老眼鏡かけてはずして名付親

葉桜となりけり甲斐性ない親

私鉄ストお蔭で小遣いちと残り

生さぬ仲寝巻にまでも気を配

東京よさよなら栄転と左遷

倉敷市 藤 井 春

父親の愛情十日臥てわかり

借金が心の張りとなる著さ 岡山市 津 田 麦 太

楼

ピューリタンと云われ女経も鍵も読み

利き酒を分別くさい顔で吹き お燈明消えたくるわの稲荷さま

米子市 小 四 雌

逃げ腰を見せる一号の無理をきき ロカビリー新興宗教よりさわぎ 茶羽織でお出掛け特価売場まで

五分間違う急行嬉しがり 市 高 崎 雄

声

大阪市 吾 郷

玲

人

惠 -朗

よろめいてみようかいやまて金がいる

大阪市 真 鍋 瓢

独身で通す元先生の病んでから

倉敷市

野

素

身

郎

口答から恐妻に変って来

酒の祖父今日の佳き日は大君の この路に嬉しい予感セールスマン 姉ちゃんの恋とは知らぬ遊園地

島根県

藤

井

明

朗

京都市 松 JII 杜: 的

タンポポスモレいいなと思う春の旅

倉敷市 松 村 万

ヤレヤレと云う気の中で拍手鳴る

大阪市

Щ

50

茶

絡まれし指の細さをいとうしむ 六段の調彼女のだからきけ

大阪市

神

谷

A.

儿

郎

古

H

熱燗を女たもとで酌いでくれ

大阪市 木 村

+

悟

芸の虫なぞと上手におだてられ

大阪市

清

水

1

峰

のほほんとさびれた街に根をおろし

十代を愚痴れば唄ですかされる

雨宿りパチンコはもうこりて居り 大阪市 伊 遠 堰

子

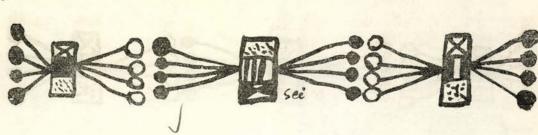
養子族長の付く役買うて出る

大阪市 不二田

誕生目だったを忘れ子を叱り ビルという大きな機に入れられて 三夫

三号の家で心臓マヒで死に 美しい女房を持ってはたらかせ

兵庫県 酒 井 0 か 平



鳥害でペシャンコですと花処 花までがいじけてしもた私鉄スト

字部市 津 秋 花

元校長のひげのまんまが鶏を飼 帯しめて女澄ました顔になる

神戸市 野 村 初 前

丹前を着て顔役の顔になり 改札口ニコョン隊に待たされる

大阪市 金 井 文

秋

月給は一万越して嫁き遅れ タクシーで帰り世帯を批判され

岡山県 戶 田 喜 楽

恐れ入る話に茶菓子見てるだけ 土筆摘む籠は妹の方が持ち

唐津市 新 岡 回 天 子

辻褄を合わせ逢引帰って来 戦争の言葉使うてストは派手 犬と猫家族に入れて一人いる

岡山県 池 田 古 山

中折帽明治生れはよう捨てず 注意すりゃ妬いてるように受取られ

東京都 石 居 高 志

麦青くして大空の色に和し 君のその総てが欲しい目がうるみ

大阪府 早 JII 清 生

共産党嫌う社長の運転手 卒業期出航ごとに島出る子

> 共稼ぎしたのを後妻きて費い 小松市

伊 藤 茶

仏

生活のうるおいと云う琴を弾き 皆んなよい人だ金持ちにもならず 損得で親子が別居してしまい

堺 市 辻 圭

失恋が事業の鬼にしてしまい 私鉄スト中止待ってたように雨が降り 人間の弱味にさぎは拔目なく

テレビにも飽きて映画を観に出かけ 加賀市 中 松 恒

雄

奥さんからの電話仲居に皮肉られ 否むほどにやっと歌えたネブカ節

美容整形すませ良縁待つば かり

云訳がむきになり過ぎうたぐられ 大阪市 児 島 与 呂

岡山県 野 2 П 美 舟

島の餌軽く忘れる程に老け コロッケが一重になった共稼ぎ

灯を消してドッと疲れの出るマダ 日曜を寝る楽しみの新入社 回覧へ下戸はしぶしぶ判をつき 事務服の甲斐々々しさを見染められ 神戸市 小 浜 1 牧

結納をまけたりいなと娘に云われ ふんいきへ高いお金を払ろて飲み 西宮市 田 満

釣糸が光って春の水が落

岡山県

池

Ŀ.

知

恵

美

親だけが大器晩成まだ信じ 花吹雪娘の襟へ降りつもり 大阪市 橋

高

黨

風

子

さて酔えば不覇奔放なのも女

四月四日長女生誕

水

木も草も花をつけてる誕生日 春闘の真只中に子が生れ

匹の蟻にファイトが盛り上り 下関市 中 村 九 呂 T.

週刊紙くるくる巻いてバスを降り

奈良市

宫

П

笛

生

水しぶきボートも夏の色になり

大阪市 桝 本 蕗

児

志

初出社背広着せかく母のあり

自由主義よと口紅にへこまされ 大阪市 池 戶 桃

村

花見プラン結局近いとこに決め

米子市 石 坂

新

雪

人

義母還曆

還暦ものばしたい程若々し

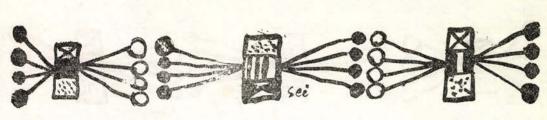
大阪市 西 III

晃

既は覚えず昼寝までしたく なめくじの如きか露路の隅で生き 子の瞳澄んでいるから叱られず

秋

鳥取県 田 中 蛙 眠 子



講演へ隠居くったくない欠伸 好きやけどなあと優柔不断なり

名古屋市 野 田

念

菜の花の蝶々を尾僧じっと見る 山の鐘花の霞の中で鳴り

岡山県 林 葵

Ir.

不具の子が野口英世の額をかけ 叩かれて下っ端元気なお子とほめ

神戸市 どんたく

中古車でガタガタガタと御来診 我が分身の如く腕時計よく止まり 工事費を値切っておいて感謝状 ダンサーの世帯話でピール飲み

平田市 久 家 10 仕 男

身の上を語るその眼が不甲斐なし = コョンの動きが鈍い雨合羽

大阪市 外 省 Ξ

社長のが落ち門衛の娘が通り 目出度さも近所へすまぬ荷を飾り 大阪市 大 谷 月

花便り御室を残すだけになり 岡山市 江 国 KK 谷

さみしさは父が小さく見える日

立派な金言か知らんが僕には邪魔 13

よろめいているとは知らず寝ずに待ち 岡山市 好 陽 子

> 妻の留守ネオンが消えたのに等し 金にもの云わせた婿をあてがわれ

既の疲れがさせた妥結成

もうすこし居ろとはいさかい避ける手か

手軽そうに云うて鑑切り切れぬなり 無理をした受験家出の記事となり

ドスのんだ男も通る新世界

क्त

田

4

狂

大臣を出せと代表おさまらず

新潟県 高 野 to C

減税貯蓄法案

流行歌の様に忘られようか恋 金持ちの為にばっ かり 法が出来

高槻市 辻 白 溪 子

紙凾を焚いてる美容院の朝 つけ眉毛消して自分の顔で寝る 高砂市 古 原

紅

月

選挙前首相テレビへあいそよし

都

酌ぎに来た妓に助太刀をしてもらい 薬局の棚間違いそうなビン並び

こうでもないああでもないと店はひま 大阪市 竹 內 干

里

いささかの奢りわが家へ買うケー 大阪市 岸 Ш 漣

尼崎市 徳 永 鬼 美 商魂は名所増やした観光課

西宮市 河 相 す

>

to

九州の子が大連れて遊びに来

大阪市

石

倉

旅

風

関門トンネル

大阪市

欄

蘭

西宮市 野 呂 鵜 71

結論を先に云う癖出てしまい

連体へやれやれやれと出す机

発展地と見てか銀行が先に建ち

悪友の花信へやはり行くと書き

大阪市

魚

住

満

潮

西宮市 樋 П 舟 遊

ts.

二級酒に花を忘れて炭坑節

大阪府 林

昌

男

目を閉じて女スリルを待つ如

せわしない恋バスに乗り地下に降

縁談がまとまりそうでけちになり 愛媛県 村 F. 旭 童

新児童ヴァイ オリン・サ I

芋つくるひけつでさえも秘中の秘

麻生 アート

西宮市仁川町五丁目七番地 奈良県生駒町本町二丁目一〇三番地 TEL306 % >

くるみ幼稚 TEL638パン甲

教室新設については新児童ヴァイオリン・ ークル生駒教室へ御相談下さい

*



句作上のひがみについて

東 大

りにつぎの様な点について考えさ が、このことについて私は、私な 過分のお言葉を頂戴したのです せられました。 か」の標題で、私の句にふれて、 素心山人という方が「川柳とは何 本誌四月号の『雑筆春秋』で、

とその表現方法は別ですけれど さで喜劇風に持っていくか、自ず に陥るか、反対に自己批判の冷酷 する。それは手雕しの泣訴の感傷 然的に対人関係の感銘をより深く 間の失意、悲嘆というものは、必 の比重がかかっている様です。人 逆境などといった作品により多く 川柳の求訴力では、困窮、不具、

みせられて、たまたまそのときに ん(現東京タイムス社員)が姿を 竜刀、字和川木耳さんらと句会を ろうか、奉天の満鉄会館で石原青 いたとき、大連の高須啞三味さ 二むかしも、もっと前になるだ

出たビッコの句に対して 一とんな不具、疾患をテーマに

もってよく記憶している。当時、 味の感想を述べられたことを、今 のじゃないかと思う」といった意 喜ばしいことではない、出来るな とらえるということは、あんまり ら、句材にとりあげない方がいい った故でしょうか。 いたのでしたが、成程と深く感心 私はまだ五体健全でピンピンして したことは世事にも句作にも若か なもんなんです。不具者への同情 心には、何よりも同情が一番イヤ 句なのですが、こうした不具者の

ました。 理智や道義や惻隠のこころをニベ 場で、魂や肉体がそうした平常な 戦いの最中に身を投ずるに随 争の推移で変り、私自身も苛烈な て、死や、それ以前のギリギリの もなく打砕いてしまうのを意識し しかし、その後、 生活還境も厳

ので、数十通のお便りまで手にし 表してしまいました。予想に反し 押さえつづけてきた啞三味訓話を なってそれまでの数年間、じっと て、意外なほどの反響を頂いたも 一気に打破って、隻手十三句を発 古い『むつみ』だかに、隻手に 0 ぐ若い人たちにとって、その不具 があるようです。その中の幾人か や眼や言葉は居たたまれないもの い。年若く、心も白く、身も花や

身へのわが身によせる世間の亩

というのが、当の十三句の中の ひがみだろう けだといっていいものでした。 が、同情と慰めと明日への励しだ ました。けれども、そのすべて ーひがむまい、そう思うのが、

く感じとるのを常とします。齢を やはり手雕しのそんな同情は寂し る自信を持ったさとりの私とて、 発も、ただそれだけのものと感じ 観も持って、そうしたものへの反 重ねて、世事にも長け、 の眼を、不具者は誰よりもすばや 奇態なものへの通常な人々の関心 い足がない鼻がない、そういった すべりしやすいものです。手がな は、総じてそのままが好奇へと横 相当の諦 んだい

ました。 立療養所へ、柳話と川柳の会をも った仲間としての言葉を交し合い に喜んでくれて、一とき部屋で、 楠君がいた。私たちの来所を非常 り、繊細な作風で知られる川崎百 の療養所では「晴窓」句会があ ちに出かけたことがあります。こ すが、前田伍健さんと、松山の国 はそれで死にました。 種の戦友、戦病を通じての生残 これまた十年も前の話になりま

やあ、誰がそうかといってくれる という点について、心おきなく語 かみとって句にたたき出さなくち その体験の昨日と明日をぐっとつ いくよ、だって生命をかけてきた から、不具の句をどんどん作って なく私の言葉を打消して ってみました。百楠君は、 そのとき私は、不具者と川柳、 「僕ならその逆だな、不具者だ ロべも

眼の底をさぐりこんだ彼は そういささか昂奮の面持で私の 「北条民雄の癩文学なんか、 そ

の一級品じゃないか」

りの身体を持つものにしか、持た と大げさな応え方だが、こうした せないことであります。それで 微妙な心の在り方も、やはり私な かったのだ、とー。そのときのち の句は、それで、そのままでよ ホッとした。自分の句は、隻手 私は、私なりでこの彼の言葉で うか。

です。みなさん如何なもんでしょ

たいと今もはっきり思っているの 中に誇りうる自分を見出していき に関する限り私は、まともな句の 現れでしょうか、正当な句作の場

間の一番痛いところでモノをい う、そういう感銘の与え方によっ んだよ て句が賞められることが厭だった 僕はまた、片輪者の立場で人

みせたことでした。 りとめもない苦笑を相手に示して 私は彼にそれだけをいって、

こうした句の求訴力や、感銘の与 強いて身辺雑記の中にとり入れる 験故の、愚かでおしつけがましい あるわけですが、正直なところ、 なりの考え方によって作句しつつ のも、百楠君や、その後の私は私 に、私は、それまで片輪ものの句 の彼も今はこの世に亡いのです。 てくれた。今もその色あせた句 に、私のところへ色紙にして送 いう句を彼は、それから数日後 種のぬぐい難い片輪者のヒケ目の つくりできないのです。これも一 この身の哀感のようにとれて、し お言葉を頂戴すると、悪い気持が てきたわけですが、最近それらを にジクジたるヒケ目を感じつづけ は、二階の居間の隙間にあるが、そ しない反面、なんだかおのれの体 え方によって、観賞者から過分の まあ、とにかくこの様な話の様 妻の出す両腕あったころの服と

麻 生 路 郎

句である。 いのであるが、 が躍動していてほおえましい 上るさまを詠んだのに過ぎな いかにも光景

こみ屋 通り筋から少し外ずれた街 龍舌蘭眼を刺しそうなつれ 五二五 志

えよう。

私としてはにじり口

まくつかんでいると思う。

にあるつれこみ屋の状景をう

を詠んだ句にはじめて接した ので非常に興趣を覚えた。

らえることが出来た句だと云 繊細な神経にしてはじめてと 描写した句であるが、

作者の

立って目立ったのを印象的に 女の姿の特に足袋の白さが際

茶室のにじり口から這入る

順番に足袋の白さのにじり

(きさ子

五二三

主人の人物までがうかがえ と違って、竜舌蘭による寂び れて居り、このつれ込み屋の のある刺激をねらったところ 温泉マークのザッパクな感じ つれ込み屋と街の調和がと いかにもよく利いている。 眼を刺しそうな」が、

・批

心理をうまくつかんでいる。 べたというのである。父親の らいで買えるものかと値を調 は百も承知だが、一体幾らぐ たび這入るので買えないこと 云う声がお父さんの耳にたび らいのものである。「お父さ 呂屋や喫茶店などで楽しむぐ もたちにとってはせいぜい風 とどかない階級が多い。こど まだまだテレビへまでは手の ん、テレビが欲しいなァ」と 調べ テレビブームではあるが、

ず 空壜を大事がる癖まだぬけ 一酸 波

かにそんなとこがある。 けないというのである。 り、今では空壜がなくても買 ある。戦後もう十幾年にもな もまだ空壜を大事がる癖が拔 えるようになったが、 って呉れなかった。それで空 **壜を非常に大事にしたもので** には空壜を持って行かねば売 戦争で物資が不足した時代 それで

作 鑑 賞 創 0

もすすめられる芸術だといえるの が、川柳は最も手軽るに、誰にで との出来るのは川柳に限りません にできます。今日ではそういうこ であります。 川柳は創作、鑑賞、批評が同時

の機会は封ぜられていました。最

のであります。 になりますとなかなかむつかしい べようと思いますが、創作という 批評を兼ねるということはそんな 点に関しましても完全ということ にたやすいことではないのです。 鑑賞と批評についてはあとで述 しかし完全な創作家、鑑賞家、

古 方 生命ある句を創る心がまえを持 はならないのであります。 その努力をおしむ人であって

りますが、完全な川柳の創作家は

父なるが故にテレビも値を

に及んでおります。 うな句であってはなりません。 実にふれた句でなければなりませ 大衆の創作し得る芸術として今日 ん。少くとも自分だけわかってい て、他人に理解してもらえないよ 川柳は江戸時代に出来上って、 生命ある句は何らかの意味で真

戶

田

作品があつめられています。 葉集といえば天皇から庶民までの 葉集にさかのぼることが出来、万 もつづいたと思われますが、発表 ありますが、短歌といえば古く万 しかし庶民の作歌活動はその後 川柳は短歌からわかれたもので

めます。 有名な創作家としてその名をとど が鑑賞家として参加し、 初の独占者は宮廷貴族でした。 家の公達平忠度とか源実朝とかは 平安末期には擡頭して来た武士 やがて平

へとけこんでいました。そして鑑 あらわれはじめ、 かっての貴族文化は完全にその中 ますと、文化は武家のものとなり、 わらず、武家の趣味に合う作品が 京文化との絶縁を願ったにもかか の轍をふむことを恐れた源頼朝 短歌に限らず、芸術一般に平家 室町時代に入り

五二六

穿ち句だと云えよう。

勿論、川柳は趣味でよいのであ

ある。 のに、

その顔へ赤ン坊が這い まだ眼が醒めないので あかあかと太陽が輝いている

面白いと思う。戸外は既に

春眠の

顔という表現は非常

童

春眠の顔へ赤ン坊這い上り

五二四

順番を並べかえさす花輪来

る。この点をとらえた穿ち句 やますのである。必ずしも親 がある。そこで世話役は花輪 て各方面から贈られるものと 相やボスや、 として大いにうなずかせる。 の並べ方に随分とアタマをな れるものや、 関係にはよらないからであ 花輪にも親戚一 交際範囲によっ 同業組合や、首 同から贈ら

影法師あるのを空巢わすれ 五二九

ある。 ろう。この句はそういう人間 ョッとしておびえることもあ は気づかなかったというので の影法師が写っていることに び寄ったが、壁に大きく自分 一弱点を巧みに衝いている。 空巣が拔き足さし足でしの 時にはその影法師にギ

金三〇

結婚をしたら、 夢もなくおむつで窓を皆寒 こうもしようといろんな あアもしよ (矢寸志)

よく表現されていると思う。 皆塞ぎ」で現実のきびしさが 夢にあこがれるどころか、日 るのである。「おむつで窓を である。こうなると華やかな 次ぎ次ぎにこどもが生れたの 夢を描いていたが、まもなく の生活に追いまくられてい 金三し

うているのに、まだ二次会か チしている。 愛飲家の心理をうまくキャ 行く腰をあげ 酔うているのにまだついて もう相当に酔 (良 Ŧ

る。 こそ愛飲家の世界なのであ 来ないかも知れないが、それ あげるという気持ちは想像出 はまだついて行くために腰を うとすぐ眠むなるという人に うよりも、その雰囲気をこよ う人たちは酒が飲みたいとい なく愛しているのである。酔 ら三次会へとついて行くとい

準備は容易ではない。親の世 何 一つ揃えぬ方が先に嫁き もなく詠んではいるが、 でもなく詠んでいるところに

却って鋭どさが感じられる。

きかせ

多久志

何 というのがネライである。 それはどちらでもいいが、 か、或は友達の場合であろう。 に残ったのは二人の娘の姉 こしらえもなしに結婚したこ とを意味するのである。 をしたか、想思の仲で、何の n 揃っていない方が、先に結婚 ものである。ところが何一つ しても、 帯が苦しければ、会社勤めを 一つ揃えぬ方が先に嫁った てこしらえどりという結婚 たというのは美貌をのぞま ボツボツ準備をする あ

中学生大人を真似て子が生 五三三 曲

皮肉ったのであろう。何んで 似て子が生れ」と皮肉ったの よりも大人の風紀の悪いの である。これは中学生の風紀 る。それを作者は「大人を真 遊戯から子供が出来たのであ れている時に、中学生の桃色 道徳教育がやかましく云わ

> 賞家として新らしく庶民も加わり はじめました。

市井の人人に愛好されたのはいう 句よりもいっそう庶民的な川柳が されたのでありました。しかも俳 ぎなかったのに反し、柳俳は鑑賞 生するのです。大衆の芸術として 行して、その前句附から川柳が誕 浮世絵、歌舞伎が数えられますが なり、発句とともに、前附句が流 よりも大衆自身の手によって創作 これらはもっぱら鑑賞されるにす 七の下の句が独立しはじめます。 です。五七五の短歌の上の句と、七 連歌が盛んになったのはこの頃 江戸時代にはこの連歌が俳諧と

とだと思われます。 らないが、川柳をたのしむ鑑賞家 来るわけでありますが、川柳は作 に至ってはうんとその数が多いこ 川柳の創作家は鑑賞も批評も出

までもありません。

旬を楽しめばよいのですから、又 やかくいわれる心配がありませ のように鑑賞しようと誰からもと 表する必要もないのですから、ど 自分はこう鑑賞するといちいち発 鑑賞ということは自分のすきな

を拾ってみますと が、私流の見方で眼にとまった句 ぞれ客観性ももっていますが、 誌上に発表されている句はそれ 社員への訓示自分にも言い

> うで、大へん淋しかったことをお 自身の修養の時間をうばわれたよ なかったことがありましたが、私 が、時間割の都合である年それが 毎年度宗教の話をしている私

はえています。 長男の文科志望にがっくり

いると見たのであります。 分とひきくらべて、いかにも「が まうほど芯の強い長男の希望を自 た私。同時に遂に家業をすててし いできらいで父をてこずらせまし 測でしょうか。家業の商売がきら というのも刺激を求める近代の風 りには強さがあります。近頃の若 っくり」がそれをよくあらわして い人が何でもない時に「がっくり」 には衝動が感じられます。がっく だれるとはいいません。がっくり はちがいます。首をがっかりうな 「がっくり」は「がっかり」と

川柳することは人人が幸福への る 太陽の恵みあまねく風邪癒

力いっぱいあたえられているので さは表面的なもので、太陽の恵み 句に目がとまるのです。下五の はどんな小さいものにも、公平に て大へん軽く見えながら、その軽 あると信じていますので、こんな 「風邪癒る」は上五中七にくらべ 歩の前進であり、半歩の前進で



言葉のあや

伊志田孝三郎

幼少の頃、私の家の庭隣りが落 直ぐその寄席の楽屋だったから、 体演の日以外は年中夕方から果て 株演の日以外は年中夕方から果て 大鼓まで、寄席の鳴り物やら三味 太鼓まで、寄席の鳴り物やら三味 たか音を聴きながら育った私である の。

この火事は、人のいのち この火事は、人のいのち この火事は、人のいのち こでその頃流行の落首が早速街に これは

を鳥井坂

とがある。

戸川内膳正の屋敷から出火があっの話があった。江戸時代、鳥井坂のの話があった。江戸時代、鳥井坂のの時だったと思うが浅草の講談のの時だったと思うが浅草の講談のの時だったと思うが浅草の講談のの時だったと思うが

これより上の戸川

たのである。なると二三日のというのである。すると二三日のという処を粗相火なればとした。という処を粗相火なればとしたのである。

を鳥井坂 この火事は、人のいのち

粗相火なればとがは

だとも思う。中学へ行く頃にはも川柳界に入る遠い素因に成ったの

広告の出演者名を調べては聴き歩う東京中の寄席という寄席を新聞

ない ぜん
てしまったというのである。子供
てしまったというのである。子供
てしまったというのである。子供
でに忘れ得ぬ一つ話として覚えて
だに忘れ得ぬ一つ話として覚えて

平然と語る柳人のあるのは困りも

助六は江戸一番の頭痛持ち、を助六は日本一の頭痛持ち、と 助六は日本一の頭痛持ち、と 打きいには違いないが、それでは 大きいには違いないが、それでは 大きいには違いないが、それでは

本降りになつて出てゆく雨宿り

本降りになって馳け出す雨宿り、とやる。成る程、濡れて出てり、とやる。成る程、濡れて出てり、とやる。成る程、濡れて出てり、とかろうが、そんな動的なところがたの句の狙いではない。出てゆく、この句の狙いではない。出てゆく、という諦めの姿にこそこの句のという諦めの姿にこそこの句のという諦めの姿にこそこの句のといせんと言って済ます訳けにはないぜんと言って済ます訳けにはないぜんと言って済ます訳けにはないぜんと言って済ます訳けにはないせんと言って済ます訳けには違いない。

したのでした。

三七一号で五〇〇句に達しまし を対称にということですが、句主 を対称にということですが、句主 くわからない人人にもよくわかる ように、軽妙な筆で指導下さって います。正しい鑑賞の仕方の御手

正しい鑑賞が基礎となって正しい批評が出来るのですが、批評は出来るのですが、批評は

はたして適当であるかどうか。そ くつかまねばならないことは勿論 引うけられそうでありませんが、 と、とても恐ろしくて、選者など がなければなりません。そういう 多考が必要でありますが、川柳だ 者になるためには、多読、多作、 はじまると思われます。立派な選 の練習は選をするということから りません。批評を正しくするため ともこれらのことは見逃してはた 要するに芸術性の問題です。少く けではなく、広い教養と深い洞窓 してその句に詩があるかどうか。 ですが、そのテーマがこの表現で 句主のねらっていることを正

を あるものですから、その二つをな あるものですから、その二つをな と か、同じテーマを取扱ったものが

るいかの判断も糸口がつかめてき

ッ十円のころげた途にもう ッ字宙時代星の堇のと言う とれず。 きさ子 とれず。 きさ子

美人から貰ろた欠伸で気持まし 水 泡 寝顔にも知性気にする満員 寝顔にも知性気にする満員 寝顔にも知性気にする満員 をいう一組を取り出してみました。前の一組は同じ「すみれ」を がいながら全く反対の意図をもち、後の一組は表現には多少のち がいがありながら車中風景である

さらに「すみれ」の二句についてみますと、ころがってゆく十円 てみますと、ころがってゆく十円 のあとを追って、思いもかけず咲いているすみれを見っけた餘情のいているすみれを見っけた餘情のとし、宇宙時代の方には星の菫のというセンチを許さないきびしさがあります。いずれも「すみれ」をあります。

会ではなく、所在なき車中、しか人から貰ろた欠伸」は対談や小集又車中風景の明示はないが「美

そこはそこで方法はあるもの

との句を 急救車どうぞ間に合い ますように

急救車どうぞ助かり ますように

遊 が、これなど関かに執筆者の思い 氏の句が週刊誌に誤り載せられた と紹介された。雨宿りではないが しかなく急救車が躍如としない。 かりますように、では末の結果で リル、そして祈りの句である。助 この句こそ急救車のスピードとス 一前大正時代の名吟家吉川雉子郎 いである。原句は

原涙のあとや酒のしみ の中に母親ほどの不仕合せ

は この二句である。間違った発表句

して折角の名吟も台なしである。 の不潔感さえ頭をもたげる句に瞭 つも重ねたのでは古清屋の店先き ある。それを泌みという言葉を一 なき哀歓を覚えるさすがの名吟で そ悲しい音楽であり、そこはかと とある。涙のあとや酒のしみでと 柳原涙のしみや酒のしみ 世の中にお袋ほどの不仕合せ

お袋は勿体ないが欺しよい

母親という言葉に依る表現であっ かぬところであろうけれど雄子 てお袋という言葉がびったりと動 の古句は如何にも道楽息子から見 世の中にの原句の場合、

> 黙り込んでいたので私が代って声 n た。披講されたタオルのその句は 張り上げて娘の名乗りをしてやっ 恥かしさに顔を真っかにして下り 人は私ではないがその一句が入選 ではいけないと思って会場で大人 て、 題に「タオル」という題が出てい 校五年生の時、私に付いて新聞社 して入選したのでふうちゃとは、 に句箋へ代筆して貰った。その大 のであるが小供の仮名書きばかり の月例句会へ行った。その月の兼 の長女ふうちゃこ(房子)が小学 るかと思っていたが、その事も無 に東京の柳人から)鎗がつけられ 就ては当時柳界の誰れかから(特 したのである。生れて初めて投句 しに時は流れ去ってしまった。私 てこそ句品ある珠玉の輝きと香り 向き、名乗りどころではなく、唯 高さがあるのである。この件に それを手帳に書いて出かけた 娘も見よう見真似で家で作 自信のある句が出来たらし

貰いタオルこけし人形に

罪深いことである。

小遺帳あたしばかりに気を

ささやかれた。自分の作った句 というのである。ところが程たっ 一発表された句とは少し違うとい のである。手帳を見ると原句は からふうちゃこから私に抗議が 貰いタオルこけし模様に

すみれ摘む菫のいのち知ら

もたせ

孝三郎

これは正に心ない大人の誤記であ けしで充分判ると思ったからこけ ある。それで人形と言わなく共て の言い分は友達からお土産にタオ 選句としたのである。ふうちゃこ である。代筆者は、こけしという ルを貰った。そのタオルにこけし のらしく、選者は勿論そのまま人 言葉の先入感から、 模様と作ったというのである。 一形が幾つも染め出されていた。 の修学旅行のお土産のタオルで 人形と句箋に書いてしまったも 娘の句もとより幼稚な作では うっかりこけ

因ってあたら力作を誤り伝えるの であり、作家の心を心とせぬ人に 真心から出てこそ発揮されるもの て私は我が子に拍手してやった。 供にも川柳は作れるものだと改め 知れぬが矢張り親の子であり、子 新鮮味を感じたのは親の欲目かも 造家のものと比べて何とはなしに 柳の言葉の妙味も、その作家の 麻 生 葭

もこの美人は見ず知らずの他人で らとも思われます。 気にする程のスペースがあるかし 由でない満員車では他人の寝顔を 要があるかどうか、身うごきも自 思われますが「満員車」とする必 す。又あとの句の「知性気にする ねばならない様な気もするので 夫したあげくこのことばにもどら るように思いますが、いろいろ下 なければなりません。ただ下五 のはいかにもインテリ女性らしく 「気持よし」にいささか問題があ

で大変です。

うちに、ああでもない、こうでも われますが、いろいろやっている 法かとか、留めは名詞か動詞かと のです。その外大切なのはデニオ な個個の問題が含まれていると思 か、川柳作句法全体にわたるよう ハに注意すること、正叙法か倒叙 掘り下げるのに大に役立っものな だけでなく、その句のもつ本質を こうした比較は只優劣をつける

ない落着く点を発見してゆくこと

りますが、批評となるとよいわる だと考えます いを見わけなければなりませんの が、鑑賞はすききらいだけでも通 大変抽象的ないい方で恐縮です

に思われるのです。 す。たしかにその点にだけ、こん なことをいった甲斐があったよう いたしまして、もっともっと勉強 分に言いきかせているような気が 他人にいっているのではなく、 通り、「社員への訓示自分にも言 身を顧みますときに、おこがまし いきかせ」で、こんなお喋りも、 何ひとつものになっていない私自 ぱし句評をしているようですが、 しなければいけないと思われま ございます。全く多久志さんの句 えらそうなことをいって、いっ 口はばったくて汗顔の至りで

あろうが川柳擦れのした課題吟製

一九五八、 四、七

乃 著 · 米田三男之介裝幀

句集 葭乃

送費 菊半型·函 定価二百五十円

三十円

入

塔です。各方面から御好評をいただいて居ります。 本書は川柳の母・麻生葭乃女史の異色ある作品の金字

大阪市住吉区万代西五の二五

発行所 111 柳 社

振特口 與大阪七五〇五〇番 電話住吉(87)六〇八二

完

ながれ 流転有 で摘む

情月日

は流流

れ身は



四)

征夷大將軍となる

鞍 馬

の裾野で、 った。翌四年五月には、富士 鎌倉に幕府を創設したのであ である。 われたこともうなずかれるの と書いているところをみる この年に頼朝は、 一般に頼朝は大頭だとい 大がかりの牧狩を 正式に、

月星の幕も輝く不二の裾 不二たけにせてを入れたも大 (タル一四五 (川四五

が忍び入り、親の敵として、の夜、曾我十郎、五郎の兄弟 浄るり、芝居等に、色々に作 の工藤祐経の陣へ、二十八日 素晴らしいものであった。そ れ、今に伝えられている。 兄弟のほまれ三国一の場所 狩屋の陣所は、それぞれ (* 1110

誤りである。)また「平語」 れを寿永二年にしてあるのは

衛の佐殿出でられたり。その日

御簾高く捲き上げさせて、兵

して、背低かりけり。容貌優美

は布衣立鳥帽子なり。顔大きに

軍になった。

とあり。建久三年(二一九二)

お祭り頼朝富士へ出馬させ

四十六歳で征夷大将 (平家物語にこ

若宮へこそ参り向はれけれ。」

して請け取り率るべし」とて、

け取り率るべき。若宮の拝殿に

あながら征夷大将軍の院宣を蒙 朝武勇の名誉長ぜるに依って、

行った。

のたまひけるは、「そもそも頭 日の日、関東へ下著、兵衛の佐殿 中原の康定とぞ聞えし。十月四 の院宣を下さる。御使は左史生 るに依って、ゐながら征夷将軍 の佐頼朝、武勇の名誉長じ給へ 「さる程に、鎌倉の前の右兵衛

る。されば私にてはいかでか請

れている。 ふせかねをうつが工藤のかり 松明で工藤が夜具は三所でげ (タル九)

経は二度目の疵がふか手也 タル三・拾六 Ŧi

経は久しいなりで討れけり

って後斬られた。 に討たれ、 本懐を遂げた十郎は仁田四郎 その時、 うまくゆけば、頼 五郎は五郎丸に捕

朝をも狙ったとされ、 頼朝を刷毛次手とは大き過ぎ 冨士を枕に大あたまねらふ也 (タル四・拾六) タル百

短冊をつけて放した。これ という考えであったらしい。 生会を催し、千羽の鶴に金の 年の八月、由比ケ浜で、 などと川柳に作られている。 この牧狩から帰って、 たいそうな後生を願ふ右大将 右大将天地の間へ金をまき 源平の戦死者の霊を弔う タル五〇 (万安七) その 大放

兄弟の仇討を今に褒めら

足もとで鳥をたたせる右大将 右大将日の出に鶴の放生会

禽獣に右幕下物を入れ上げる

(タルニニ)

この時頼朝は征夷大将軍であ 右兵衛佐で作っている。 ったが、川柳はまだ右大将、

鶴の舞ふ頃は鎌倉日の出なり

放生会扇ヶ谷も天地金

あろう。 正に頼朝得意の時であったで

などの戯作もあり、 亀ならば万放しても高が知れ 亀にしてはいかがと秩父申上 (タル五九) ("

江の島弁才天は、 その当座鶴で輝く金亀山 (タル八二)

頼朝は空まで金をまきちらし ひろわれぬやうに佐殿まきち

(タル八六)

(川十六)

佐どの大とり燕雀をはなさず

鎌倉の方から光るものが飛び (タル十五) (》五五

まで、金亀山興願寺であった 江の島へ四十二羽ほど飛んで 鶴は下げ亀は山ほど金をしよ 明治六年 (川十八) (傍初)

右大将金をいかしてつかひす

り、四十二は、七里ケ浜の暗 ので、それにかけた狂作であ

掃除をしかけアレ鶴がノ タル五四

四五羽舞ふ下迄きつい光明寺 千羽舞ふ下は誠に光明寺 (タル七六)

建長寺や光明寺も詠まれ

千羽舞ふ時は黄色に日が当り 真鶴の方へもびかりくくとび

倉の御代に飛金もうる出来 (拾五・タル四九) (川五八)

鎌倉を羽根の生えてる金が飛 放生会虚空に金をまきちらし タル三四

千鶴は万里へ光りく一飛び (州三六)

まれ、 渡来の金糸を使った織物であ いろいろに想像して詠 「金モウル」は、印度 (》六三)

鎌倉へいらねへ籠が千残り ~を千言ふと鶴ケ (タル三六

鶴は千葉短冊金子奉行也 (11+1:

放生会奉行職には千葉之介 (川三九

殺生も功徳も源氏すさまじ (| 四二)

と洒落た句もあり、 とまさにすさまじいことであ たであろう。それでまた、 天までとどく鎌倉の御物入り 千羽鳩だと豆銀ですむところ (タルー一六

られている。 とその費用まで計算しても作

短冊を二両とふんで二千両

千鶴に万金の入る放生会

()九九

(タル五四

ことは、「吾妻鏡」には書か しかし、この千羽鶴放生会の 東かがみに影もない千羽鶴 (タル九〇

とであるから、この句は時代 鶴より七年前の文治二年のこ 鎌倉で舞を舞ったのは、千羽 を前後している。 という句があるが、静御前が 千羽の後の二の舞は静なり (タル九一)

といわれ、頼朝の前で舞を舞 ろを観音の奇瑞で助命された 鎌倉へ送られ、斬られるとこ たが、平家滅亡後捕えられて 主馬盛久は舞の名人であっ 盛久と静があとで千羽舞ひ (タル三三・五八

科人の舞が頼朝きついすき

鎌倉は度々囚人の舞った所 (タル九)

作られ 盛久と静との舞をこのように 鎌倉で無理な所望に二人逢ひ

一世一代鎌倉で舞ふつらさ

大名を下方にして静舞い

のである。 恋い慕う歌を唱じて、舞った て、「しづやしづ」と義経を 工藤、梶原、畠山を楽党にし 静は、鶴ケ岡八幡神前で、 (|四三)

柳多留の成立をめぐりて

ありません。 風潮の結果である事は云うまでも 集か続出するに至ったのは、この 延三年刊)等の謂わゆる高点附句 る附句の高点を争う風でありまし た。「武玉川」(慶紀逸編初篇實 如く其角、沾徳一派の俳諧に於け る傾向を助長したものは、周知の 前句附の附句が単独に鑑賞され からであります。

きたりなさ、十七字短詩に対する 句の抜書だけであったのでありま となしぬ。)にてもしれます。然 ったとしても、前句附に対するあ しょうか、漠然としたものではあ は、ただ漫然と単なる前句附の附 しそこに編者可有の意図したもの も句意のわかり安きを挙げて一帖 刊したことは初篇の序(一句にて 撰した「暦刷万句合」(宝歴七年八 月廿五日初開キ)より前句を省い 呉陵軒可有(木綿)が初代川柳の ても意味のわかる佳吟を撰んで発 「詠風柳多留」は明和二年五月

> 津 れ改作したと思われるふしがある 留」編集にあたり、可有が手を入 るまいか、と申しますのは「柳多 なんらかの信念があったのではあ

ります。惣句数七百五十六句、そ 仮名に、仮名を漢字に置き替えた ているのであります。例えば の一割五分が可有により改作され て百十八句の多きに達するのであ 句を別にしましても、初篇のみに (岩波文庫) をみますと、漢字を 山沢英雄氏校訂の「柳多留」

米つきに所を聞かば汗をふき 米つきに所をきかれて汗をふ

習ふよりすてる姿に骨が折れ 初ものが来ると持仏がちんと 初ものが来ると特仏がちゃん

習ふよりすてる姿に骨を折

婚礼を笑ッて延べす使者を立 婚礼を笑ッて延いす使者が

くすべもないのであります。 有は改作したのか私には疑問をと 発見されるのであります。なぜ可 こうした例は二十四篇迄各篇共

とはっきり一句立を強調している としき句姿を新斧せしに、四篇序 のであります。 も判者の発明なるへし、〈五篇序〉 たくせず一句の珍作を専らとする と自負し、今翫ふ前句ハ題にくっ とあり、更に当世のはいかいにひ 述しごとく題を略して (三篇序) いにひとしき句体を書抜き初篇に 川叟評明和元申年の頃より誹か

考迄に万句合の形式を示せば が省かれているのであります。参 らはその誌面から○▲×等の符号 ているのであります。安永五年十 物の形式の上にも変化をもたらし その特質を述べ、「万句合」の刷 むすへは手柄多し、(十六篇)と の手柄有すべて恋句世話事ばいし 一月二十五日開キ相印 『雨鶴』か よく下女杯の句ニあたらしき趣向 古事時代事趣向よろしけれい高番 天明元年には前句にかかわらず 辰八月廿五日開キ

万句合 惚句高三千百五拾六員

川柳評

是かくごく

×くらひ事かなく

右一(つ黒な汗を流して御味方 森はつせ 枝せ

海のふた取ル八二かいの感せうじ それ殿と鏡のにげる土用干 しまなのもかきね越し

りますまい。 んといいましても大英断に違いあ 従来から題は省かれていますがな ありません、角力句合の場合には 前にも全くなかった訳のものでは であります。こうした例はその以 誌面からまったく省かれているの 五日開キからはその前句題もその 符号のみでなく天明七年十月十 芝二本版 木せん

念でなりません。 その略歴すらも知れないことは残 功績は偉大でありますがいまだに てしまったと思われます。可有の 紙の下張となり陽の目もみず消え 等となんら異なる事もなく襖や壁 く、川叟も他の点者収月、蝶々子 は吾々の耳目にもふれる事もな せんでしたら本日の川柳はあるい よりこの「柳多留」が発刊されま 何合」のみにて、おそらく可有に 寛政二年七十三才にてその終焉を みます迄三十四年間の選句も「万 宝暦七年四十才にて立机より、

立への手だてであったのでありま と思います。 しょうか、大方の御示教を得たい 可有の改作も附句の独立、一句

男男こんな涙 もも

わ

世 n 小

阿

もう仕事の顔にな

2 6

て 合

10

吟

女 茶 F

甲斐性ある男苦労もさして

<

悦

兼題

男

.

中

島

石

選

川雑

人友の会

三周年と百名突破を記念して

どたん場に男

築

外

気

0

弱

小

石

兼題

素

足

高

橋

操

子

選

0

村

きさ子 小

恵まれた天候の今日、第三周年を記念し 私達の句会が光明寺会場にて二時過ぎ 花 の大会委員長、司会、いずれも慣れぬ事と ユーモアに富んだ御祝詞。本会最初の女性 日まですっかりメランコリーに取りつか 司会を仰せつかったものの、小心からか当 ったのはよろこんでよい事であろう。私、 は云いながら、まずまず支障を来たさなか

村

感

想

のものずばり。哄笑やら感心やら。 べれたものではない。汗顔の至りである。 ら見た「男」男性から見た「女心」句もそ 御気を悪くされた方は平に御容赦。女性か

ば御歴々諸氏を前に、あつかましくもしゃ と手痛い批評。事実そうとでも思わなけれ は皆さんから「生徒と間違われてる感じや」 れ、大会も無事にすんでやれやれ。こんど

皆さんの御骨折、温かい援助のもと、乳足 らずの児にもならず、すくすくと成長して

「三つ子の魂百まで」「石の上にも三年」

まぬ努力はようやく基礎だけを作りあげ

「三」という字は前進の意味を表わ

何事も出発が肝腎、

しかも三年間のたゆ

る友の会も早や、弧々の声をあげて満三才 より催された。日一日と進歩の跡の見られ

0 御出席の皆様、祝電をお寄せ下さった皆様 緒に申しあげたい。遠隔の地よりはるばる の御礼を心から申しあげる。閉会後の懇親 った。最後に村山鉄工所の専務さんに写真 んに「ほんとうに有難う。」を皆さん御一 て和やかに催された。 宴は例によって、華やかに賑やかに、そし 熱心と充分の心やり、ほんとうに嬉しか バイプレヤーであり、主役である潮花さ

安逸をむさぼりたい女性、何かよりかかり はたして応えるだけに成長するだろうか。 状である。温かい男性の思いやり、援助に ありながら、当然でないのがまだ日本の現 ばかりの会を女性が運営する。当然の事で めでとう」を云い合わねばならない。女性 す。何にしても、まずまず皆さん方と「お

たい女性。そう私達を強くはげまして下さ

れている、わが川雑婦人友の会は、ここに 今や柳界の異色として、各界から注目さ

の道をお話し下さる先生、又来資各位の ぎではないか。いつもながらに翻々と作句 るのが路郎先生、葭乃先生である。甘えす

> ことになった。 結成三周年を迎え、

このよろこびに満ちあふれている。 ホームグランド光明寺は、きよう5月18日 平日はナイター、大会は昼間というわが

である。 りの美しさは、 ばた)そのままに、 こ場内は、いずれがあやめか杜若(かきつ 庭園に、杜若、菖蒲の花が咲くところ、 友の会ならではの川柳大会 和服に洋装に色とりど -

れたことは、まことにお気の毒にたえな 口ぐせのように言っておられた藤本幸永さ せてくださる。ただ、一度は出席したいと 好陽子、大津の杉原吟女、天理の岡田花奈 なってしまった。 い。きようの大会の入選句がついに遺作と んが、五月十五日羽曳野病院で淋しく逝か 女、京都の藤川沙智子諸姉も元気な顔を見 篠山の小西富士子、西田初穂、 岡山の光

生々雇副主幹の令夫人だけに、女性の句よ 婦人友の会理事長の挨拶となる。さすがに 員長立って堂々の挨拶。つづいて中島小石 一時開会を宣言すると、内藤きさ子大会委 さて、司会藤村梨花さんによって、午後

青葉の香りもさわやかに、 開け放たれた

男性を抜けよと、その闘志のほどを見せら

百名ラインを突破する

若芝へ素足でおりてはねて み あか切れの深い素足で子を たくましい素足が稼ぐ海女 育

る

花奈女

T

石

網引の素足へ朝の陽 から 10 西 12 村 3 梨 操 ř

兼題を関めば

里

選

桜んば 桜んぼアベックのように手をっなぎ 桜んば銀のフォークを逃げ回 账 傷 ts. 恋 8 3 1) 千代美 知恵美 白 美

兼題 栄える 太 田 良 子 選

栄えてりや家相も方位も気にかける 栄えても母はカマドの火を 守 税務署がめっこを入れた栄えよう 0 史 阿 栄 Ŧ. 茶

代の身上は お世辞 恋 3 忠 九 Щ 3 111 阿 也 茶 良 選 F

席題

一見えすいた世辞でまるめた別れ道 きさ子

丸尾潮花氏の手、足、口が起る。

句に余韻をのこすことを特に強調された。

ここで司会梨花さんは、

全国からの祝電

て語られた。 題のもとに、類を紅潮させ を「三周年を顧みて」の演 ささげて進出したことども 花の会にも、友の会の句を 影者村山氏の令妹の追善活 または本稿カット写真の撮 はできない仕事を担当し、 市民川柳両大会には男性で んじゅんと語り、 がる。友の会の活躍をじゅ ンぶりにはまったく頭が下 るが、この人のスーパーマ の八丁トリオは有名ではあ へ足をのばし、 古稀祝賀 篠山へ岡

諸氏である。 諸氏である。 諸氏である。

声あり、声あり、場内に小に登壇されると、場内に小に登壇されると、場内に小

「きようはなにを叱られるのかしら?」と、母の顔をこわごわと見上げるやんちとのかりなっな目が、四ッやっ娘のような目が、四ットッと

しは禁物と、あの人なつっ膝を打たす名句に書きっぱの表現、句の内容、一読

春巣編集局

郎・葭乃両先生を圍んでの記念撮影(写真は村山氏作

された。

きさ子、チ

句を作れぬを性独自の

路郎・葭乃両先生 た。 決して友の 会の句は抽

ることがし という名句 という名句

れた皆さんをなぐさめられるという心づかれた皆さんをなぐさめられるという心づか

西尾栗不朽洞会理事長は、終戦後強くなったものに婦人の力と靴下とがある。そしったものに婦人の力と靴下とがある。そしったものに婦人の力とれてと。と、氏一た。

る。

祝辞の先

で読み上げ

を拍手の中

ここで中間披講として、席題二題が富士と、待望の麻生路郎主幹の柳語である。 と、待望の麻生路郎主幹の柳語である。 を、神聖の麻生路郎主幹の柳語である。 推蔵することは必要であるが、文字である。推蔵することは必要であるが、文字でる。推蔵することは必要であるが、文字でる。推蔵することは必要であるが、文字であるが、文字であまずいものになってしまうおそれがあるから、その表現と適正なる文字の使い方ならであるが、文字であるがら、その表現と適正なる文字の使い方の表示と、大きの表現と適正なる文字の使い方の表示と、一方に表示を表示という。

ックスになる。

「対しているの、
のののは、
ののでは、

激励されて、美喜されの句を例

・ 女が強いか。こういう句が発表された。
 ・ 女が強いか。こういう句が発表された。
 ・ 女性に「男」を作らせ、男性に特別席題女性に「男」を作らせ、男性に特別席題女性に「男」を作らせ、男性に特別席題女性に「男」を作らせ、男性に特別席題

いとは思

であった。 (一三夫記) とたん場に男案外気の弱く (小 石) 土壇場の女ごころがおそろしく(一三夫) この二句とも、女のほうが強いことを示この二句とも、女のほうが強いことを示しているから、軍配は文句を

こころよいお世辞へ顔がゆるんでき 奈良子

車

席題「半日」 小西富士子選

乳のんでおいでと半日ひまをくれ 阿 茶よくきくヘ半日待って診でもらい 登志子半日の 日 当 貰 い に 小 半 日 きさ子

*

(三才以下次号発表

特別席題「女ごころ」 麻生路郎先生選

大壇場の女ごころがおそろ し く 一三夫 投 拶 の 指のダイヤを見逃がさず 葉 で 一三夫 で かんの電話がけてくる 葉 本壇場の女ごころがおそろ し く 一三夫 で しゅうしゅう かんしゅう かんしゅう しょうしゅう しょうしゅう しょうしゅう しょうしゅう しょうしゅう しょうしゅう はんしょう しょう はんしょう はんしょう はんしょう はんしょう はんしょう はんしょう はんしょう はんしょう しょう はんしょう はんしょく はんしん はんしょく はんしょく はんしょく はんしん はんしんしょく はんしんしょく はんしょく はんしょく はんしんし

一位は山川阿茶さん

①阿茶②きさ子③千代美④春栄⑤宏子の一栄⑦陽子の白美の梨花(以下略)

出席者―路郎・潮花・花代子・奈良子・宏子・白美・メケ・美喜・朋枝・悦子・史安子・含さ子・操子・沙智子・徳子・一三夫・淡舟・梨里・梨花・良子・富士子・初穂・阿茶・小石・都詩子・知恵・章子・吟ケ・桐女・玉枝・一栄・清子・章子(酒田)登志子・陽子・美恵子・春栄・春巣・梅里・生々庵・好郎・葭乃

こい笑顔でズバリズバリ言ってのけられ、と、たった今、葭乃先生からお灸をすえらしは禁物と、あの人なつっぱしばある。

匕首のように

鞄

か

6

心配を母の白髪へ言

2

U

れ

北 麻 生 III 春 路 巢 郎 選 選

欠伸だけうまが合うてる倦 残業の税をとる灯と取られ 怠 3 灯 期 H 野 竹 伊 原 明 林

ウエストに自信がなくて着る着物 会 請 計 求 課 書 同

札束にこきつかわれ

る

部 市 上林 同 粗影

菱流

傷ついた蝶へ夕陽が 連体の疲れがたたる 原稿紙に親しむ主婦

沈

7 71 神

Do バ

け

袖

0

経 2 世

蟹ノソリノソリ春日をもてあまし

下宿屋の娘をはり合うた君

と僕

御満悦の程は手帳のおても

P

2 10

同

議会 恩

組

0

th

から

B

調

Ш

媒

靴下の派手を通夜の灯にと

から

宿直を訪えば小使室

0

浪 を

花 す

節 る

脆月恋人

は

なし

尿

失職の一人新興宗教で食うている

雑巾の汚れも世帯のあから

3

ま 300

蜜柑の皮恋のない女

寒 L

5

制

字

卒業へ痩せる

約

束

7

别

れ

瞞されたと思って買った腹を立て ちりはたきのその色合じ選り好 王手飛車されて用事を思い 夜桜の寒さを詫びる 客 を 出 連

家計簿を無視して妻の留守を食べ 野球より一票 我が家の電化三叉で 予備校が入学式を派 浪曲の好きは 花よりも妻が見とれ 女房子の名儀も使うほどに 口下手が一番痛いと ここからが九州など **関門国道** 質 欲 屋 1 済 E 手 0 V む 海 な 始 K 储 電 15 8 0 突 1) す Car 底 1) 大 股府

寝そべってお金を貯める本を読 交際費ほど進まない 恋 を 持 间

カロリーにこだわり舌は忘れられ 向 100 大 版市 板東千代美 ci

良 < 同

引とめて見ても心はあっ

ち

誘われる桜は雨にな

0

7

b 3 れ 質 司

三の糸まるめて春の夜をひ

白粉のつきさえ春を

思

to

扇より持たない指とあなど

6

Į. 织 安平 內藤台心子 -次弘

きんの、赤十字病院でし

12

11

同

坂道の上に汚 ひがみではない貧乏の気 職 0) 家 から 楽 40 柄 华 85 177

平田 実男

桃 太

郎

生

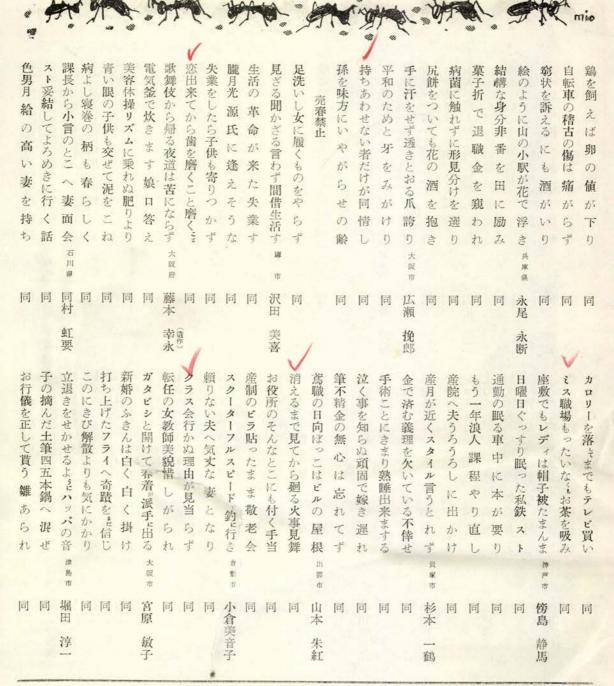
平沢

保美

嫁ぐ先は果物屋さんと言うところ 物屋さんへお嫁に行く事になっ かねがねが望んでいた丁子ちゃん 口で美しい、私の好きなお嬢さん。 た。T子は私の親友Kの娘で、 に、良縁がまとまって、布施の果 お店にも乳母車にも桃太郎 給取りより商売人の方をと、

の初夏の頃だった。 ろ、親達はえらく喜んだのは去年 と言うのを駄句って贈ったとこ 子夫人のお母さんに道でバッタリ ん、即ちT子ちゃん、じゃないT たが、このあいだの事、 「T子が赤ちゃん産みましてん」 それから暫く御無沙汰をしてい お母さんは Kの奥さ

目方一貫目もおましたんだす、オ らだした 太 . . . 」 男の子でんネ、大きな子でなァ それはお目出度う。それでどち



Kはケゲ

ンな顔をし

出てる出てるこらおも

何んや出しぬけに?

何が出てるねん、

けったい

男



予定ではないのだが、 クしている。今日はKを訪問する 初孫の誕生にお母さんはホク お蔭さんで、 おおきに K

ヘェーそれは芽出度い、

ら不思議 杯かけてやろうと を打って、 いる。Kにものを言わせ K君、 やーァ君かこれは珍らし 今日は……」 幸いKは在宅、机の前に坐って 一寸こっち向 2

*7	9	~	9	***	1	IN THE STATE OF TH		No.		1	P				M	TAY	My .	A. S.		99		1	6	D	100	, "	166
お手植の緑枯らさぬ世にも どり	湯を押して湯の出る平和いつまでも	床柱修身丙にあけて待ち小松市	市議になっても刺青を役に 立 で	食欲が出だすと見舞持って 来ず	遊んでも居れず晴耕雨読する	本人が死んだで質も値が上が り 笠岡市	スクーターの神主みんな振返えり	古稀祝う話を逆に叱られる	花の下もう薄物の肌が透き	自転車の荷台うれしい顔がのり 広島県	肥たごをかつげば走る癖がっき	水郷はいいな詩に明け詩に暮れる	倖せはどの子も夫婦むつま じ い	口笛を吹か以男になってゆき馬取県	花咲けばチクリと胸に痛む もの	木蔭から生れ変った 元 気 が 出	炬燵しまおう今朝鶯の声を き く	アメリカを見て来ただけで栄転し兵庫県	腕白を探せば隣で昼寝中	知らぬ間にパパは留守番役にされ	春日永電話を借りて話し込み	飲ませれば又あの話聞かされる同山市	歳時記に入れたい春のストラィキ	不器用を自慢に出来る金が 出来	小康に女鏡が見たくなり	良心のほかはなんにもない強み者を申	小遣もくれずよろめけとは 女 房
同	同	位守正柳子	同	同	同	木山遠二	同	同	同	杉原 愛鳩	同	同	同	鈴木村諷子	同	同	同	遠山一雨	同	同	同	宗高矢寸志	同			三上 春雄	[1]
絶安が花へのストを心配し	貧しさも肺も忘れて絶景かな	金のない暇を軽恵持てあまし具業市	税務署に友ありながら用が 無し	観光課名所を作る苗を植え	権力に屈して彼は栄転し小松市	レコードと別に唄えば音痴なり	おきまりは俺を信じて具れと云う	温度計見ながら暮らす熱帯魚西宮市	胃下垂は忠治のように腹へ 巻き	洗濯機野良着のモンペ洗わされ	血圧が勧誘員を撃退しかがり	角帯の柄さえ他所のひとの柄	貢がせるための私かとも思い	口実は花見貞操気をつけや豊中町	許す気で呼べば赤んべなどをする	おしぼりが節くれた手をまごつなせ	性格は反対なのにうまが合い	手も首も耳も飾って太って居大阪市	安物やなあとモデルに見つめられ	巖頭へモデル気軽るう立ってくれ	鎌壇の前へねんねんすると 決め	成算はないが飛車角切って見る 馬取申	夏負けと云うこのひとにある 噂	画かきでは食えぬ防衛大へ いけ	春の訪れ安クリームののび 心 地	幻滅の悲哀口笛までが音痴 *児市	久しくも映画の帰り歩が揃い
同	同	護川 梢月	同	同	関戶宗太郎	同	同	中橋川太郎	同	间	小川静観堂	同	同	石川ひさみ	同	间	同	島田 雄峯	同	间	同	北村 三歩	同	同	回	関す頭女	同

が、T子ちゃんに」 やなアー 「生れたねュ男の子が、

眺めている。一寸言葉も出ない様 た。ボカンと口を明けて私の顔を と畳みかけた。流石にKは驚い 桃太郎

産れたとなず男の子が出来たとな 出ているのや、顔になっい初孫が 「何んで君、知ってんのや」 「僕、何も知らんがな、君の相に

子。暫くして、

がそこへ、奥さんが、只今ァ…… んとちがうか?」 と帰って来た。 オ、君内の家内に道ででも逢うた 「何やいったい、コラおかしいぞ インヤ、奥さん留守か?」 こちらはトボケている。 ところ

と思てたんやアハ・・・ 程は失礼いたしました」 「そーれ見い、そんなとっちゃろ ワハ・・・・・ ナニ笑ろてはりまんね

あんさん来てはりまんの?、

先

0

川柳と健康

酒

井ひ

か

平

であるかは想像願いたい。 には。此の諺がどれ位い頼みの綱 われているが、我れ我れ十二貫級 昔から「柳に雪折れなし」と言

言う悪になり、

一そうの

を僅かだが突破する事が出来た。

、なった」と言うあんば オトーサンの背広姿が少し見良

いに女房

嫁ぐ日 不採用当社にもったいないと書き 安産で芽出度く産婆間に 産制にもれたる孫を 就職へ従兄弟の過去まで調 展望台息の切れたを 商魂は白痴番 嘲われる筈だわ シネスコを見 花見今ドロンゲー 講習の味と違 久方の光りの 宝くじ本当に当ったふるえ 書きますわよろめきまず妻のスト 十二才からを大人として風 病んでると知らず相性の 新緑の香りがしみる 中之島沈没 就職も決まり 君子危きに近寄らず通天閣 九州では俺の いい嫁を貰ろたやないかと が隣りの 隣りは息子が帰 タル踏みつづけ今年も ヤリ た娘の便り眼鏡をかけて読み の近く 华 テレ しそうなど ٣ 見合の 目にカッの 組 大 0 娘 が齢 へ茶菓子さげてい 7 蓼 阪 ムの茶屋 0 た カン V 日も決 見 ス 3 to 弁 忘 は 病 素 to 0 ル え 小さ過 X 手 直 合 桜 方 7. 2 15 腕 こ妻若 べら へゆ 話しかけ 3 わ 忘 t 向 10 仰 H 呂 1 ま 咲 建 細 20 寸 < 5 n Hi 世 n 36 理 屋 1 0 n 7 平田 笠岡 大阪 ili 高 貝 大阪 大阪 华 32 19: 加 部 vii rt: # 濕 th Hi 175 ήf 須藤 西岡 鎮浪 石橋万古人 1 同 小林守株漢 同 [6] 米浪進之助 同 竹內花代子 山 島さぎす 桃仙坊 蜻蛤 俊江 洛 醉 就職 日輪の屋根裏までは 川雄の灯もあるだろう通 四月馬旅とやっと気づいた待ちます 旅ゆけ 再婚へ家裁で取った 春宵に 精勤 乳牛が 親戚 女房 遊び場 優良児育てて 日光で写す女 サラリー 種袋こう咲く キスシーンあちらの 金策の宿のドテラもくつろ 大器晩成やっと油が 円満に別れましたと 塩昆布が 浪人と決めて机の位 旧恩を返えせず焼香 病み上り夜桜にまで 代替り仏壇の 「転車を押して話も の胸も桜 に月謝納めてよ の然をお寺でけ 0 十年ぶりに就職 夜の大阪 ばここも選挙の のを奪っ 順 孕 洋 7 一番好きでやせ 病 Z 装 ンエレジーつき給料日 て広告 花 家 誇 房 1 む 場 言 を 3 3 0 中 葉 窓 もの 金 < < 届 細 細 種 0 6 淋 夢 置 ま L 船 15 塔 洋 オー は素直 3 3 で る 迷 3 老 6 ŀ す 見 定 ル 挿 げ 5 13 そ 13 変 変 15 る T 12 n 1 3 年 东广 n 3 to 2 ŋ n UN 八代市 笠岡 9 熊 杂 宿 福 大阪府 å 本市 良與 腴 施 岡 古 at 柑 県 市 市 同 79 同 田 古 久米奈良子 同 同 阿部たけ 井上美恵子 同 高木 大前 同 本南牛子 П H 凡茶 桃里 鳴恍 道 麦彦 雄

> 大阪のドテンプラーは事 えて来たのだが、

とにかく帝国海軍

大阪

市

り指の運動のパチンコにこっ ゃなかろうかなんて言われたりし アノオッサン、 なり勝ちだったり て、 として、私は私なりに信 房になめられた話なんぞ割愛する 論此の発願には原因はあるが、女 力を養成したいと考えついた。 を叱ってもなめられない丈けの体 い、せめて十三貫になって、 が何でもおトーさんの。威酸 てから急に、たった十二貫では何 ロヒョロの私が四十才の声を聞 うわいと観念をしていたものだっ ものより味方から参らされてしま 軍人精神注入棒を尻こぶたに見郷 もならず十一貫 た。以来十数年十二貫が十三 たもので、此の調子なら敵と言う 大阪弁の抜けない私はビビって居 われ、それでなくともねばってい て嫌や気が差したものだが、 ところが、妙な事に、此のヒョ 深呼吸と続けた。三日坊主に 朝の一時間、 キリキリの にもならない。 駈け足、 、腰が痛んだり、 念を以 屈伸運 がな 女房 矢張 アじ 一個に 勿

三面 タコ 催促のない墓石がま 財 ライバルのその自惚れを平 誘惑をされる 団体の一度来たのが パチンコですられ湯冷めを上帰り 無神経ではない意地 十代 引越がみな栄 安くしろと云えば安 桜見に来たのに着くまでに 法網とすれすれにして世を 偉人伝よりもひばり 手枕になっ 春の夜の内職も 福引へさて善 賑やかな人ねと軽 アクセサリー 入学と決り自 サ枕 イズ狂 ロック建て釘打つとこが ん坊そうかそう 政 記事 しさは の売物売 恋は片 お礼を言って で機嫌直した二 楽 言信用 書 て老後の 貧 L いてる内 しるこで せずに 変り恋人また 困 5 手 転 転 0 V 人 3 かと K 車 子 族 K \$ 2 + 春 くあしら 0 隣の恋をきき が気がまぎ 忘 花 2 何 本 派 幅 光 0 迷 だ 0 朗 我 え 出 建 波 を 慢 を れ 見 女 手 風 伊 V. き V 見見 てやり 素 る 志 T す 変 な to 画 手 # 酔 か 世 渡 7 0 作 寸 持 H わ ず 直 音 打 3 D 絣 音 る 3 ち 来 る 0 春 n 伝 n 世 Vi 玉野 小松 今治 京 阿 広 大 児 七尾 箕 広 内 笠 岡 市 島県 面 都 ш 松市 島 阪 島 島 興 県 市 市 īţī 市 T 市 क्ष 市 Ø, 越智 都倉 上野 則田 松高 岡 平 木 同 福田白面 同 山 同 西 伊 万 同 山 同 同 H 本 丹柳飘子 仲 島 Щ 內 一水鏡子 ス 一路 俊見 へえ子 保夫 義夫 錦水 秀三 孤 越舟 昭 進 舟 蔵 子 - 打消 何日の 日本髪 失業が 鍬が新 スト 否まぬ 採決 初孫 牛のお産の方がよっ 嫁ぐ娘の寝ざまを炭をつぎながら 花よりも縁談まとめ 遊ばねばならず 夢でさえふたりっ 子の 歯ブラシを買うだけデ 71 逢うていて鼓動の鳴らぬ恋になり 幼き日おびえ た 監督にくわえ煙草をかみつ 余生いくばくぞ今更メー タコ焼の匂いも鳥居越えて 宝石を飾っ 子を連れて出口へ近う座をしめる 春宵をラー 合格を祝って呉れとせびり ナリ 0 知恵は積木だんだん高くつみ へ無口 句 なんぞ何処吹く風のべ 時 へ立ったついでにトイ のビ のは温泉につかってる慰労会 が出そうなとこで又酌がれ ヤも誰か呼んでるよる啼き 間にのびたか 唇 何処へ行くの 調 婿 小 10 メンつつ 30 ts を IL 街そろそろ パ 愈 耳 3 れ 地 106 きりになれぬなど < 7 2 6 パ 母が低 の針 か靴 ほど気が疲 ŀ スリ 356 < 開 陛 尻 VC 小 1 0 ル使わぬ 1 共 0) き 春 3 7 ラー 4 下 K を を 駆 レッ IL うなり 来 敷 鬼 稼 忘 < 振 履 迎 K 待 守 から 0 25 IL る 10 る れ 016 3 来 ち 唄 100 50 気 111 1 1) れ 大阪 4 阿 205 西 32 兵 800 玉 名古屋市 岡 大 岸和田市 和歌山県 野 MC 岡 Ш 阪 岡 岡 抬 Ė 県 市 市 11 ηf 煕 T 府 Thi tt 小谷 杉本 藤原 本村珍 佐內 木下 石川 河 同 細 同 板 同 越 同 御園生"北江 同 中 野三四 JII 原 原 東 智 美由 7 to 仙山 千草 隆文 若芽 真奇 つよ ちく のる 凡

儘に少し顔色が良くなって来た様 をむいた様な腺病質の子供だった が、何が効いたのかは判らない 此の子も目玉

バドミントン 家してダ ブル スを 組

家庭平和に妙と言う処。 と、朝の空気を大いに満 が先ず健康 あほかいな云わ れて居

場合、矢張り心の底に川柳と言う 願であり健康なのであるが、此 変った一つの健康法を記してみ 楽しい突っかい棒があり、 はあく迄も、 めきの為の目的でなく、 本人は真剣なのである。川柳人の ないナンセンスも結構愉しく実行 柳的明るさの為に、 しかし、 他人が笑ってもやっている ロマンスグレー たった十三貫への こうした笑え 私の場合 その川

紀

郎

青葉 だどき

倉

川柳家のつくった詩

B

G

生

水があふれ落ちるあたりに、 木が生えいてる。 私 の狭まい庭に、 丁度雨樋 蜜柑 0

水

休

THE ME AND THE MENT

団体の オペラグラス買うて一幕見に使い 避けていた人とも 大学へ娘を入 米櫃の音聞くたびに 売春の収入更 夫死して花の代金惜 夕桜下 楽隠居ペンションで生き子は学 移民老い妻なく子なく金も 御見舞はカラーで桜 亳円の釣銭で幹事を 死ぬ気などないが致死量訊 背後から酌ぐ椅子の酒酔 紋付で拝むに汽車が 逢えないで帰る夜道へ犬が 犬の恋叱っておいて手をつ 商魂はデパート 人気スター離婚も派手にやっての 心中記事よう読んどきや。母に見せ 酔ってない"云、酔いどれを持てきまし 青春を楽しみ過ぎて嫁きお 胸の線すっ 菜の花にむせびながらの近江 たしなみのお化粧養 亀を唄う気 かときかれ別 ビル 旅 山 夫の知らぬふとりよう 0 かり街を 0 れ 4 夫 僧 派手に鯉を 膝 2 お 知らず引合わせ 7 れたとも K 寒 --走 速 别 写 す 春 老 座 を 0 5 7 6 す L K うて来 院 n 言えず いてき 吹 ts 揚 餇 部 ts ts 7 d' か 世 4 す 違 寮 路 < 3 元 屋 ŋ < T 来 る Va 七 士: 3 げ h る 母 65 op 大阪 福 山形 岡 Ш 兵庫県 大 大 兵 鳥 ハワ 大阪 西 施 费 企 大 大 B 版市 岡 14 阪 庫 取 訳 木 中 阪 K 辺 702 県 市 與 熈 旗 4 市 市 M. rfr 市 市 市 127 河井 菊地 木村 杉田 前野 吉川 伊藤 半田 森本黒天子 宮政 高 司 同 田田 同 淵 中西兼治郎 室井 林 同 同 富 同 杉 同 田 永 原 [穂波子 たけ 八九九 庸佑 悦子 明美 美保 夢路 輝文 白葩 周防 夏生 士都 秀敏 吟女 第 男 4 炊事す 恋人も出来ず 略歷 病床の淋 母さんの里から届 出てくるでなかった娑婆は 海老で鯛今日のところはおごるま 初めての仲人心得を 仲人は スト妥結仏のような 先生のスト 田圃道パン屋が通 狼というてはおれど 有終の美を飾 茶柱へ見舞が来るとル 山奥へここも地盤と 時鳥なんか鳴くかと 床ずれがとれて小言が多く ボン 釣れぬ竿へト 月に一 金貸しているのも来てる花 着ぶくれし風邪曲線をもて 斜陽族遂に暴露の記 養子口又も税吏が邪 間借りして養生せよ 松葉杖に寄り V P 术 一度散髮 は娘らしさが 3 ン船瀬戸の鼓 П しさせめて 7 頃 煙 2 何時のまか板 スまでは書 流 0 n 添 2 素 す ボす 行 中 れば腹 くランド 8 5 行 る 化 顏 動 追 先 -0 暗 は 言 百 女 Vo ٤ 事 魔 逆 も 1 か K いてな 粧 12 妻 E 会 5 K から 記 ジュ引 姓 美 敬 雨 K 10 宫 冷たでき 嫁 続 す ts 唄 社 す L t 0 0 す Щ. 8 ts 近 余 食 な 言 仕 遠 派 It 3 ŋ さ IL 古 君 側 V F き る 3 U. ŋ 0 L す V 60 1) Us U え L 大洲 西 岡 鳥 金沢 西 da 西 鳥 広 大阪 大阪 西宫 大 M 字部 貝 兵 -33 児 大阪 大 大阪市 1 笠 長 石 石 IJ 取 富 T 贺 B 胶 Ex 肠 Ш 塚市 庫 川県 島 岡 Ш 111 野 陂 Th 縣 市 市 県 市 rts rtr 典 T 池田 満口 村上 保田 富永 土江 斉藤 村田 松井 中谷 神田 千石 岩田八文銭 鳥取 奥野 中 鎌田 樋口 安並 藤本ゆたか 萬代句念坊 谷本鈍愚坊 江原たつ路 高 林 增 HIJ 瀬 本 ハナ子 古意知 文女 賤女 球絵 可笑 華甫 三平 周 快人 銀子 寿栄 幸路 IF. 盤 市

> 或る秋の日に 私の家には 五人子供がいた

子供達は 縁側で 夏蜜柑をた

ぞのあとから 五六本 **蜜柑が** をして ひょろひょろと 毎年

空襲で踏みにじられたり 子供達の愛犬に引裂かれながら 一本だけ 辛らくも残って 十五年 十五年

五十センチぐらいのちいさな蜜 柑の木は 根元ばかり太くて先きはひょろ ひょろだが青葉どきになると 青い葉が また新らしくふえて

子供達の 賜り物だ これはま

も和やかだ

光にとどこうとしている

蜜柑の木は

もうすこして

H

地球は、丸いなと思う

ハワイと川柳

白砂竹

砂旋風



資本主義と共産主義との対決が 来る第三次世界大戦はおそらく白色人 第四次世界大戦はおそらく白色人 第四次世界大戦はおそらく白色人 種と有色人種との民族的闘争から 種と有色人種との民族的闘争から 種と有生と経済面で立遅れた アジャとアフリカが、来る第三次 世界大戦には其の無尽蔵の資源が 世界大戦には其の無尽蔵の資源が 世界大戦には其の無尽蔵の資源が 世界大戦には其の無尽蔵の資源が 世界大戦には其の無尽蔵の資源が 世界大戦には其の無尽蔵の資源が 世界大戦には事となる軍夫なる軍事 大方とが、生存上激しい競走相手と なり遂には敵となるからで有り過 大方での形来てそ、有色人種中に於ける

> 唯一のものとして輝やかしい運命 占める有色人種の居住するハワイ ワイに於ける全人口の約過半数を アジャとアフリカを祖国に持つハ が約束されて居るので有ります。 り、更にアメリカがアジャとア 向上したことを実証するものであ に対し、アメリカ民主主義の大き は、アメリカがアジャとアフリカ に、アメリカが立洲を許すこと 以って、アメリカ民主主義の大き び公使と領事等の外交官に、優秀 い夢である平等精神が、更に一歩 来得るのであります。 前進した事を堂々と世界に宣言出 い夢である平等精神が、 時てそ、アメリカは大なる誇りを なるアジャ人系とアフリカ人系の フリカに駐在するアメリカ大使及 一世三世を起用する日の到来した 更に一歩

事であります。それは非常に勇気をとなる最善の道は、それは他民族に限らず、我々の社会生活でも族に限らず、我々の社会生活でも族に限らず、我々の社会生活でもが事を先きに憶せず言ってしまうい事を先きに憶せず言ってしまう

効果を挙げれば我々が、常に笑っ

暗い人生も明るくなっ

抵抗力を強め、エネルギーを増す

もので有ります。次に笑う心理的

幸の腹の中が判って誤解を抱く心事の腹の中が判って誤解を抱く心事の腹の中が判って誤解を抱く心配がないからであります。それから真裸になる事であります。形式と名誉と優越感や劣等感や其の一と名誉と優越感や劣等感や其の一と視の中で共に喜び共に泣き共にと裸の中で共に喜び共に泣き共にとれるので有ります。そこに義理生れるので有ります。そこに義理生れるので有ります。そこに義理生れるので有ります。そこに義理生れるので有ります。そこに義理と人情の文学で有る川柳に人種とと人情の文学で有る川柳に人種とと人情の文学で有る川柳に人種と

人間の持つ喜怒哀楽の感情の中で笑う事が如何に現代人に必要且で笑う事が如何に現代人に必要且で笑う事は体液をアルカリ性に変有る牛肉は酸性で有り欧米人の主食で人の大好物で有り欧米人の主食で人の大好物で有り欧米人の主食で大える化学的作用を持ち、従って大いに牛肉を食い大いに笑う事に依いに牛肉を食い大いに笑う事に依いに牛肉を食い大いに笑う事に依いに牛肉を食い大いに笑う事に依いに牛肉を食い大いに笑う事に依いに牛肉を食い大いに笑う事に依いに牛肉を食い大いに笑う事に依いたりで、我々の健性とが五分に中和して、我々の健性とが五分に中和して、我々の健性とが五分に中和して、我々の健性とが五分に中和して、我々の健性とが五分に対して、我々の性に変した。

くなると、血もあり涙もある真実 対熱血になって、感激性が一層強 アルカリ性に変化して、冷血の反 ようになり、大いに笑えば体液は 腹を立てて鉄拳を飛ばしたり、 る不正なる悪人共の不道徳行為に 方になって、正直者を食い物にす り、善人であるが故に正直者の味 なる人間性をとり戻して善人とな て毎日愉快な日が続くと益々笑う るが故に、不具者に大いに同情し を叩いて憤激したり、又善人であ に不親切なる著者共の親不孝に卓 不遇なる老人の味方になって、親 美談も生れるのであります。 ンとナゲ出して与えるような社会 て、己れの財産を惜しげもなくポ 叉

文明国の欧米人は実によく笑います。又未開国の野蛮人も又実によく笑います。それは歴史と伝統と風俗と習慣の別と民族の別とに関係なく笑う時が、人生で一番人関係なく笑う時が、人生で一番人間を幸福にしてくれるからです。そとに笑いの文学である川柳に人る理由であります。

ます。

り其の川柳の傾向も現在日本に於するハリイに於ける川柳は日本人有るハリイに於ける川柳は日本人一世がアメリカで有る二世、三世一世がアメリカの環境に有りますが故らない特殊の環境に有りますが故らない特殊の環境に有りますが故らない特殊の環境に有りますが故い、将来は片仮名となり英語の国で有る英語の国で有る英語の国で有る英語の国で

臭い古川柳の中で今尚脈々と生き 伝統と真の日本人の風俗と習慣と 的を有する時、真の日本の歴史と らんと欲する時又欧米人も同じ目 三世が、将来彼等の祖国日本を知 を異にするもので有ります。ハワ ける現代川柳の傾向とは其の歩調 社会観と人生観は、苔の生えた古 イ及び米本土に於ける日本人二世 骨董品が日本文化のシンボルとし 其れ故に現代日本から置き捨てに 明治中葉以後のものは西欧文化の 値が発見されるからで有り従って こされた古いものの中に其の真価 て居るからで有ります。あらゆる て遥々と海を渡ってアメリカへイ とか歌舞伎とかカビの生えた古い なった浄瑠璃とか義太夫とか能楽 模倣に過ぎないからで有ります。 へと旅路を急ぎつつあるのであり タリヤへ、フランスへ更にロシャ 本文化の真髄は現代から取り残

ハワイに於ける日系人社会は已に第三世の時代に入り其の総人口は約二拾万人の内日本語を読み日は約二拾万人の内日本語を読み日と云う小さい日本人社会となりました。第二次終戦後約三千人に及した。第二次終戦後約三千人に及した。第二次終戦後約三千人に及した。第二次終戦後約三千人に及ことは此の小さい日本人社会に大さばさんとなって新渡来しましたことは此の小さい日本人社会に大さばない。

世三世に日本民族特有の長所美点 親心として日本民族の血を継ぐ二 ことと、文化的には第一世の温い 異がないほどに経済力の蓄積した 洋人との間に、文化生活水準に差 新しい段階に達しました。先ず政 治的にも経済的にも又文化的にも やハリイに於ける日系人社会は政 が急にピッチを上げて上昇し、 した。その反面に第三世の出生率 派なアメリカ市民を養成すること を教育し、更にその民族的特長を 隊兵の目醒ましい政界或いは官界 治的には第二次大戦に従軍した除 あります。 を目的とする日本文化熱の勃興で への進出と、経済的には日系と西 死亡率が急激に増加してきま 杯に発揮させて、アメリカ民 義の理想に一致するような立

であった日本語放送を今日はアメ を各々その部門の代表者が毎週 のプログラムは短歌と俳句と川柳 リカの友として復活し、日本文化 ら先陣を切って、昨日まで敵国語 市にあるラジオ放送局十局の内か 放送局が第二次終戦直後ホノルル てのみ、その将来性が約束される のであります。幸いにもKPOA 展性は、川柳が日本研究機関の つとして、二世及び三世と外国人 一味の時間を開設致しました。こ 川柳愛好家が激増する事によっ 端としてハワイにおけるその発 日本の生んだ川柳が日本文化の

> 回ずつ放送するもので川柳を語 期に際し適材適所ハワイに於ける も良く理解し此のデリケートなる じ尙且つ日本人二世三世の気持ち 知人多く従って外人の心理にも通 氏は又英語も達者で外人社会にも で有りました東京都出身である総 木に再び青い芽を吹き出させたの 戦勃発と同時に伐り倒れた川柳の を築山快夢起氏が担当し第二次大 適人物と申されましょう。 川柳界を代表する指導者として最 ハワイに於ける日系人社会の変遷 快夢起氏の洗錬された標準語と

大なる使命が存在するのであり 世界を真裸にして仕舞いました。 的にも更に世界的にも川柳の果す 的にも社会的にも民族的にも国家 そこに川柳が諷刺文学として個人 きにメスを入れるのであります。 を批判し、外交を論じて世界の動 り経済を教え、更にイデオロギー を成しめて改心させ、政治を叱か ルのために我々川柳人は神秘を究 つ独特のスリルがあり、そのスリ であります。そこに川柳のみの持 まで、その一切を真裸にするもの るもの更に宇宙と地下にあるもの 川柳もまた個人と個人社会と社会 の其の一切の境界線を取除いて、 民族と民族国家と、国家地上にあ み、個人と個人社会と社会民族と し、悪を叩き善となし、不孝者 現代科学は遂に人工衛星を生 国家と国家、地上に有るも

独 h

与えましたが、最近とみに第一世

アメリカから帰って

河 村 H 淌

ろう。多額の金銭を安出し、あれ これと心配した時の無駄も大であ これは何んというナンセンスであ にも持込み過ぎていたとしたら、 た挙句の果てが、不必要品を余り 某商店の印刷物を中心に纏めあげ のパンフレットを頼りに、或いは なところである。生産性本部から が出されていたことでもあきらか 打合せの度びに持物に対する質問 の殆んどがそうであったらしく、 した。これは私だけではなく団員 そしてその中の一つに、旅行者と 心配したことがらが沢山あった。 の宿舎でこんないい事を考え出し と考えていたところ、アナポリス ばということが一番頭の中を支配 しての身廻品はどんなものを持て 旅行に、どうすればいいかと迷い 員に選ばれてから始てのアメリカ た。それは私自身、第五次視察団 に対して私なりのものが残したい いがないので、私は何かこの視察 諸兄が取り纒められることは間違 視察団関係についての諸報 その道のベテランである先輩

ルームで無料サービスのコ

度の旅行なれば二枚もあれば充分 分のものなのであるが、 サな用意の必要はなかったのであ は前にも述べた通りでこんな大ゲ れている。ハンカチは?。これは自 のトイレットでもふんだんに置か 分に用意され、湯上りまで準備さ ンカチを六枚も持った。 鼻紙の不必要であることを知っ る。タオルは何れのホテルでも充 だ。私は日本を発つ前、タオルを た。これはアメリカ中何れでも同 確信しているので、これからの私 なったのだが、恐らくこれは許し る。『そこで』私の出しゃばりと したが、ここで始めて私は手拭き、 ーヒやらミルクを頂戴してホッと カレーギに着いたのは十一時十分 の独り言をお聞き流し願いたい。 て貰えるか、黙認が願えるものと と息。性理のためのものを放出 羽田空港を発って数時間、アン 手拭きは紙ではあるが何れ チリ紙を相当数、 消費国アメリカの特色なの 然しこれ そしてハ

> 達は余りにも持ち過ぎていたの 思い出せば、ナイロンは一枚で充 買い求める必要まではない。石ケ で結構だし、新しい物をわざわざ スなんかも普通内地旅行に使う分 無駄も甚だしいものだった。ケー ースまで買ってと、今から思えば 用することもない大きなスーツケ もので下着類、靴下等がある。 もあれば沢山である。これに似た 分だが、まあ用心のため予備一 けに五十仙も支払わされたことを 自分で洗い乍らもプレツシングだ で充分に間に合い、綿カッターは カッターシャツ然り、下着類然り 寝なければならないからである。 にして乾いてしまう部屋に私達は だ。何故かと言えば洗えば数時間 だから帰ってからは恐らく使 私など一枚のナイロンシャッ

1/1/2/

- は世界的常識 生々した男性美をつくる
 - 爽快でヒゲソリがたのしい
- 新强力殺菌剤G11配合で一層强力/

桃 谷、 順 天



川柳行脚 (十)

水谷竹莊

まい 淡舟 淡舟

私の川柳と名物たべ歩きの旅も私の川柳と名物たべ歩きの旅るりをつげる事になった。

巡礼に逢う旅四国なればこ

りの地四国にはお遍路さんの鈴の のは 音が澄んだ空の下で、ささやかに ひびく、そして瀬戸内海の鯛にめ でまれ、太平洋のカツォの独壇場 百として、料理が発達して有名な皿 る。として、料理が発達して有名な皿 る。として、料理が発達して有名な皿 る。 として、料理が発達して有名な皿 る。 ともであろう。

源平

である。
である。
である。

源平屋島の合戦の折、弁慶が将

本にふるまったのが始りともいれ、また高松藩で客をもてなすのい、また高松藩で客をもてなすのしても古い郷土料理の一種にはち

大きな皿に季節の魚と野菜とを 大きな皿に季節の魚と野菜とを さっな盛り合せ方がしてあるが、ちょような盛り合せ方がしてある見事なものである。この源平鍋が自慢の店は高級の「川六ホテル」か「大の店は高級の「川六ホテル」か「大の店は高級の「川六ホテル」か「大の店は高級の「川六ホテル」が「大の店は高級の「川六ホテル」が「大きな皿に季節の魚と野菜とを

魚せんべい

に一枚ずつ魚の味がちがっている 瀬戸内海でとれる小魚、タイ、チヌ、メバル、海老、いいだこな がの類に、メリケン粉、片栗粉、どの類に、メリケン粉、片栗粉、どの類に、メリケン粉、片栗粉、どの類に、メリケン粉、片栗粉、 からからに仕上げんべいの様に、からからに仕上げんべいの様に、からからがらば、カイ、

席吸物にもなる。
席吸物にもなる。

名物の看板駅の方へ向ける 型 秋 を探がし 豆 秋 豆 秋

小豆島の味もろみ

高松から船で一時間、淡路島に次ぐ面積をもつ小豆島、壺井栄女次の一二十四の瞳」でのどかな島の外しさは紹介ずみのところだ。この小豆島の醬油は知られている。が、もろみはその原料だ、このもろみに特殊な味つけをしたものをことではカヤクといっている。新鮮な胡瓜に添えれば、モロキッとなる。

だけでも副食品になる。

絶対必要。札入弗入はふだん使用

はつ

それから土産を忘れないで下

ていればよい。

安全剃刀に替列は

日取換えてくれる。としたら私達 はなく爪切かナイフぐらいを持 化粧ケースにもあるのだが、ポ 巻二、寝巻は平素使用のもので結 ゆくのはナイロンに願いたい)寝 イロン一、綿製品一、但し着用して る。替ズボン一、カッター二(ナ いが斯様いうものは先ず必要であ するので、 れは時季というものが相当に関係 るのかということになる。 は一体どんなものを持つ必要があ ンはホテルにふんだんにあり、 マードの予備は是非ほしいとこ したまで。ポマード及クリームは いようだ。ハンカチ二枚に化粧 あるので一本は持っていた方がよ 対するものではない。パンツー、 るのだからと買われる人に対し反 構、特別にパジャマだの何んだの ろ。七ツ道具は特に取揃える必要 れておく必要があるから特に強調 ケース等に入れないで手提鞄に入 余分もほしい。 を忘れる人はあるまいが練歯磨は ケースは必要。又歯ブラシ練歯磨 と言いきりたいが東京でのことも オル、湯上タオルは全然必要なし。 靴下一、服プラシーは必要品。タ 何故なれば寝巻のままで自室から と心配する必要はさらさらない し帰国してから特にこれを着用す 歩も出歩けないからである。但 いち概には言いきれな 又この種はスーツ

川柳雑誌社特製

送料(一冊分)八円 一冊(五〇枚綴)三〇円 一冊(五〇枚綴)三〇円

しきっているんですよアメリカ きましょう。ええそれくらい乾燥 はがれて了うのですと打明けてお 論切手には糊が付いておりますが がはがれるからとしごく簡単。 のような粘いものを。 忘れないでほしい。それも不易糊 い。針と糸と卸る必要。それに糊を みがある。文房具は持ってほし 程度だが胃薬は持ちすぎていた感 邪薬、胃薬、飲み過ぎ予防薬に仁丹 相当量用意されたが持ち帰ったも うも必要のようだ。パスポート人。 るから触れられまい。腕時計はど も自室以外では使えないんですか のでなくて結構なんですよ。これ リッパは絶対ですね。然し良いも られるのに余分は不必要です。ス じゃありませんか。但し持ってお ラは安いものだから買ってもいい の財布で充分だ。鍵チエーン靴 な。私を例にとるとビタミン剤、風 のが多かったんじゃなかったか 社に頼めばいい。薬品、これは皆 ろをみれば。呉れなければ航空会 か。今迄の人が皆貰っているとこ これはみな呉れるんではないです ら。字引その他は人それぞれによ 理由は切

景色にもあき駅弁の紐をと いとは知りつつ名物土産 万 翠

松山の五色そうめん

朽洞会の洞友前田伍健先生が居ら が並んでいる。倚この松山には不 ルト」など、名物を売っている店 の温泉には、伊予ガスリや、 うめんといわれるようになった。 美麗五色は唐糸の如く美し」と御 蕪漬がある。又ここから近い道後 涼しさを増す松山の自慢の一つ。 たべるに、ふさわしい、色が一層 それに五色、色とりどりで夏の打 沙汰があったというが以来五色を したが「九重の雲上より遊糸賞術 七一六一三五)のころ、朝廷に献上 水した庭に風鈴の音をききながら この外に松山地方の名物に緋の 唐糸の如く」いうが、その細さ、 松山の五色そうめんは享保へ一

名物のそうめん話 の種に た

土佐のさわち料理

れる、のが「ヨサコイ節」である。 きかせてくれる。そして明ってく っぷりに、はりまや橋の恋物語を と、美人ガイドがきまって色気た 高知へ行って観光バスに乗る

> 高知には川柳雑誌社高知支部が ヨサコイ、ヨサコイ 坊さんかんざし 買うをみた 土佐の高知の、はりまや橋で

柳談に花を咲かせた。 して頂いて一夜、会員諸兄姉と、 が訪問した時、早速歓迎の宴を催 迷窓氏、川雑高知が毎月発行され に重きをなしている支部長、 ある、会員は六十一名、四国柳界 ている。編集者、川竹松風氏、 私

土佐の郷土色を感じさせる。 さらに「据物」といって塗物の台 わせにしたもの、盛られた大皿は の」「すし」などいろいろ盛りあ 上もある大皿に「なま」「組みも にのせる。こうした趣向が、まず というのが挨拶なのである。会員 酒の強いのには感心した。 ところで土佐の高知で面白いの さてさわちとは「皿鉢」と書く 一尺五寸から大きいのは二尺以 「酒といかんでどうすりや」

うのは刺身が中心「くみもの」は 自分の好きなものを自分の皿にと 菜を配したもの、そして大皿から カツオや海老などの魚に季節の野 なかにデンとのる、「なま」とい ってたべる。土佐人の豪快な性格 すがたのまま刺身にされて、 きづくりである、二尺位の大鯛が このさわち料理の圧巻は鯛の生

> がある。料理ではないが土佐のか から生れた料理であろう。 つをぶしは、全国に名高い名物 たたき、かつをめし「酒盗」など この外に土佐の名物はかつをの 旅ス々一年中を宿の飯

このへんで私の川柳行脚を終りま ありますが、余り長くなるので、 名物行脚で行きたいところも沢山 というわけにも行かず、まだまだ

なで ぬぎすててうちが一番よい もう旅はこりたと足の豆を 旅先で妻に済まない線を越 (おわり) 灯 府

TEL 29 6684 御集会には階上御利用下さ

心斉橋大丸北の辻東

ありませんよ。あなた自身の土産 れるんですから。眼の前であけて 貰った人はきっと大喜びをしてく 百本、そして郷土民芸品の五ッや そう言わずに日本煙草の五十本や 六ツ。勿論高いものでなくて結構、 です。誰にやるんだって?、まあ さいね。勿論団としてのものじゃ

うのではあるまいか。 ともであると思われるので話が合 餞別から考えねばならないから頭 なこともならず二十円、三十円の もあったと聞くが、地方ではそん 以下はあっさりお断わりと出た人 る。この問題は多少に不拘頂いて が痛い、これは恐らく百人が百人 いる餞別なるもののためで、千円

しても十ドル内外。ロンソンは八 ー十ドルともなればこれでもう百 変だ。何故かと言えばパーカーは が合うが、さてこそそのあとが大 イターは四五個とまでは何れも話 い。そこでパーカーは二三本、 われわれ階級ではそうもならな が沢山持て、又買える人は別だが の万年筆、ロンソンのライター等 六十一が二十二三ドル。五十一に 探索することになるが。バーカー ないのは当然。そこであれこれと たら、日本人としては持って帰れ メリカ土産にこんな印があるとし

残り少ない金額で数をこなそうと けられているが、問題はその他オ そしてこれらの行先は概ね決定 ドルは完全に吹っ飛んでしまう。 かの一、二ドル品がわんさと買い ンのネクタイとかネクタイピンと するのだから辛い。そこでダクロ ールスターキャストにある。あと

なかったものにお土産品があ 四十二日間一日として頭から離 メードインジャパン。何んとア い込むことなかれとかしこみかし ス、ワシントンあたりで慌てて買 サンフランシスコ、ロスアンゼル いっても一番安かった様だ。ゆめ 米国第二の大都会。ここが何んと 日本でも一躍に知られたところ。 とは情けない。アルカポネの名で タックスの安いところをすっぱ抜 あるので誰かが必ず案内するだろ を用意せねばならないようだ。 五大湖の中心街。人口三六二万で 廻ったところだけでのことだが、 の一番安いところといっても私が 土産のための商社はニューヨーク ても土産のためのお金は二百ドル それにウイスキーもほしい、シガ で余儀なく買う数を制限される。 多いと税関で何とか言われるとか には触れずに素通りして、各州で レットも持ちたいとなると如何し 込まれることになる。これも余り シカゴ。何んだか聞いた様な だからここではその店のこと

寺田等日本人経営の店が

独り言 帰国して愚痴をまとめ こみもおそう。

ありし日の井上信子刀自 (故劍花坊夫人)



持病であった神経痛も、ここ三四 母は大変長生きを致しました。

年殆ど起らず、食事もいつも美味

しくいただけて、この分ならば未

人達が落語漫才等に御腹をかかえ の寸前迄もて余していたようでご ます。この笑えない寂しさを、死 て笑っておられる中に、母だけは 説よりは随筆や、歌集句集に親し 近迄続いておりました。従って小 渇くように本が好きでしたが、本 ざいます。 敬老会に招かれた際、 み、紀行文を愛読していました。 ポッンとつまらなそうにしており しようとする努力が、九十近い最 の中から何かを得ようとし、勉強 半面このために、去る年土地の 多くの御老

が何より欲しいと申しておりまし いと思っていたが、今は温かい情 若い頃は自然ほど良いものはな しかし若い頃旅行した土地の

親しい方に御便りする気力が無く なったことが、何よりの悲しみで

最近は良い句が作れないのと、

ございました。若い頃から、

が、そのままはっきりとひびきま は好えておりまして、喜び悲しみ の日やらと申しておりました。ま もお仲間入りしたいがそれはいつ れます度に、傷心強く、早く自分 います。親しい方が次々と先立た 倒れる前日迄信じていたのでござ だ三四年は保つのではないかと、

ことに九十近い人かと驚く程、頭

思い出は、何よりの慰めで、殊に 井 E 母

すうして楽しんでいた様子でござ 呼んでいる寝床の中で、幾度か反 信州の山の温泉など、自分が巣と

に似た性格の人は出て来ることで ば、もう少し頭角を示していたか る人でした。所を得ていたなら 等は母の特色だと思います。話し い努力、思慮の深さ、自然に人情 冷やかにも思われる魂、 いる若い世代の人達の中にも、母 とも思われます。笑いさざめいて 合えば深く、相談すれば真実のあ に対するデリケートなセンス、之 正しさに徹するあまり、時には ねばり強

母を直ぐ傍から失いましたこと

に久しぶりに遇った。

子

鶴 大 石

れるのである。 の日の思い出を瞼のうらにえがか と路郎主幹は、二十数年前の、あ 剣花坊氏の告別式の当日だった」 「信子さんに最後に会ったは、

せておられる。 "剣花坊逝く"という一文を載 九月十一日夕、私が社の柳翁

います。

時から告別式が終えん地であ 涙の信子夫人、令息、令嬢等 長寺に向った。 朝鎌倉へ着すると直ぐさま建 へ向けて発った。私は十三日 臨むため十二日の夜行で鎌倉 交誼を想い、最後の告別式に まれることだったので多年の る鎌倉の建長寺内正統院で営 計を知った。 十三日の午後二 で柳壇の巨豪井上剣花坊氏の 忌(実際の忌日は二十三日)

にお見うけした。

ので、感慨もまたひとしおのよう

悲しみでございます。 日をいくつ重ねても消えなか

話半ばにして母立ちゆき

窓」山雨楼記 本誌昭和九年十月号の ーとして、 「編集の

記事を夕刊で知るとは全くゆかし き機縁と言うの外はない。 柳壇の巨星剣花坊氏逝く」との 九月十一日本社柳翁忌の日に、

その十月号に

ば、今春また信子夫人も逝かれた 親変のあった路郎主幹にしてみれ 関西の川柳人で剣花坊氏と一番 氏の近時の心境を語られた。 信子夫人は淋しそうに剣花坊

新聞を見たら 友人が死んでいた

たことである。 のようにくりかえしくりかえしし この句を頭のなかで、 いまさら

編集局·一三夫)





私 何 T 4 法 -12 ho giri'

岩 本 多 久

本社句会の不朽洞杯すら一

など思い上ってる訳ではない 度も頂いた事のない私の作句 年中忙しい仕事をもってい 諸兄の御批判を仰ぐ意味 編集部のお訊ねに答えて しい人の参考になる 床に就いて寒 という風に後 乗り物の 時間はも 人を 張り出して添削、 場で書きとめて置く(但し十 さて月末の勘定書 ものになる訳である。 まま) それを前記の場所で引 七字にまとまったものはその 十七文字にこだわらず、 じた事で浮んで来た句想を、 ない」とか「あそこは勘定が いつぶし、悦に入るくせに、 に芸者や仲居に酒を勧めて酔 な男が、 俺はこんなに呑んだ覚えは たものが一応、 えば、 料亭へ行くとやたら 私の友達で酒好き 修辞、 川柳らしき を見ると 推敲 その

みようとペンをとった次第。

る私の作句道場は、

人に待たされたり、

合、

帖を離さずに、見聞した事、感 私は二六時中、 それらの場合にど かという 小さな句 句帖 高い」とはやく。 分は忘れとり」と書いておく。 酒好きな 男、 女に否まし そこで私の

句作のみに専念する

段の作句法を除いては特別、

る前の一とき、

りらしい娘が正面玄関から這 又次に、 入って行く姿を見て面白いと 前を車で通った時、 となる。 これを後で句にまとめ 二三本 求書呑んだ覚えは 先日、 阪大理学部 毒けし売 川柳塔 たのが

になるであろう。 になってないが、 行く」と書いて置いた。 玄関へ毒けし売りが這入って 科学の殿堂、 しこれは難かしくてまだ句 阪大理学部 やがて迷句

D B である。 は、こんな作句法による場 から生れる珠玉が多い。 が、矢張り、 句があくまでいい場合もある たら同じ句想で必ず三句 であるが、兎に角、 替えてみる。 次に、 最後に、私の ンが多いと言わ 添削、 練り直したも 時には最 推敲等 句にはフィ 一句 れ 0 る訳 は作 出来 問題 初 合 0

書斎で読みものに飽い 間 での寸暇に、 た時 型

> から として纏ってくる。 それが句想を生み、 の言葉に関連して、 と読んでゆく。 まわずめくっ の広辞林をバラバラッ って体験し、 えば、 が雲の様に湧いてくるー 風雪」という言葉 て、 見聞し、 するとどれ 次から次 処

0 句が生れ、 げてくる 風 超然としてひまわりは 雪に 耐えてそろそろ 睥睨」から III

遂に一句 自分がか 感じた かい 0 何が生 牌睨

れ

潔癖しから

柳塔

禿 ある。 作という事に尽きると思う。 先生のお言葉の通り多読、 名句を二三十句選んで暗 きたが、作句上達の要は、路郎 という風に出来る訳である。 そして、 潔癖の父愛用の蠅叩き 以上、雑然と書きなぐって 常に復唱する事も大切で 調子のよい先輩 川柳塔

15

記

四

麻 生 一路郎 先生

11 柳 とは 何 かい 送価

過し、今日に至り、将来に動くか、しかも的であるその川柳がいかにして発生し、経詩型、それは伝統的であると共に常に革新 明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる その作り方は、味わい方は――以上を最も もろが十七音に圧搾された諷刺と諧謔の 絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽― 柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。 川柳の作り方と味い方

取 次 所 JII 柳 雑 社 著者が答えているのが本書である。

五〇円円

ーそうしたもろ

短

東京都新宿区払方町27



直 原 面 Ш

出来ない様です。 り抜けることもしのび込むことも く大空に伸び拡がっていて、くぐ 突き当り"誠に苦しんでいます。 が、私は今 "川柳と言う壁に来て て突き当り」と言う句があります しかもその壁は、地の底から高 私の旧作に "貞操と言う壁に来

ってしみじみと味っています。 村操のあの苦悩を、私は今身をも けごんの滝に若き生命を絶った藤 かって天国に恋を求めた人々 "人生不可解"と絶叫して、

否定し去ろう」としている私の 在価値を疑い "川柳そのものを 魅力を失い # "川柳そのものの存 ろうが、なんと言ってもその最も "心の中"にある様です。 大きな原因は、"川柳そのものに 詰り、能力の限界などがあるであ 素材の枯渇があり、表現技術の行 造るものの中には、私自身の川柳 何時も思うことですが、例えば 川柳の壁!! その川柳の壁を形

> 柳の中でのさばり返り、巾をきか て見たくなるのです。 の世界にあったであろうかと疑っ ることがありますが、私はこうし って声高らかに読み上げられてい かれ、時には "天の句"などと言 現型式の旬が、いつまでも現代川 来ている。一種の"古典的」な表 年も二十年も昔から言い古されて に手をそめた頃と現在との間に、 だなあー』と思う事があります。 に身ぶるいを感じ、つくづく『嫌 た句を聞く度に、その『嫌悪感』 して、方々の句会で佳句として坊 いる。 "……しようかなと思い」 私自身実にくだらぬ句だと思って "……とふと思い"などと言う士 体どれ丈の進歩があり発展がこ そして十余年前私が初めて川柳

達のなんら進歩性を持たぬ、保守 これ等の句を佳句として抜く選者 て受け入れる人も人、そして亦、 示さず(これを)当然のこととし の句になんの不平も不満も抵抗も 作る人も作る人だが、一方これら 又こうしたあり米りの定型何か

的な感覚の低劣さ、古さ、不甲斐 ることさえもあります。 なさに人ごとながら腹が立って来

くてはなりません。 言われていますが、これでは余り にもみじめで淋しき極みと言わな "川柳は人間とうやの詩だ"と

す。 るで空念仏に終ってしまいそうで "生命ある句を作れ"なんてま

界」があるのではないでしょう もっともっと幽幻なそして情緒 で明るく生気あふるる『感動の世 川柳にはもっともっと高遠な、

事実でした。 世界』が存在しているのだと言う の壁の向う側に、 "川柳二次元の ついたところは、私を取り巻くと の目に見えぬ遠い世界を探し求め はこのことにふと気付いて日夜そ て漂い抜いた揚句、やっとたどり 川柳の壁に苦しみ悶えながら私

生活を送っていられるのではない と歩みつづけられて来た諸先輩達 達し "川柳の花園』で楽しい川柳 は、或はとうの昔にこの世界に到 でしょうか。 然し、川柳と共に三十年四十年

作句を通して、作品を通して私達 若しそうでしたら、その喜びか

うのです。 体的に表現し の目の前に具 て欲しいと思

りを投げあた る羊の私達 えて欲しいの に、川柳に生 きる希望の光 君が心配し そして迷え

目にもの見せて欲しいのです。 々が長い川柳生活の血と汗の苦闘 よ『これこれなんだぞ』と判然り 史を通じて戦い取った戦果は、見 あり発展があったではないか、我 の間には、見よこれだけの進歩が ている十年昔の川柳と今日の川柳

で来る人は実に多い。 ませながら川柳の世界に飛び込ん 大きな期待と希望に胸をふくら

様もよく御承知のことと思いま おびただしい数にのぼることは皆 から姿を消して行く人達も又実に を打ちひしがれて淋しく此の世界 て、川柳に裏切られ、川柳に希望 が然し、その修業の途上におい

如く終りはまるで処女型で、四十 会の状況を見ても、初めは脱兎の の様に頭をもたげて来る数々の句 そして亦、各地に雨後の竹の子

言うことではないでしょうか。

こうして折角川柳学校に入って

安産のく べく早目からおのみ下さい。 ワダカルシュームは妊娠中なる も何時の間にやら一人減り二人減 人五十人で花々しく発足した句会 ビタミン入小粒二〇〇円

とか五人であるとか言う句会が多 います。 立てて行くのはただの三人である いことも又よく御承知のことと思 り果ては四十人五十人と減って行 って、最後まで残って句会を盛り

いるのでしょう。 が一体この事実は何を物語って

当らず、ただ彼等に "裏切り"と も無ければ感動を呼び起す句も見 と、即ち生命力のみちあふれる句 等の魂をゆさぶり、魅力を感ぜし める句が実は少しもないと言うこ の句の中に、彼等の興味を引き彼 会や色々の柳誌で押し付けられる "絶望感"をあたえる句のみだと (川柳らしき) おびただしい川柳 思うに川柳だ川柳だと色々の句 夢は果てしなく高く大きい。

知

(一九五八、三、一二記

思う存分歌い上げて行き度いと思

私は私のおりなす作品を通して

愛せずにはいられないまでに!

て

61

高三と高一の娘が、石坂ものの小説の、

「アンザンシって、なんのことだろう」

と、頭をひねっている。で、見てやる と、案山子(かかし)なのである。

このように、あて字を使った川柳も、

と、現代の川柳がわからないとなれば、 その発展へ多少の妨げが横たわるのでは

0 東野大八氏や品川陣居氏の原稿は、

親切な文字をならべてくださる。

はまごつくことであろう。

「兎に角……」 ——とにかく。 ことばに、兎(うさぎ)が出たり、角

ないだろうか。

ある行(ぎょう)を指でおさえて、

慈光』に浴し、川柳をこよなく

そして世の全ての人々が "川柳

ち合いたいと思う。

る が

九 7

その喜びを全ての柳人達と共に分 何時か、その日こそ私は絶叫して

そなたを征服し得る日は果して あゝゝいまわしき川柳の壁よ! それの様に

ー来ては去るうたかたの柳人の

川柳の壁を一時も早く突き破っ 家の責任だとも言えるでしょう。 は、これは私をも含めた現代川柳 来た生徒達を次々と失って行く事 しがれて窒息してしまうでしょ しなくては今に壁の重圧におしひ て、『川柳二次元の世界』に突入 ともあれ私は私を取り巻くこの

ずいさぎよく此の世界から消え去 の時こそ、私はなんの未練も残さ 界から『抹殺』されてしまうでし って行こう。 ょう。この壁が破れなければ、そ くしたもろもろの夢も水の泡の如 くはかなく消え去って、川柳の世 作句生活十余年にして川柳にた から

> 批 育てましょう 評家を 金 井 文 秋

うと思えば、句を鞭撻してくれる 句力を伸し、 行くかも知れないが、より以上作 批評家が育たないのだろうか、決 してそんな事はないと思うのです 雑誌が一種位はある。川柳界には の文芸誌を見ても大抵批評専門の 批評家がなくとも作家は育って 川柳の雑誌には批評が少い。 いのちある句を作ろ

あります。

が作家なり選者なりに気兼をする しい理由はいくらもあるが批評家 せず、柳誌の面目の為に罰則を以 痛快な批評を書かれたのを心なき て報いんとした。その後日ものが たりは知らないが実に残念な事で 句の悪い所を批判をするのに難 柳人はこの意気を育てようとも

りませんからね。 と思います。誰れも憎まれたくあ る勇気が出ないのが本当でないか 由の一つだが、それよりも実力に 自信がないのと、なかなか実行す

句評と言っても選に遺入ったも

の巾を広めて選句と没句の批判の らいたいと思います。また課題吟 廃して、批評か添削本意にしても 部を指導されたのですが。 柳子氏も永い間この方法で空堀支 る方法も悪くないと思います。白 にその選者なり特定の人が発表す 表するのが無理なれば、次の句会 なった句の至らない点を指摘する のを批判するのが難しければ没に な批評か鑑賞かわからないものを のもよいでしょう。会場ですぐ発 雑誌に出ている入門講座のよう

二本立で行くのも一方法でしょ

批評家がほしいのは当然でありま めるのは気が楽だし作家にも喜ば

らない。 例に上げられるような気がしてた のが普通だ。句会での句評を聞 れるので大抵この方にしてしまう て当りさわりのないものばかりを いつか風船堂氏が柳誌「鵜」に

と言う事も、仕事に忙しい事も理

句の批評と言っても良い句をは

すがに新聞社の方だけあって、読者には の)があったりしては、今の若い人たち

「……同志」と「……同士」。同じ志 (こころざし) をもつストの闘士の場合 は同志であろうが、男同士、女同士で飲 んだり食ったりする場合に××同志では ちょっとおかしいと思う。

新感覚の句で、今の若い人たちへ手を 川柳人口を増やさねばならない 文字からくる "古い"といった印 象をなんとか除きたいものである。

不二田一三夫



研究してほしいのが私達の望みで 多いのではないでしょうか、とに う。これによって選者の思い思い かく批評家を育てる為にいろいろ の批評が知られて参考になる事が

大会前日の十八時、

吉永縣着

夜

引

きでその印象を深められ、

吉 四月二十日十二時より 永 町

時



正座の人前列左から・八重子・あやめ・雷山・栞・蔵乃・多久志・春県・久米雄・方大その後列・美音子・愛子・興呂志・護治・瀬花 ・十九平・七回山・一晋・魏句楽・麥太樓・立つている人左から・正州・幸倫・一声・某氏・表流・某氏・鑑谷・某氏・選罕子・美善 某氏・梅風子・鉄人・自鎮句・駄流児・某氏・万女・某氏・三林坊・陽子・某氏・派平・奏伝・秋月・流風・美飛・浮美・清春・竜泉

で頂く。

創立十周年記念川柳大会

る所)を手にした葭乃先生は、始 は吉永町で一番高い山で霊場のあ て談笑。今日やっと出来上った備 酒にむせ乍ら、 ろしよろし」を連発。淡舟氏はお された頃に与呂志氏が盛んに「よ 永らく住まれていた竜泉、万女夫 二十時近く大阪万代池のほとりに めて逢われる支部会員と自選句を 妻、幸仙、一声、永流氏等が出席 柳談に花を咲かせ

楽氏の美声、寿巣先生の「青柳

氏も出席して賑やかになり、娯句

は葭乃先生の少女時代の歌も出て に合せて踊られる葭乃先生、

乍ら降りて来られ、次いで与呂志 いガラス越しに見える山裾に、 膝をくんだ頃は、暮色ようやく漂 そう多用の娯句楽氏が坐り直して 舟氏及春巣先生はさすがに懐かし 内し、お疲れのこととは思い乍 あやめの三人がお出迎えして御案 われ、ここでは娯句楽氏八重子、 流氏の運転する車で久米雄居へ向 かに降りられる。かくて一行は永 デッキから先ず淡舟氏が手を振り そ咲きの山桜が白く夕もやの中に ら、早速前夜祭の幕をあけた。淡 肉でもあればと思うのだが……、 所であると葭乃先生に説明申し上 々には猪、狸、猿、鹿が出没する - 金の春の脊。何はなくとも掬ん **寿巣先生、葭乃先生がにこや** 興を添える。せめて今宵猪の 前夜祭にふさわしい一刻価 久米雄氏がこの附近の山 団。到斎した列車の り万女さんの「名曲をちぎって闘 が出ているとほめられ、 続く山つつじ」との句はよく感じ とき」「永流」を読み上げられ ねと「我が妻を他なき美人と思う は非常にいい奥さんをお持ちです が来」を批評して頂く。 を合せ」「一声」この人は真面 りの贈り物に一同感激を新たにす ら葭乃先生も未だ何にならないの 見られないことでありローカル色 日を徐行する」の二句は大阪では 立場から女の弱さを説かれ、やは して無口の朝の靴磨く」は同性の も同感される。万女さんの「喧嘩 る。竜泉氏の「汽車弁のうまさは たり」「お説教有難いけどしびれ れ、更に「信心に凝って商売上っ な人であると早くも性格を見抜か ばらくは酔わされ、新人への何よ の他万女さんと同じ着想を持ち乍 の濃厚な句であると説かれる。そ いた配達夫」「すれ違うバス雨の 東岸に手渡され、前夜祭は最高潮 及不朽洞会より贈られた優勝杯を る。やがて寿巣先生より川雑本社 がある等、 に達する。創立以来の支部員正州 適切な先生の句評にし 永流氏 **寿**巢先生

を見て頂く「一本気の父へ家中気 評をして頂き、主として新人の句 人々々にその個性的な句の御批 籠より、 とその世話をしきりにやかれる淡 依り幕を閉じる事とし、春巣先生 て、いずこへゆきしか…… を…君はバイブを、 く全く若々しい声でした。小鳥は 氏宅まで送り備前支部の 氏と共に再び永流氏の車で娯句楽 舟氏、ゆかいな与呂志氏は襲句楽 の前夜祭も遂に寿巣先生の陥落に 時はたちぬ…… 歌詞を手帳に書いていただ お聞き及びの方も少ないと 君は我 小鳥は胸毛 遠く消え去 つのとし 感激

四月二十日、 あったが、路郎先生の句碑「古く した田舎の大会風景ではあった れる者、表面はいかにものんびり 散策しながら席題の句作にふける 氏をあわてさせた。附近の山道を 出席者相次ぎ大会に不馴れな受付 見えになり、 朽洞会理亦長西尾菜氏及副理事長 氏宅に見えられ十一時過ぎには不 であった。間もなく遠路七面山、 生を御案内したのは午前十時過ぎ れている大森娯句楽氏宅へ葭乃先 とも僕には仁義礼智信」の建立さ 珍らしく朝から晴れた住き日の 句碑の見学に行かれる者、珍 い牛神社の坂道を上って行 本多久志氏が思いがけなくお 承平の三氏が会場近くの同 柳大会は十二時よりで その他陸続と遠来の

そろ歩きを思わせて呉れる。雨に ある。大釣温泉の景も夏の夜のそ

帰阪へのお土産のお仕入れやら、

鳴く河鹿の声も山峡を思わせる。

としお美しい。山峡に添って登っ きの雨も上って眼に沁む若葉はひ

て行くバスはつつじと桜の満開で

皆様のお見送を頂いて寺元より

準行きのバスに乗った。朝まだ

た私達は葭乃先生、美喜さんと共

雑婦人友の会鏡野地区を終っ

丸

知恵美さんの御厚意で友の会の

銘深く満場の拍手を浴びて降壇。 爆笑。会場の酒好きな方々も安心 ミックスされて淡々と語られ、感 る講演は医学と川柳の話をうまく をすすめられる。五十分間にわた 川柳を習い川柳を続けられること いるが、川柳家である北川博士は くよすることは禁物でありその為 きを知る者も知らない者も一斉に られたと結ばれれば、同氏の酒好 短命ではない事は、古人が例証せ 米稀なりと古くは言われていた 奇術等を習うことをすすめられて せられたであろう。長生きにくよ 山大観氏等を例に酒飲みが快して を毎日飲んでいて長命であった横 畳が入り、笑いがさざめく。一升酒 た栞氏より「医者の不養生」と半 て語られ、最前列に坐っておられ が案外高位にあることを飄々とし ける死亡率順位では医者の死亡率 が、最近これは人生七十年近米多 加えられて、面白く人生七十年古 固くるしい医学の話に、川柳味を しと変ったと説かれ、職業別に於 の方が長いと言われる博士の話は れ、医学より川柳を学ばれた年数 リントを配布されて軽妙に始めら 講演は用意された統計と記録のプ 巣氏の「長生きと川柳」と題する って行われ、つづいて医博北川春 年間育成された浜田久米雄氏に依 奇術家である医者は趣味として 11

と輝き大会に一段の光彩を添え られた。当日の天位入賞句 朽洞会より贈られた優勝杯が燦然 年記念大会に当り川雑本社及び不 に移った。披講壇上にはこの十周 り、次いでただちに席兼題の披講 を祈る」との川雑本社及び玉島の 満場再び割れるような拍手が起 津田耕水氏の祝電を披露すれば、 御盛会を祝し今後の発展 大森娯句楽選

内一声、永流氏等は転手古舞を演

後開会の辞は備前支部を創立し十

11 れる 助太刀の妻にあとからひねら 牛の瞳に人間何をあわてとる 縁に出て田舎の星を大きく見 「田舎」直原七面山選 助太刀」林 葵丘選

満月を眺める子供に母がない 眺め」若本多久志選

鏡野から

奥津温泉へ

兼題「十年」浜田久米雄選 十年も延びた寿命へ灸をすえ テレビーで見たと年寄負けて 「テレビ」西尾 伊久野 巣

煤煙の中で著草のびて行き 若草」田垣方大選 あやめ

H 神棚へほこりを蓄めてよく儲 急患に女医の素顔の有難さ 「女医」北川春集選 一津田麦太楼選

二次会へ刺身を食った折を提 刺身」麻生葭乃選

甫

美

閉会の辞は記念撮影が会場に於 即興の画筆が借りる刺身皿

> ことであった。 杯を備前支部の浄美氏が獲得した 栗氏多久志氏が忽ち天位地位にる トピックは席題第一の「牛」の娯 を代表して感謝の辞を述べて大会 賞して貫祿を示されたことと、伊 句楽選に早くも理事長副理事長の やかな懇親会に移った。この日の の幕を閉じ、直ちに会場に於て賑 頁を加えられたことを支部員一同 依り創立十周年を迎えた備前支部 会を迎えその歴史に輝やかしき一 に、葭乃先生を始め諸大家の御来 て行われたあと、大森娯句楽氏に 人賞であり、注目の第一回の**優勝** 陽子、あやめ三女性の天位

あとがき

に変らず十年間続いて来た。今後 生を師とあおぎ、先生の句碑「古 くとも僕には仁義礼智信」を中心 雑備前支部は終始一貫路郎先

の郷愁があるからであろう。路郎へに育てられたからであり、恩師へ 先生に依って育てられた岡山県下 雑調の見える事はやはり路郎先生している人々の句にあきらかに川 けた癖はどこかに表われている。を否定したとしても親から譲り受 元川雑に属し現在は他吟社に属 って居ります。 支部は高くかかげていきたいと思 数千の川柳人に郷愁の灯をも備前 出(しゅつ)らんの誉を得たとし 人々であろう。 句が生命ある句である事を信ずる 生のこの句が会員の心の中に生き けられて行くであろう。大会開催 ても、恩師に変りはない。子が親 ら参会せられた方々もこの句碑の ていたからであろう。県下各地か 的な奉仕と協力があった。路郎先 にあたっては支部会員一同の全面 もこの句が世に生きている限り続 恩師はいつまでも恩師であって

永松東岸記

柳友への句信の絵ハガキなぞを求 温泉に向って部屋を出る。溪流に さるやっと疲れもとれた頃、各々 持ちの二合瓶をあけてすすめて下 を抱いた庭に面した一室に落ち着 **蔥乃先生を残して町に出た。色** 早速備前支部川柳大会からのお手 々な土産物の店に足を止めて早速 いた。先ず食事の膳が運ばれる皿 いた一行四人は川西ホテルの泉木 淡暗にひびている。奥津温泉に着 水嵩を増した溪流の音は日没近い 杯の鮎が目につく。葭乃先生は 咲いている。冬眠から覚めた蛇が き、れんげ草が咲き、たんぽぽがに開いた様である。すみれが咲 な花をつけている。春の花が一度 る。鶯が啼いている、泉水の鯉が 開、権が咲いている。木仙が可憐 残り桃の花が咲き、桜の花が咲い 大きくはね上っている。梅の花が 恵美さん迄が子供の様に喜んでい ている。山肌はつつじの花が満 の句信の作句に頭を痛める、 宅、入院柳友と次々にたらい廻し なたへ出そう、先ず川雑と留守 めて戻って来る。一組八枚さあど 翌朝は晴天風に散る花吹雪に知

山から大阪への帰途につく。 とが出来た。十一時十五分、私達 名物の奥津の洗濯ダンスも見るこ は驚いてやめさせようと叱ってい 首をあげさせようとしている。私 ると、知恵美さんが竹で蛇の頭を **葭乃先生が小型カメラを向けられ** いられる。お天気が好かったので のレンズを蛇に向けたまま笑って は落ちついたもの、じっとカメラ をしそうな顔、さすがに葭乃先生 る。美喜さんは逃げようと廻れ右 叩きはじめた。カメラの蛇へカマ 石垣にどくろを巻いている。早速

末席の不平若い妓来てく れず 共稼ぎ不平は休みまであずけ

不平言い言いおんなじ顔へ票を入れ



不 平

]1] 博

也

選

社の不平バーでマダムにくだを巻き 子の不平ギクンとさせる事をいい しやべらせておいて不平に釘をさし 不平あるかと親分 高手 不平だけ言うて家裁の世話になり 不平言う代り会社を休ん どき 不平だらだら幹事辞めない癖に バスの中今朝の不平をかんでみる 飛 車 三林坊 三四郎 凡 静 寿 舟 悦 古 子 倉 馬 栄 竹 遊

親方の耳へ不平が伝えら 義理の仲不平云われず淋しいな お布施が少いとお坊さんにもある不平 新入社不平は言わぬことに決め 仏に免じてと不平なだめられ 嫁く気だが不平もちょつびり言って置き 子に不平言うまい僕に過去があり 縄のれん分けて不平を酎に変え 嫁してから不平を云かぬ娘に変り 何不平あるのか娘だまり込み 井戸端で議会の不平ぶちまける 不平云う積りで酒の度を 過 宗教家世間と同じ不平持 母親へ不平がみんな寄ってゆき 毒舌家不平を笑いながら 言 不平もうそれだけかいなと聞いてやり 先生へ不平の言える育ちょう 不平など言わず春には花が咲き 不平云いたいのはこつちゃと噛んですて 不平しか云えない口がよく集い 不平等ないと盃手 に 持 た ず ズケズケミ不平を聞いているマイク to 兼次郎 八九寸 むじな 進之助 七面山 不 雄 周 黙 變 南 庸 銀 敏 季 文 春 水 同 暁 女 雄 子 堂 宗 佑 明 贅 声 甫 鶴 噪 鳩 年

惠二朗 圭井堂 静観堂 アルバイト月謝の不平のべて売り こっちにも不平があるとまくし立て ヒステリーに聞けば不平が多すざる 不平とは言わずにそっと座を外し 紋付で不平をかくす父も座 下役の不平 末席の不平を妓聞いて 酌 唇嚙 7, 05 る 南牛子 薬 同 同 同 同 雄 光 秋 4

サラリーの不平を税吏言うて去に 不平組の方から酔った声となり 先ず不平ないねと社長押しつける もう一軒不平を告げるとこが留守 保 同 同 麦 夫

末席の不平をみんな支持したし 末席の不平ジロリと睨まれ 相槌を打てば不平のキリがなし 牧 漣 同 人

奥さまの不平が女中へまだ響き 昇格へ不平を聞い た 私 立 同 男

常連の不平女将にとりなさ 不平家を体よう言うて左遷させ 老人の不平明治の良さに触 代仕男 同 同

尻馬にのった不平がまだたたり 不平など言わない顔で酌に立ち 里の母泣いて不平を聞いてくれ 附添いへ不平が言えて癒えはじめ 不平忘れし人々よ 日 0 寄 進 宗太郎 同 同 鳴

妻の不平へ御 がらくたの不平へ幹部酌ぎ廻り 尤 8 御 尤 专 隆 美

当然の要求ですと云う不平 寄り合いの不平は帰り途で云い 慰めてくれて不平も云うて去に

みのる

真

奇

云わいでかいと肚に据えかねて

輝 高

文 志

焼香の順序がボスの気に入らず

十九平

希望欄うまく不平にふれておく

同

優勝楯に挑む 川柳コンクール

川柳まつ IJ

名物紅提灯に白一色の爽やかさ。

本社

主催年に一度の川柳まつりです。 味と反響をよんでいます。 会場で授与されることになり、大きい興 柳友お誘いの上、賑やかにご出席くだ 本年は特別課題路郎賞の優勝楯を当日

★ 日時 会場 光明寺(電話の九二六〇) は日本橋三丁目下車) 目バス停前(市電下寺町又 大阪市天王寺区下寺町二丁 七月六日(日)正午開会

兼題「長生き」 開会の辞 天才 演 島 乃 選 郎巣庵栞

各題2句 ★用紙は立六寸、横一寸二分 ★投句だけの方は郵券三十円 同封(メ切七月四日) (又切一時三十分) 松江梅 中島生々庵遇 本水客 里 選

恍 蛤

光

の柳鑢使用のこと

席題 五題当日発表(各題2句

(子切二時三十分)

姑が嫁の不平を不 思 あの人の不平は僕のとも 不平組があるとは耳へ入って居 左遷地へ行って不平はもう忘れ ほんとうの不平そばから口をそえ 依願免不平を持っ 形身分けになって不平の口を切り 妻の不平又お隣りを例に 尤もな不平一応メ 放っといてくれと不平が手酌で居 岸さんを恨めと不平押え 残り火を集めて不平組 ンドン屋不平は家へ置いて出る てい モ 談 1 6 遊 to 引 2 から 寄 0 V 噂 古 古 れ 0 九呂平 宗太郎 蜻 囊 美 光 同 鵜 白溪子 鳴 陽 同 舟 蛙 流 恍 郎 71 蛤

孫

玉 34 半 休 選

家中を荒し回って 採に手を取られて渡る交 残された孫を頼りに鍬をとり 孫抱きに来いよお金も持って来い 風邪気味の膝へも孫が抱かれて来 おやつ代添えて孫の守りたのまれる お孫さんですかえ四十気がめいり 駈出した孫に腹掛やっと さ 孫があるこは見えぬ酒場のベレー帽 つぎつぎに孫を回って老たのし 孫 から 叉 去 点 10 美音子 白溪子 みのる 晃 俊 豐 牧 井 史 見 年 蛙

精出して早よう孫産めとは恥かしい 日曜を待つ楽しみの孫が 盆栽を採が摑んで 日 祖母の手は孫ひくものと心得る その話古いと孫にしてや 嫁おいて孫へ揉めてる老 孫のこと触れぬ便りが物足らず 七光り孫のとこまでとどき兼ね 人でもいいから孫を早ょう産の 継を孫がとりもつ隠居 一鍵の晩酌曾孫あ の子の中に混っ 曜の雨に降られて孫を P て 慌 孫 T 夫 3 6 10 出 部 元 抱 婦 来 気 屋 世 30 れ 代仕男 越 肇 凡 同 祥 巖 高 舟 鶴 休 月 倉 志

娘 0 戾 b 静観堂 八九寸 鈍愚坊 むしな

手ぶらでは孫じいちゃんとも言わず 孫の意地通してやった背の丸 引揚て来た外孫が亦た バイバイという初孫の手がきれい あまやかせた孫を此頃もてあまし 孫たんとあるのに拾い屋で暮し 言い難いことは孫の口を 拾円をせびりポケットさがす孫 じいちゃんは叱られるのと孫見抜き おとなしく寝ている孫を抱きたがり しなび乳孫が握ったまま眠 初孫が笑って家 混血の孫連れ村へ 二人を許す可愛い 孫 4 が 皆 出 か カン 笑 来 り 10 0 主井堂 光 華 維 鵜 愛 初 晃 水 定 幽 保 恒 甫 岗 打 郎 鳩 甫 堂 月 康 谷 美 維

> 孫に負け老妻に負け目を へそくりがあるから孫がすいて呉れ 孫連れて居るから紙芝居が見られ バイバイをする孫の手が瞳に必みる 細 83 鵜 美 惠 藤 舟 汀 朗 波

馬になる甘さを孫がしって居 それほどに孫は私を好いて居ず 痛いこと孫に言われて嫁 孫に手を引かれて小言忘れない こんなに賞めても祖父の手に泣き止ます 目的があって孫の手肩をも ちょこちょと孫先ぶれでやって来る 気の若さちゃんちきおけさを孫に和し 孫を呼ぶ時は姑の コイショと立って孫に笑らわれた \mathcal{T}_{i} 客 B から 僧 細 3 三四郎 十九平 寿 兼 保 実 主 夜 贸 進 男 夫 男 水 潮

反対はしたが初採抱いて 孫よりも母の小さくなり 孫の代には役に立つ苗を 村長の孫は 孫を抱くと近所がある 共 産 党 から < 散 給 植 好 歩 5 え き 兼治郎 A 雄 漣 一林坊 茶

Vコント ロールしている孫を母は待ち 天

宗太郎

孫米れば家族それぞれ芸をさし

句念坊

地

ケチン坊の孫に貰ったアメをなめ

露

子

呈 入賞句発表 特別課題 賞 ★兼・席題天位 林 ★葭乃選天位に 生 路 郎 選

★総合得点二十位まで(同点は 不朽洞賞 家が優勝した場合は川雑本社 雑支部、準支部に属しない作 別課題優勝者に路郎賞★優勝 者所属の会に優勝楯を贈る 優勝楯は明年七月返還、 JII

の獲得となる)

+

秀

会 富柳会 閉会の辞 ・みおつくし・変助会・3・3・3 辻·杏林·南海電鉄·帝化·交通局 王寺局・川雑桜島・川雑豊中・鳥ケ 院・川雑にしなり・川雑堺・川雑天 川雑玉造·川雑大鉄局·川雑西宮病 川雜本社·川雜阿倍野·川雜淀川 参加の会 (参加者全部にお土産進 呈)ー路郎揮毫うちわ (大阪府・大阪市) 岩本多 志

* 散会後有志器親宴

(会場・会費等次号で発表 大阪市住害区万代西五ノ二五 雑

電住吉甸六〇八一

作句していただきます。 いていない支部は六月本社句会当日通題ずみですが、まだ支部句会を開 を発表いたします。なお各支部には 句してください。六月句会当日に題 方は、六月の本社句会へ出席して作 いていない支部は六月本社句会当 ▼どこの支部にも所属していない 特別課題について

	1	健
旨事	川柳不	The state of the s
.,	小朽洞命	

19

同角近源

雜沓 家內 結論は知らずにとけた角砂 子を連れた日の食堂は中ジョ 老妻をねぎろうサロンパ 修学旅行覚えた町を行き戻 見くびって出す灰皿に薬の名 開店記念人を小馬鹿に しとやかに乗ってラッシュに蹴とばされ 昼酒の効めまぶしい陽に慌て 円満の裏は敷かれて居る惨め 菜の花を歩けば蜂にはばまれる 辞職してやらぬ居すわりいやがら まだ冷える春を素足に味あわせ 捕状今日は其の身にふりかかり 無沙汰の白髪の友と逢うもよし 娘仲悪しく勤めから呑んで去に いの恋ただ親切がほしいのみ を遠くから見る松葉杖 から小言いわれる程に老い せのラッパも奈良の土産に した粗 スを張い 和歌山市 大阪市 須坂市 4治市 大阪市 松山市 月 長 石 高 橋 前 米 秋 野 本 原 沢 月 峰 沐 宏 柳 緑 伍 省 暁 文

若土市西戸木上戸奥中島 中島島 本井 没 大文食 古 孤 翠 普 丹 々 志蝶子 栞 方 浪 光 天 路 庵

明

庫

天

方

洞 中岩田高中白中長 麻 指 友 村崎中安村川田 谷 助 生 導 直愛辰六祐 朋 守 一 路 账 二郎 吉吉維 微 郎

安石 複河 西 直 太 友 国 吉 福 羽 須藤 白 市 築 西 宮 井 大 三 内 前 古 高 寺 ー 川 八 西 小 丸 黒 正 松 三 川 岡 川 南 村 森 原 田 淵 弘 田 田 佐 崎 本 砂 岡 山 垣田 上 阪 輪 藤 山 川 沢 井 市 彫 い 西 尾 川 本 江 鴨 村 理 倪 セ セ 市 良 貴 半 井 妄 柳 豆 満 旋 暁 夢 錦 不 湧 形 晩 一 北 花 一 鋭 下 わ 無 測 紫 水 梅 美 好 郎 洞 六 満 村 山 子 山 休 堂 夢 葉 秋 年 風 舟 起 風 二 三 水 翠 郎 海 麗 浪 々 郎 を 鬼 花 香 客 里 笑 郎

杉 弘 水 尼 新 木 武 德 小 清 逸 菊 浜 桜 尾 布 石 北 石 大 吉 金岩山 吾 小 木 平 後 佐 真 福 木 野 田 木 河 牟 谷 綠 川 下 部 永 川 水 見 沢田 川 崎 施 井 川 曾 西 田 章 井 崎 川 郷 西 口 尾 藤 野 鍋 田 村 村 垣 村 村 田 山 内 久 白 南 程 包 加 灯 松 米 不 方 筑 面 春 民 八 水 文 一 阿 玲 雄 賀 希 梅 白 一 丁 水 味 方 千 瑞 一 山 慶 荘 助 也 王 林 美 明 子 竿 闥 雄 水 正 川 人 巣 郎 歩 車 秋 伸 茶 人 々 峰 志 志 水 灏 路 堂 平 大 容 川 哲

那山山山益田黒阿浜大有足若長大服家青福姫黄田岸間阿林長西飯富山龜小野山大小佐增谷本田田永中木形畑西働立林谷泰部本木島田瀬代 島 万野野辻降岡根山林本口鶴沢野田光葉島季貞島彈一胡迷芳春草三句九富遊鉄夕美尋南丹 万甦井竹白淡白晴文吞秋喜史卜耕郎光荘贊女耕正杉蝶窓仙雄右司楽平至星児鐘秋四柳子的光蛙青香舟星峯月水花由葉占民

愛情 受情に打た

ヘビリオドを打つ人が出来 ペンになっても飼犬ようすてす

陽 周 力不女 若

ほの

13

のとした愛情に老

を生

良 初 万 白

子稙

甫

羽根のばす日 愛情は津波 受情の注射をした 受情のはげしさ男おび

待てり里

行

0

癌

10 倦

寝 怠

7

女 美

れ 改

心

す

る

淚

美

太陽の愛へとけ込むサンルー

ゆるやかに女の愛情カーブして

美

宣

愛情の問題

ですとす

T

見

世 き 6 n

7 期

花代子

振りあげた手は愛情と思われず

ひさみ

愛情に因縁つけて

置 子 ts to

清

子

愛情のきびしい

鞭に育て

6 愈

千代美

水をやる花の愛情

示 号

す

スミ子

愛情をうたがってみる倦

期

15

衣食足り愛情分裂

症

K

栄 女

愛情の鞭を亡くしてからわかり 黙ってるその愛情を信じ

富士子

息つめて男の肩を見て居

吟

古

ŋ

同

愛に飢え情に飢えて派手ごのみ お互いに労をねぎらい共かせぎ 本妻を戸籍の上でだけつ

よし子 そと枝 月の

夜を歩き愛情たしか

8 ba

3

同

愛情をまだ腑におもれままで受け

き

あつさりと好きと云えない意地を張

俊

江

気機のような愛情でも

信

同

んでても川へ流してやる金魚

個

女女

変情と別にお金の

欲

同

愛情もソロバンずくめでゆくドクイ 愛情を見抜れまいとする

な

朗 7 元

美

愛情へ素直になれぬほどにす

同

の波長が合わ

ぬもどか

阿

茶

ばやくまい夫に白髪みえてきた 愛情をいたく感じて眼をそらし

奈良子

芽

6

さは愛情さえもゆがめられ

金 泥

題

麻 生 葭 13 選

旅の夫もって嵐の気づか 情を捧げて悔いのないおひと 情に飢えている娘に縁がなく がさしてから愛情くずれかけ 情なんかとうに捨てたと夜の花 情のカスリモンべに散る船出 情を小出しにされて不満なり 情が叱って辛抱させて 1t 知恵美 枝 伊久野 都詩子 朝 登志子 花鶴美 の子 子

酒不志坂伊木川清神永菊野永藤小高高橋浜津海藤松竹小森村馬松本下稲岡臼岡田椙水 三 水田 達村 端水谷 藤田田 松井原 橋 崎本野田野井村内池本上場川田山葉村井田村原谷東東 ルッ素 東明字操 維幸奇太呂春万圭げ泉づ夢杜二清鳩牛林夜藤一谷 平夫司男子悟酔峰郎平む郎岸朗柳子声男童楼史日古三お子る生的朗潮花耕坊潮波善水

飯 野 中 児 野 中 建 有 安 杉 中 松 辻 西 阿 平 和 酒 西 伊 武 早小 勝 三 土 石池 新 笹 戸 野 津 松 架 佐 長 夫舟石志羊十介羊美一維浪水子太平子子染仏菜生ち児子山志心子子楽甫花楼堂春鳥

岸竹吉辻高樋野河德光江大本久仲林山野田梅西岡城石池桝宮岡山多中橋西岡池前菱小水加 鏈 里月子な 遊汀 む美子谷都三男く丘児 念子一晃子柳雪村児生志男み平子路郎 美字秋 人茶花

> 村津林田魚石欄 上田 中住倉 旭千昌狂満旅 童舟男二潮風關

川維小松·大駅寺支部合同

月句会の席題として作則が本年から本社の六

淡舟、



• とと彼・城南・味平・城南長女

会は五月二十九日(木)

▼南海電鉄(大阪市)句 階会議室で開催。 は五月廿四日(土) 川柳会(大阪市)句会 ▼大阪通信病院鳥ヶ辻

Ŧi.

和くらぶで開催。以上 六時半難波駅高架下親

(産つている人) 左から寿美繪・松木・桜人・正柳子長男・正柳子・とよ・茶傳 ・幸路檎・とし鸛(立つている人) 左から香蕉・宗太郎・明維・茶の香・東 • 千太郎 • 全鄉

本社六月句会は七日 \pm 午後

社の六月句会へ是非出席されたで特別課題を作らなかった方は本 部の五月下旬又は六月上旬の席題 りで発表されることとなった。支 特別課題吟を六月句会の席題とし て課しその入選の結果が川柳まつ 催される。七月の本社川柳まつり 六時から下寺町二丁目光明寺で開 (路郎師提出の特別課題の規

> 廿二日(日)正午金沢 ▼ 柳都十年記念全国 沢市大衆免片原町蟹の 仲·絵·寸劇·泥·格 市下小川町玄門寺幼稚 大会(金沢市)は六月 ▼蟹の目社杯争奪川柳 推理・故障・安くない 園で開催。兼題各三句。 一十二日必清送り先金 なき牢獄。投句六月

報の如く六月二十二日(日)午前柳大会(新津市)は既 風柳の各選者名を記入の上

町牛神会館で開催。大阪からは葭 乃女史、 記念句会は四月二十日(日)吉永 雑詠二句。六月十五日新津市駅前 平、周魚、紋太、雀郎、三太郎、夢 九時新津市新森亭で開催。選者鴨 都川柳社必着のこと。 川雑備前支部(岡山県)十周年 奢巣、栞、多久志、潮花、

日、日赤支部で開催された。▼川 雑岡山支部句会は 五月十七 10 柳大会は五月五日午前十時山陽記 千古居で開催。 雑名古屋支部では五月十七日夜、 多数参会同地の発展を思わしめ 念館ホールで賑々しく開催。柳人 復興博協赞広島特産品輸出振興川 予期の如く非常に盛況であった。 者を合せ五十一名の多数にのぼり ▼広島川柳社(広島市)主催広島

七時半心斎橋の葭明居 何会は五月二十日午後

で開催。

▼杏林川柳会(大阪市) たので特に注意) 句することに変更され

寺支部合流の山中温泉吟行句会は 四月廿日(日)既報の如く決行。 ▼川雑小松支部(石川県)と大聖

参加者は二十五名に上り盛会裡に

出雲地方の柳人多数参会非常な廃 川雑出雲支部の尼絲之助氏を始め 歓をつくした。 会であった由。 三日(日)木次駅前かね平で開催。 むらくも十周年記念句会は四月上 ▼川維木次支部(島根県) 及川柳

催の下に長門一宮福王寺で五月十 八日に物故者坂田良坊・三田周年・ 高橋かりたる追悼川柳会を開催さ ▼川維宇部支部、川維下関支部共

同好会句会は五月十日法院居で開 ▼川雑岡山電報局 原一善居で開催。 ▼川雑倉敷支部句会は五月四日椙 (岡山市) 川

催されてはや十ヵ年になりその 県吉永町に川雑備前支部が昭和二 席の下に(浜田久米雄氏宅に)開 十三年四月二十四日麻生路郎師 何集電泉(川雑備前支部) 句集·柳誌 岡山

与呂志氏ら参加。地方出席 部。 をモットーに精進したいずれも努 人、廿 「いのちある句を作れ」というの 一名の句集が刊行された。 非売品発行所川維備前支

意によって魅力あるものとなった より刊行せられつつあるが清新の▼柳誌能因(白河市)は本年一月 柳能因会価四〇円。 すると。発行所白河市本町六二川 く先師先輩に求め誌面の充実を期 観がある。今後は活潑な句評を広 した由であるが、雑誌は同人の熱 各支部の協力を得て同人制で再生 六名のグループは其後死去転出等 もの。五花村師を中心とした十五、 宰の東北川柳に代って発刊された 気に満ちた柳誌である。故大谷五 六氏ほか二三の人々が中心となり で減少現今は同門下の逸才田中才 花村氏の病重かりし昨十月同氏主

はまた只管路郎主幹の静養を懇請 久々に会談の機会を得たと。同氏 四日京都市に赴き富士野鞍馬氏と ▼米沢暁明氏 (大洲市) は四月十 知らず訓示は川柳でやった由。 を勤めたが郵便のことは何んにも 政記念日に松山郵便局の一日局長 して来られた。 前田伍健氏(松山市)は先般郵

の旨現地より連絡あり。 会へ参列のため四月卅日大阪出発 は仙台市東北医大で開催の内科学 ▼編集局長北川春巣氏(大阪市) の旅信をよせられた。 「バスガイド東北美人なも嬉し」

日から卅日迄開催の大阪市立美術 制作早春郊外(太彩画)が五月廿四 古方戸田猶治郎氏(豊中市)の

割 烹

電話の五 七二六 坂 町

本真珠洞氏(福岡市)は博多を語題して西日本新聞は報道したが速 語った。 ける御車」と詠んで感激を親しく 感激を「両陛下をお迎えして」と H 館東光会展に入選光彩を放った。 一西公園へお迎えした博多市民の 天皇皇后両陛下を去る四月十七

世舌果を) & これ 市)はこの度十年間勤続の岡山県 市)はこの度十年間勤続の岡山県 になった。 盟事務局長として精励されること 世話課長の戦を退き今後は遺族連

▼須崎豆秋氏(大阪市)は会社

され十一日に羽田空港から飛ばれ画伯の渡仏歓送会が五月五日に催 療養を必要とするため四月から 部長三鴨美笑氏が長期に亘り病気▼川雑米子支部(鳥取県)では支 ▼池田正三氏 (大阪市) 私達」のそうていをされた池田 路郎選集

不朽洞の人々



7

六十五才の

1 =

ホー

2

れ左の句信を頂いた。 の記念句会には遂に缺席すること 月十七日国鉄全国会議で伊豆伊東 を得て出雲市尼綠之助氏を訪問さ 岩風呂もよし河鹿鳴く瀬音 何処へ来ても私一人という気持 お迎えした友の会の会員たちと共 区婦人友の会へ出席、葭乃女史を ▼丸尾湖花氏(大阪市)は鏡野地 の為参加の予定であった備前支部 十日出雲大社へ用務で出張、寸暇 ▼清木白柳子氏 (大阪市) は五月 になった。 御参りも仕事があって落付かず」 へ出張し二十日帰阪されたが、そ に奥津温泉の景趣にひたられた。 川柳のめがねをかけて旅の空 行の句信。 美喜 測花

設された四九八五九番。

▼ 木谷竹荘氏 (大阪市) は五月上

旬鳥羽へ旅行しころ鳥から左の句

A

井上剣花坊氏未亡人井上信子刀

喜ばしい。

年の難症が続々平癒してゆくのは られるが最近医術の進歩により永 己に守られ五月中旬大手術をうけ

やとわれた海女はあわびを取 (西宮市) は八年間 か故剣花坊氏の句集編集等数々の 業蹟をのこした。痛惜の至り合掌 行された。「井上信子句

集」のほ

信があった。

▼正本水客氏(大阪市)は去る四 々皆生温泉に赴かれる由である。 西雄々氏方へ移した。美笑氏は近 部を米子市富士見町一三五番地小

▼菱田満秋氏 て来ず」

本町一一〇五)のお宅へ電話が架 ▼杉本一鶴氏(貝塚市)は親戚知 療養生活を送られその終止符を打 「手術するまでになったを喜ばれ」 小島繁心氏(東京都杉並区和田 べく五月十二日第一回の成形執 貴族院議員。謹んで悼む。 は柳界にとっても損失である。明 年まで主宰されていた。氏の急逝 月二十六日午前七時半、永眠され 治二十四年七月二十七日生れ、元 た。名は五平、幼名五一郎、 友)が白河市大字借宿の自邸で四 ▼大谷五花村氏(川柳不朽洞会洞 能因」の前身「東北川柳」を昨 (ひるのや) と号された。柳誌

刀をうけることになった。

生活を続けていられたが薬石効無 会会員一永らく羽曳野病院で闘病 ▼藤本幸永(チエ)川雑婦人友の く五月十五日午後三時十分永眠さ

町四〇ノ五。 築移転された。西宮市甲子園四番 ▼小浜牧人氏(神戸市)は左記新 岡山市下西川四六へ転居された。 藤本満年氏(岡山市)は帰岡後

された。享年八十九才、告別式は

八日北鎌倉建長寺内正統院で挙

KK津村製作所

野球団のエースです

九大石鶴子さん(令嬢)方で逝去

ため東京都杉並区大宮前三の八 は四月十六日午前四時急性肺炎

> 場前三宅博方へ移転された。 町名変更

名称が変更された。東淀川区三国 区十八条町一丁目二一木村水堂。 本町三丁目三一西森花村。東淀川 の住居は行政区劃により左の如く ▼西森花村、木村水堂氏(大阪市)

白日

▼川雑字部支部鎮浪錦花氏(字部 市)は今回翠月と改号された。

さぎすは ▼ 五月号柳樽二十二頁二十三行目 洗濯の泥にまみれて君を恋い

訂正。 洗濯の泡にまみれて君を恋い ★常任理事会、句会

山川阿茶、

金井文秋の十二氏。

会 から 市久々知町コエ二三番地阪急浄水 阪へ転職のこととなり住居を尼崎 ▼藤井春日氏 (倉敷市) は五月大

> 席者は生々庵、春巣、栞、多久志 合せをした。(三十四頁参照)出川柳まつり開催について具体的打

改

正 誤

六時半、南区三休橋 部会合同協議会 中島生々庵居で開催 五月十日(土)午後

野村味平、 木口賀峰、 真鍋一瓢、 河村日满、 川、岩崎一伸の四氏。 直原七面山、石川侃流洞、 川村好郎氏 白木、紫香、いさむ、与呂志、女 一三夫の諸氏。 秋、月都、薫風子、狂二、庸佑、 恒明、良子、木客、潮花、雅美、 会員種別変更 維持会員に(四月から) 特別会員に(四月から) 小西雄々、 佐野白木、平尾太希志 木村木堂、 木村千容、 (五月から 吾鄉玲人、 福田丁路、 田垣方大、

氏は家事の都合で四月限

り退会。

藤井五茶 *

豆

を歓迎いたします。 ら大体御想像下さい。なるだけ弱いチーム お待ちいたします。私がピッチヤーですか われと思わん柳界の野球団からの挑 不朽洞会員ならざなたでも結構 戦き

ですっわれとおもわんものは珍

装珍影を送つてください。

1 編集以

いのちある句を創

不朽洞杯は老練後藤梅志氏がニッコ



定

投稿規

本 社 五 月 句 会 (大阪市)

5月7日 午後6時

於 光 明

ってゆくのも楽しいものである。 は、今や青葉若葉に包まれて、 いる。わが川雑のホームグランド光明寺 舞伎座が五月からとりこわしにかかって わって美しい。庭園の色彩が月々にかわ つじやあやめの花の色が、先月の桜にか ホームグランドであるところの、 変敷として柳人に親しまれている。 大阪の名物というより、関西歌舞伎の 大大阪 大阪歌

の柳話から幕が開く。 薫風五月の会は、 生々廃副主幹

できなかったことは残念であった。 深い柳話を、欠席された方々にお聴かせ ると六ページにはなるであろうこの興味 出されるという有様である。雑誌に載せ きいておられる葭乃女史まで、膝をの 平素はいつもご自分の席で柳話や披講を ソ連のおもしろい話がつぎつぎと出て、 のことなど、ドイツ、フランス、 各題の天位句に新人の進出が目だった 若返り法や長寿法、さては動物の寿命 または

> 永断·庸佑·圀男·六竜子·梅里·鳩花 子。生々庵。舟遊。利武。以兆。昭蔵。 千里・義弘・美恵子・昌男・栞・いわを す・月都・花車・弦月・悟郎・没食子・ 句念坊・古方・蘭・立児・すくむ・さぎ 雄声·凡九郎·進之助·文秋·薫風子· ·繁雄·宏子·葭乃 · 知恵·貴山·旅風·井平·收人·柳宏 · 与呂志 · 木客 · 鵜汀 · 一乃字 · 慱也 · 狂二・多久志・梅志・和男・剛花・悦子 ・葉乙女・楽天・漣・木堂・一瓢・素人 さむ・一興・十悟・堰子・清測・高史・ ・淡舟・静馬・須賀太・茶仏・淀月・い 受けられた。8時40分閉会。 席者―路郎・圭井堂・三司・一三夫

題 食 通 麻 生 路 郎 選

食通は半助の味も見逃が さ 当食通へ味は先代ほ ど で なっ 食通の手づかみにした気障なこと 新店へもう食通が 試 食 に 来膳の隅ウルカを置いた父の四季 企 食通の目刺は旨いものと い 食板 通ぶってにぎりのさびにおどかされ 食 一通の話 通の居候がいて 気が 疲 前に食通軽くあ 通のやおら取出 通にされてうっかり手も出せず 通を言うたばかりに奢らされ へネタの不漁を先に 筆記 が 喢 す妻 5 を 揚 のわ ず 息 5 L 与呂志 宏 没食子 周阿宏 粟 子 人甫 71

> 裏通りばかり食通連れて 行き 出来そこのおたのが食通の御気に召し むしやむしゃと食べて食通にさげすまれ 古本屋美味求真がやっと 売 食通が揃うて土曜の灯をあるき 食通は皿の価うちもふんでみる いかものを喰って食通らしく見せ 食通に聞けば茶漬が旨いとか 食通と聞いて板前盛りな 食通の末期 食通の箸へこんにゃくからみっき 食通の入門 食通へ罪な匂いが 罐詰の鮭へ食通手 細い街食通 食通ともなればがつがつ食 ふちょうなど使って食通らしく見せ 食通が横丁へ小さな店を 墓に似た顔で食通猪口を 食通を五十を云うて顔の 食通が別に一折持 食 食通の手つきよろしくトロ カロリー 一通に聞いては不味いも 一通の客へ板場は意地に のことは食通口に 鯛の の水は只 Ш 19 目 流 を 曲 って去 れ X 0 0 べられず 0 出 お 来 け か な ts 行 0 5 3 3 P b 須賀太 柳宏子 一高楽須 薫風子 花 贵 庸 從 悟 茶 立 どんたく 志花 月 瓢 月 郎仏 児 M. 車山佑里

題 消 毒 西 尾 栞 選

消毒をした手へ頭搔ゆく 消毒はつばでしておく子 やれ注射やれ消毒とよう肥えず 病院の匂いの好きな子に 消毒の車不安な街へ 消毒の匂いをダンサー オキシフル消毒の泡派手に出 人へ気付かぬように消 好きと言い 育ち 着 毒 去 0 美音子 圭井堂 幽 季 高千 どんたく 史里方 谷

手でつまむすしにも通の見栄があり

皿

胸を病む子に消毒を強いられる 消毒の包い 消毒の済んだ病 消毒のあとの授業がおとなし 消毒をして米なはれと妻 消毒をする愛情を 悲 大掃除役場 春日遅々バラの消毒で日は暮れぬ 消毒の包い 消毒済みの活字をかたく信じ切 ホルマリンまさかまさかで来た見 消毒の指が冷めたい肌に オキシフルあわててるのは親の 0 0 薬 中 O 宝 3 は 0 L 薄 寒 申 を s. 化 邪 が 訳 抜 h n 14 句念坊 凡九郎 須賀太 与呂志 圀 花 男 潮 飄 風

題 品券 若本多久志選

何もかも承知している商 商品券お刺りは小まい券でく 商品券お釣りくれはりまつしゃろか 商品券突き返えすほどのこともなし あっさりとよそへ回した商品 商品券お金に換える手を きっちりと商品券で来た 商品券始めて貰ろた廻り 椅 商品券受け取る方もさりげなく 奥さんの夢かきたてる商 応揚に買物 秘書或る日商品券 腐らない商品券はしもう とき 商魂は足して買わせる商 商品券来るまで買物控えとき 隠退をすれば商品券もやって来ず 何でもある御宅やと商品券に 商品券粗菓と一緒に附いて来る 商品券にも三越の見栄を 商品券さしずめ要らん物も買 を 寸 を 3 配 商 品 覚 御 品 3 品 品 岩 Ž. 礼 須賀太む すくむ 昭陽 いさむ 水静 三美 狂 宏 也容馬 7 瓢 仙

本人の知らぬことまで酔 噂もう本当となり 戸が 商品券罪を背負って届け 商品券送り返してサンマ 商品券一肌ぬがすように 商品券二度のつとめの帯 人の気も知らず商品券で 商品券いささか汚職の臭いする えらいこと頼みに来てる商品券 今までの詫びも商品券に 商品券なんだか馬鹿にされたよう 清貧を商品券にゆす 役得の商品 商品券だんだん小さくちょん切られ 無雑作に商品券を出して 芸のなさ商 こないだの商品券を着てみせる 贈収賄商品 盆暮に商品 券の知 券 券で妻 品 が 券 5 届 を 50 30 0 Na < 又 来具 を 添 見 5 P ح 地 買 贈 < n え 2 柳宏子 さぎす 美惠子 柳宏子 一三夫 どんたく 37 梅 生 水 漣 一々庵 舟 堂 鶴 興 兆 児 志

仕送り 西 いわき選

仕送りと別にへそくり添える母 仕送りも呉れず二号の手も切れる 仕送りを増してまるいに逢いに行き 仕送りもするが借りにもやって来る 親馬鹿の学資下宿へしかと着き 仕送りを続けて婚期取り逃がし 仕送りの約束当場 だけ 仕送りをする約束で別れ 仕送りへ山が次々減って ゆき 仕送りが途切れ下宿も追い出され 独立をせよと仕送り断つつもり 仕送りへ不作の事も書き添える 仕送りを受けて赤旗振って居り 仕送りの途切れた帝都跡に汽車 仕送りをせぬ末っ子に養 仕送りを上と下とで待つ 果 3 わわ F 凡九郎 句念坊 弦 鵜阿 漣 漣 月 仏汀茶 1 仙 悟 声

仕送りは決った額 割勘で仕送りをする 仕送りへすまぬダンスが上達し 仕送りをそのまま貯めてくれる母 仕送りのあるふる里を鼻にかけ 仕送りが少し遅れ た十 仕送りのある東京 で 面 仕送りの宛名を赤い爪で 書 仕送りへ無理な夜勤の日が続く 仕送りで生きる世間へ肩が凝り 仕送りへきっちり母の叱言も来 仕送りを一夜で飲んでるとは知らず 仕送りが酒と女を 覚 ないしょないしょの仕送り数えてみ 仕送りが難しくなる便り 受 仕送りにそえたチマキの味のよし 息子からゥナで請求来る学 仕送りで小さな義理を果しとき C 子 堅 えさせ 沢 白 4.1 月 古 薫風子 薫風子 六竜子 63 陽 進之助 收 古 弦 昭 茶 博 舟 わを 火 方 茶 里 月 仏 蔵 也 遊

席題 通 訳 正 本水 客 選

通訳の蝶ネクタイがよく似合い 握手した後は通訳に頼よっとき 手踊りのような手まねで通訳し 片言を母が 通訳がまず苦笑してどっとくる 通訳が俺と同じゼスチュアし 通訳が笑ろて暫く して 笑 通訳にきけばひどい訛りの英語です 通訳も板についてる女秘書 通駅も一緒に人にもまれ 通訳に書かせばまずい英語なり 通訳の所感も入れて永く なり 通訳をたのむと俺を買いかぶり 通訳は裏町までも 通訳がエーとアーとで間をっなぎ 通 訳 連 2 れ 7 7 步 笑 10 63 吉 生々庵 没食子 文 柳宏子 40 進之助 千 一狂 弦 狂 っちむ 秋 月

> 他人目から見れば通訳ぼろすぎる 早口で喋る 通 訳 解らない事は通訳 笑 通訳の洒落が分った顔に 通訳を信じられない 笑ってる間 ノーコメントだけ通訳用がなし 通訳はも少し背がほしい な 汗をふくまも通訳のいそがしく 通訳の要る子をつれて帰国する 日本語でいいと通訳手で押さえ 通訳が英語で何か問いか 通訳が笑えば同じ 笑 通訳の二言三言で用 通訳も連れて渡米で儲ける 通訳の口の動きがもの足 通訳 黙 K 好 も 5 顔 5 とき 2 なえ 条 困 足 3 L 件 0 0 1 ㅎ 気 7 す 没食子 句念坊 柳 古 永 脳 安子 也 司 志 断 武

席題 噂 真 鍋 靈 選

脱税で建てた噂へ無口 ぐれている曖昧しく聞き 噂さやと気弱な意見前置 そうぞうが生んだ根も葉もない噂 噂からきっちり犯人が割り出され 噂ほどすごい酒量でない 酒豪 ロカビリー噂の程では無いと母 噂され娘の年ごろにあわて出し 瞭など気にせず二号あいそよし 栄転の噂へたかる 飲み 仲間 仲人は近所の噂も聞いて めでたしめでたし尊通りの御日柄 一周忌にもならない後家にもう噂 、院をして も 噂 ほど二人の仲は 港 だけ入 بح 古 3 流 7 去 0 65 7 10 没食子 須賀太 古方 薫風子 与呂志 与呂志 いさむ 永牧牧堰 一乃字 静 漣 月 馬

席題 保 証 市 場沒食子選

その噂裏書きするように借りに来る **噂噂ひとの**落目を追っかける 買い被ってるらしい噂は否定セオ 噂などへっちゃら女事務 多 はっきりと振られ噂を思い出し とやかくの噂さの中で後家が派手 ほんとうのように噂が記事になり 栄転の噂をよそに ペン もう覚悟きめて噂を打ち消さず 先生の恋は噂ですまさ 専らの瞭が実る 子の前で言えぬ噂を聞

忙

三美 F

里

水文博

兆容秋也

角

か

九 3

+

汀助

走

3

方 舟 藏

古淡 昭 鵜

世間馴れしてフンフンと

い聞く噂

進之

聞くだけは聞いて保証はしてくれず 空気だけ吸い憲法に保証 保証付時計質屋へ入れたま いきまいて行けば保証は死んだあと 盲千人さくらが保証して 帰 保証人ない大阪で 狭 4: 法 0 去 須賀太 進之助 圭井堂 文 永 秋

大侵我がしる 色 畫 紙 を南七二、七三二 用 短 四日 #

保証して損を承知の気の 品質保証そのデザインが気に入らす 保証などないと定年淋し 義理のする気にかかるまま保証印 保証金つんだ会社がつぶれかけ 保証金二割は最初からとら 生活の保証があって鶏を 就職へアクセサリーと言う保証 保証金出してヤクザの義理をたて 保証する判うっかりと逆に押し 唯々諾々と書く保証人はもつていか 親父の遺言だんれんと保証ことわられ 保証書へ買う訳でなし夜店の灯 だまされる心算保証は当てにせす いざ判となって尻込む保 無雑作に押した判からけつまする 押したのを忘れた頃に判が生き 変り者だけど堅さを保証 十二月保証の保証たのまれ 新聞に出て保証人 青くな つきだが遠い遠い代 から 3 餇 理 * b 店 与呂志 六竜子 さきす いさむ 梅 昭 一乃字 主井堂 いさむ 古 静 義 栗 仏 弘 遊 司 声 力 堂 馬 月

空巣の用心してきやはつたんやるかこの人出 墓場にも粋なアベック通りすぎ 蝶一つ流れを越えて来 堤防の牛ヘアベック引き 返 雑草はせつなし菜種花ざか トマトだよいやキューリだと田舎道 往き道はそうでもなかった田舎道 雑草がゆうゆうとある田 春うらら親父の墓へござを敷き 田舎道春のにおいをただよわせ 葉桜を抜ける霊地の風も よし 葉桜吟行

にしなり支部句会(大阪市)

受売りが受売りのまま保証をし

ありついた仕事は保証金がいり

潮

花

連帯に肩を並べて妻も押し

義理のある人が保証に名を連ね 保証金出して汚れた本を借り

こんな筈でなかった保証人慌て

曲線美和装で包むしとや 拾い屋が淡淡として持ってゆき 拾い屋の親子を春の陽が 包 スタイルを気にし電軍も立って行き 奇蹟まだ信じて癌を生きんとす 聖書をとじてふと奇蹟を思 十二月奇蹟の様な 金を **八賞を奇蹟のように言う 他** 人 かさ 借 藤梅 う む 0 志選 句念坊 柳宏子 薫風子 雄 旅 满 淡 声 海 風潮

親の世話養老院へ委し

制服でスタイルだけはカバー

同伴花見の酒に酔いき

閣下閣下と言われた頃の写真帖

廃品の閣下を詐欺がか

つぎ出し

F:

武部香

林選

川雑

淀川

支部句会

(大阪市)

(庸佑清記)

没食子

堂

關

浦島になって閣下が生き残

八字髭元閣

F 0 威 を

保 0

さぎす

光

旧部下を尋ねて閣下よく 消息もきかず写真もいつかあせ 三回忌済んで消息届 年賀状暑中見舞で無事ら 黒枠に小さく閣下が載せられて 赤ベレーで通勤をする風がわり 郵便が来ると不在が顔を出 二階から不在のはずの声がもれ (a て来 L 笑 L 東洋男 三十郎 梅 水灯幽 梅

風がわり都会の中に Ш 0 家 香

阿倍野支部句会 (大阪市

た堤 舎道 0 L 一三夫 梅 堰 垂 豆 仙 楚 興

> それがつまり初恋なのよと教えられ スラム街案外うそ の 美しいままで初恋しまわ 池に石投げて初恋はかどら 言いだせぬまま初恋はすんじまい 初恋を古い日記で 拾い 初恋は生木のようで燃えつかず 愛すればこその嘘さえなじられる 嘘一つ言えず入社のままの椅子 もく拾いねらいたがわずさしていき 然と嘘ネオンの下で渦を 起ち上る姿を夢にみるバ 嘘ばかり書いて実話の本を出し 雲流る果てに初恋押しやら 初恋に出勤簿押す手がふ な 卷 3 n 43 14 る L 処 屋 元 れ 凡九郎 するむ 文 庸 昭 玲 敏 清 利 歌 悟 以 末 滩 幸 朗兆 佑

倉敷支部句会 (倉敷市)

十九の客悩はすこし太り す 十九の春親から見ればおはこい娘 十九の春読んだら焼けのレターが来 どん底に来てまで世話をやきたがり おっさんと言かれて一寸腹を立て 花の下今日一日の天下 トンネルを拾うて貰う草 酒さかな花はどうでもよい花見 お花見へ妻は前日から病 就職難尻目に野球で入社 出 米 溜息を十九の春に知 制服のつもりで訊問してしまい 小説のような十九の春は来 二次会になって世話人酔いっぷれ る な 野 気 鏡 0 球 ぎ 善選 方 香鳳隆 飴 狂 平銀 Ŧi. 春 子谷丘春月交坊 風平子水茶 日 古

句本 天位受賞者 33

博也・淀月・武助・紫香・一瓢・栞 ・南宗・水客・凡茶・鵜汀・庸佑・・十悟・葉乙女・晃・美恵子・堰子 牧人・多久志・義弘・玲人・雄峯・ 郎•梅志二1回陽子•旅風•竹荘• 3回淡舟 | 2回茶仏·三司·凡 年度

(不朽洞杯獲得者・陽子・淡舟・栗 茶仏・梅志以上の諸氏。五月現在)

進之助·水堂

川雑 京都支部句会 (京都市

すきな人とゆつくり歩きたいよな月夜 殿方からと遠慮の 世間体という始まりがラ 玄関に花おくことの 忘れたい物が小さな箱に あ 子を叱り編物の目 裏小路御仕立物の 殿方は少し離れたとこでお待ち 力 用 0 扉 か を 札 順 6 又 老 111 ひ下七 間 忘 0 煙 + 3 b れ 雀 ゆきら つる子 梅 尙 亚 生次 郎 能 蘭

備前支部句 会 (岡山県)

尻馬にのって話に 花が うっかりと聞いた電話がはなされず 欠伸していて恩給のあるつよみ 娘もううっかり出来ぬ年になり うっかりと過した春の宵を悔 尻馬を叩けば一升提げて

米 る せっかちな子供に母は追いっけず せっかちにまとめた縁が貴となり 夜勤したあくびを妻にいたかられ マですと見合いの話ふせておき 联 松東 岸 運平子 自娱句 久米雄 永陽 清 幸 葵 ቾ 泉声流子丘

月下氷人の嘘が良 コロッケの肉を探している不満 仲人を信じ一生 仲人を旧師に 奥様が恐ろしいわ 円満ですかと仲人吞みに 仲人がつい花嫁の 土筆摘む土堤スカートをめくられる 工場の鼠を土筆の丘 月下氷人をかって二人を力付 横丁にネオンが点いて活気つき 尋ね人顔の黒子も言うて おき 審よ審土筆は二人の尻で 折 新妻の黒子は変なとこに 四畳半もう灯火が消えてお 世間態恋へ仲人付 ブラットへ土筆も生えてる山 ハネムーン送り仲人どっと酔 野球選手横丁あげて送り出 坂道があり人生も また 坂道を越せば故郷の風にな 坂道がまだまだ続 く 四 子とよもぎっんで春の日暮れかかり お被岸の入りへ炬燵の火が消えて またデマになる玄関の男 お彼岸を後妻はひどう気をっかい の陽へうなずき合っている土筆 ロッケの数へ茶わんが並べられ 焼きのデマに迷惑する 泊の旅にもデマの飛ぶルージュ いデマへ女嬉しい顔に 岡山支部句会 バイクに乗った気で走り 頼 縁まとめあげ 棒 ٤ 名 むよい けさせ 12 10 174 を 居 来 畳 忘 あ 楽 津田麦太楼報 (岡山市 な F 代 歐 0 美音子 麦太楼 矢寸志 七面山 あやめ 秋 美 柳風子 伊久野 陽 葵 幽 法 幽 秋 流 10 岸月平 子丘 谷 舟 坊 月 谷

> 陽気な歌に茶椀が割れた 売れっ子の下座の方で取り巻かれ 平凡なババ売れっ子の日 同じ事言って唄って湧く人気 老眼へ新聞カタカナが多すぎる スピードの出世へ敵の多すぎる 相乗りのスピード違反に春の風 金蓄めたらしく近頃寄りつか 追越してバックミラーで見るスリル 台 曜 綠之助 代仕男 絲之助 綠之助 独 朱 市 月 仙 紅

小松支部句会 (小松市

なり

進

伊藤茶仏報

0

隅

茶の香

が

10

3

酔

60

米子支部句会(米子市

留学に母国の戦禍 留学もさせてと息子に夢を持ち 青い目の恋に留学つかれ き り 幕張ったように床屋はタオルかけ ライバルの広告でファンと演をかみ 広告程徳でなかっ 遥 た do 德 なり 用品 野村味 平. 西华 2 選 ょ 雄 羊

観光バス小学生の

声

0

行

3

千太郎

不平言う妻へ三面記事を

3

自家用に乗せて貰うて妻はしやぎ

まどか

みどり

大聖寺支部句会 (加賀市

美 幸 保 子 笑

天井が不思議に 廻る 神様が見えぬから子は不思議がり あの頃は豪勢だった庭 クラス会出世頭の 猛犬が不思議に吠えぬ面 悪酔いをする冷酒で花を 踊らねば花見にならぬ花 父ちゃんが迷子になった花の お花見のすしに花びら舞いまりる ほのぼのと女房の酌の花に酔 脱出に成功し 逃げ腰を不審尋問見逃がさ 天才と呼ばれ不休 あの頃の話がはずむ あの頃もやっぱりあった泣はくろ あの頃の日記見ていて飯が焦げ あの頃の人と余りに違がいすぎ 一枚目となって練習張りが出る たり三 逃げ 0 練 同 支 欂 13 0 0 次 小西雄 窓 習 度 え B 4 々報 美喜江 天邪鬼 机 柳 秋 柳 枝 康 枝 枝

酒場

3

錦松たつ路 水水路

ま

れ

-j=

れ

多恵子

吉

枝

満 で 惠

を

持

か

け

桜芳

か

0

代役が思われスターになるチャンス

落選の顔とは見えぬ

車

中

談

正柳子 寿美絵

立退きへ強気が一人まだねばり 先代は強気で当て

た白 残り火を集めて妥協する気なし 証拠などないが税務署強気なり 賃仕事するから妻も強気

La

仏

酔い足りてこほうぎ橋に立つ果報 むしゃくしゃを橋まで行って忘れて来 欄干をたぐって帰る程に 橋までは別れ別れで米た 二人 先客の手土産らしい部屋 土産買う筈を屋台でひっかける お土産を切る庖丁を汚な 欄干にもたれて恋を語って 親に意見しよると親が眼をはその

スガール武骨な酌も受けてやり

宗太郎 茶の香

いらいらと仕度のすまの妻を待ち 吞む仕度させて碁盤を出してくる 山中吟行 伊藤茶仏報 宗太郎 恒 維

孫出来てめっきり老けてみえる母 寄り道をして来たマッチ見つけられ 合格と聞いて家中して出 肩書の名刺若さが気にか 運だ運だと 悠々 運命を笑い 墓石を洗い子運に 運命線よすぎて運が開か

大聖寺小松支部合同句

会

品質優良 大阪市東区常縣町一丁目十一茶地 TACHINAWA PEN 立川ペン先株式会社 ワゼム カワ画鋲

帰えり仕度すれば一泊あつけなし 婦人会議題の 賑かと言う騒音に 仕度して待てば来ないと言う電 賑かでいいなと社長来て 置引きは売店からの目を 売店の売子も発軍ベルを 外の 悩 賑 ま 感 か 3 座 聞 九 10 たつ路 とし樹 14 12 朗

翁 声 あの頃にこうした知慧があってはし 逃げ腰にさっと護衛の眼が光り 酒入れてみれば不思議な胃の広さ

日だまりに胸を病む娘の土筆つみ 四畳半しめた障子が開けにくい

半

出雲支部句会

(出雲市

ロケバスが身投げの着換待つ焚き火 仕合せな人としんみり湯女座り 発車して又売店の編みつ 売店のコケシは何処も同 看護婦も買ってる売店の胃腸薬 売店が混んで夕刊買わず 乗 り 金落ちた音を逃さぬ耳を づけ 1. 持 美乃留 正柳子 朗 城 14 南 郎 明

第 宇部支部句会 (宇部市)

金のある方へ銀行貸したが 蠅がもうお先へ味を見てしまい 犬の知恵引越したを知らぬなり 割勘を出して新社員かしこまり **倦怠期他人の顔で飯を喰** 近道があるで此の世が面 反対をしたい末席が口ごも 失敗の上塗り妻子だけが 参道の杉は太さを もの言わぬ日々それで結構用が済み お隣が後家で夫婦が又も 一寸した事にもこじれる倦怠期 測ら める 白 死 れ 秋六花 0 0 粗 広 H 影 豐 作道 影休 年男花 太花 郎

解 篠山支部句会 (兵庫県

栄転とゆうことにして入れ替える 御機嫌を取る気で去れば寝て御座り 御機嫌な所長の判の今日早く 待ち呆け喰った木蔭で屋を聞き いい処みんな子連れが取る木蔭 靴きちんと揃え木蔭の丸 栄転へ女房一合添 これ位かと御機嫌角で尋ねられ 寿司あけるだけの木蔭へウロウロし 一家の機嫌うまく 取り えて待ち い席 小西無鬼選 みのる 白猫児 ひか平 越 鬼 雨山断

初孫のよちよち歩き上機嫌井階出いの新聞記事を子が見付けたけい 被纏の親爺囲碁に勝ったらし文 峯楽転で女中もふえて犬も増えよし子楽転の新聞記事を子が見付けたけし

高知支部句会(高知市)

泥んこの道へふと出る市へのでち 泥木へ月はきれいにうっつてい 金策も成らず泥道独 泥沼に咲いた花にも実は 新しい靴に泥道気 がつ 神棚のホコリ其のままおがまれる やぶ入りにぜんざいの味母の味 泥くさいハゼ名物の味に する ぬかるみに入り政治を非難する ぜんざい 何にかもの言いたそうなり春の泥 へ両刀使いかと聞かれ 大西迷 り言 か 実り 窓報 実 松 蟠 源 義 IE. 春 雄

木次支部句会(島根県

藤井明朗報

人生の風波に堪えて来た 人 4人相に似ぬ親切をあぶな が ぬ十年の務め月給だ け あ が ぬ 長生きをして原爆 長生し息子の苦労見るば もう十年若くなりたいマダムジュジュ 十年目ダムの底なるふる 十年は歴史の中に小さく 生 十年を無事故世話好きで 十年の歩み統計驚 十年の不遇が過去の恋に 十年の務め月給だけあ 十年の足ふみ二年で返え す 腕 マネービル八年プランにヒビが入り むらくも十周年記念大会 の世を する 里 通 か とし坊 まき子 万古人 春桜子 明 可 IE. 明 机 旗 朗 美吉

> 責任のない慰めを他人言 長生きはめでたし貧乏またっちし 奥さんはそれ者上りか身のこなし 口先きへ疑いの眼が横に 慰めてくれる他人が怖くな 長生きもどうかと思う養 長生きをして松風が身に沁みる 奥さんと呼ばれ二号のつっましく 奥様の自慢電化を見せた が 銀行員の奥様なのに金の 口先きは良いが無いものばかりなり 世話好きか他人の事で家を空け 奥さんと呼ばれ二号のふと淋し 奥さんと言って呉れるは魚屋さん 再婚をして 興様でない 晩酌に合づちうたぬ妻となり いいとてへ来たと晩酌追加させ む 暮 老 0 事 45 天痴人 迷調子 代仕男 澄 むじな 代仕男 朗 誠 独鶏 罩 紅 仙声 暗

弓削支部句会(岡山県)

干大根を家風の味に姑は ささやいて仲人そっと座を外し 貴方だけ残っていてと囁 汚れ足袋脱いだ素足がもてなされ 借りに行く傘に重たいボタン 心中の二人を雪が塗りか 春の雪悲恋の最後とも知らず アベックの傘・容赦をせぬ吹雪 初雪に自慢のシャッター切って見る ねじ干の様に訪う母また 大根の形も変えた 妻の 囁きに男心を見透かさ 大雪を掃くに隣りへ声を 掛 不具の目にささやき私のことらしい 大根をきざめば母の音に か くし 細 **鳳原七面山選** 漬 け たつよ 喜久枝 高 舟 世仙草志鉱 女年 賦 雲 甫

雑婦人友の会(鏡野地区)

麻生葭乃先生を

池

知恵

美

初夏を思わせる様な四月二十一日、 村原より麻生葭乃先生を始め、潮花さんを三度お迎えしての鏡野地区友の会 を開催致しました。備前支部大会に御 を開催致しました。備前支部大会に御 を開催致しました。

路郎先生のお作 とするところに誇りがあると御 訓話を頂き、常に潮花さんも友の会は 路郎先生のお作

ーと握りああ人生は和にしかず

の句を心として行くように申されたことを再び思い返して一層の努力を誓い合いました。披講後、葭乃先生の「黒髪」や測花さんの舞踊を拝見し、私たちもつたない舞踊を見て頂き、五時には奥津温泉へ有志一同嬉々として出発しました。

腰紐を解いてへそくりたしかめる 初めての和服腰紐こそばゆく 辻仕事たばこが長うなる日和 日向ほと母のお針の手も止り 許された試歩の日向は菜種咲く 陰日向なく働け ど 働 植木鉢日向を追って置き替える 嫁ぐ日へ腰紐嬉し色で 待ち 胎動へ腰紐ゆるうしめてやり けど 百合子 たつよ たつよ 知恵美 貞 周 周 貞 甫 甫

腰紐も妻に揃えてもら う 旅腰紐を師匠に借りたまま帰り

また機会あればと原稿帰って来

稿の答弁すぐにゆきつまり

河弦相春圀

月国巢男

ビルの街春はビジネスガールから

河を立てて踊りの街と なり

締切りが近いか亭主茶を沸かし

ウインクへ首をかしげるらどかしさ ウインクが課長の頭越えて来る ウインクに万語含めた二人 仲 大根を抜いた穴から 和病院支部 丛 (西宮市 0 音 たまの 七面山 美

子

原稿をそれて演説

熟が

胸の線すっかり街を春に いえる日のほろほろ痒ゆし春の風 春風で染め上げたよな街 又春がめぐり病む身のいとこのれ 我が世の春が短か 周年記念句会 -過 まどか 夢 0 司 3: 路

西尾青 一路報

慕いよる窓へ気になるシルエット 人情は受けぬと依怙地の

人情がにじみ出ていた金

釘

不

すみで、芸芸の

人情に負けるまい語気を荒くする

すい

to

義理人情いつも若さが抵 人情をすててストの旗を

抗 振

0

ぶ郎秋

雨の窓閉めて歯にしむ夏 窓ぎわの美人こちらを見てくれず

蜜

交

けっかくという血統にある不縁

佐野白

水選

どんなに真似ても真似てもつほみの色と香と

凡九郎

のぼる

車

明和支部研究会

鬼

女美

小沢 史 葉

大阪逓信病院島ケ辻川柳会

逃げ腰の儘でテリヤは吹き立てる 腰のやじ馬後の方へ立ち 淮

八十子

よろめきの爆笑続く屋 疑うてからは効果が見えて来ず 客寄せに買ったテレビも効果なし

休

辰 京

再会へおいとは呼べぬ君と知り この辺で座敷は余興の唄となり 存在を余興の席で 認め 期待した筈の養子がよく 遊 薬書で言って遣る程度の賛成さ 不養成と言わず社長は匂わせる

楼 测 武 堂

られ

すいむ

U.

蕗

児

如才なく老妓社長に声を

か

名門の心中を歌にして稼

宴会の歌は何処も

下に

落

雲江

二の腕をあらわに春の灯は消され

栞

駅弁に思い思いの 車窓での田植たのしいものに見え 窓 から あ 留 光 先ず蹴って其れから拾った古財布 おばあちゃんの財布天保銭があり おごる気の財布ゆったり出して見せ 古財布二代に仕えた色であ 松の内明けて財布の紐を締

0

甲子朗

言居士が

釘

を

3

1 風 子

利 春

なやみ持つ胸に青空青す 日本晴ビルの窓からくやしがり 日本晴ああそれなのに酔いっぷれ 文なしへ窓 一杯 日本暗電気洗濯機 70 0 日 ぎる 本 ず 同小瑞 111 茶 石

8 状 太希志 阿生々庵 生々庵 同小 伸

麻生路郎先生選

屋台店街のネオンの色に 染 み街の鏖拾ってガード下に 生 き 金持った散歩は街に足が向

太郎坊路秋

美味しかったお世辞へ三杯目を盛られ

多久志

栄 人坊

3

お茶漬の味淡々として老夫婦

屋上のキャッチボールもピルの

辛口を好ん で 男

盛りなり

寿牧善

逃げ腰をもうゆるさないお女将なり 逃げ腰になって夜廻り帰って来 願望が叶え ば 男 逃 逃げ腰で見てるセリ市面 白 逃げ腰へ押売の腕太 く見え 逃げ腰で露天将棋をのぞきこむ 逃げ腰へお女将すかさず一杯つぎ

林川柳会

(大阪市

おいと呼びなれて女房の有難味 手料理の味にふれぬがもの足りず 漬物の味もほめてる 上機 湯の街で習うた歌で朝を発 すくすくと育ってくれた子と歌 酔えば又軍歌の父は淋しそう

球梅一圀すい

嫌

まとと

げる

葉雄巣右

誕生日忘れる程の 誕生日主賓はお乳のんで 誕生日喜ぶ年は遠 誕生日祝い度い子 ガールフレンドの誕生日だけメモにつけ たまさかの強気すってんてんに負け 小僧から上った方が強気 で 元も子も無くなるまでの強気なり 妻の強気娘の縁談また逃がし うに に逮 寿 捕

> 33川柳会 (堺

> > 市

よろめきの耳へ静かなみおっくし

津弥子

再会へ変らぬ友の 手

0

舟

会を落目の方が

0 3

鮨と料理と酒

再会へ夜逃げしたとは見えぬ顔

まこと

再会も悲し涙

でする手錠 す鉄

すみ江

星

へ再

会約

人生の果でよろめくスリル知り

お隣りの主人もよろめいて来た終電 よろめいてよるめいて女優の名があがり

白好

二合瓶隣は飲まず持ち帰え り 自費がど気がねの要らぬ酎の味 気がねせず居てやといわれ気を使い もうアバートうどん気がれなくすすり 四畳半一間で気がねのない暮し 女房に小さい小言言う養子 折提げて妻に気がねという養子 珍客へ押入れから出す一 押入れも嫁った娘の香が 珍客で猫押入れへ入れら 一合瓶つくので万障くり合はせ 級 残 酒 0 好 郎 好庸 狂 六電子 南 狂好 郎声

帝化川柳会(大阪市)

そのようにのけらかしても過去は過去 真似やったのにえらいことになりよった 職一決そんならそない し 神谷凡九郎報

日路志

みおつくし句会(大阪市)

スト決る大会なのに流れ て 居 楽

投句は 阿倍野区級 発表・ 六 月十五 第題「バンガロー」 梅 ★大万川柳(第八十八回)を募る 里 司は 阿倍野区松崎町三丁目 で、 カサー日 (唐内城市) 千日前 大劇 裏でいる地下映画食通街 0 店 路郎先生選 (店內揭示)



編 集 錄

で、校正と、一っときに攻められ 印刷所から急かれるとそうも言っ きたかったが、きょう(二十日) けでもご寸暇をみて書いていただ せください。 です。穴理的小品もドシドシお客 大方のご協力をたまわりたいもの う、編集一本へ専念できるよう、 い。なるだけぼくに書かさぬよ ると一日二十四時間ではたりな ておられなくなる。書いて、組ん 著巣編集局長に、

せめて後記だ

風竹、

JII

風

古川茂生氏が逝いて今年

故人に関する色々な文献を持参し

句会では前山北海氏がわざわざ

相違ない。

が、鳳吉氏からのお便りでは、 吉氏邸)にて逝去さるとあった 誌では、藤沢市鵠沼の令息宅(鳳 十四時」へ、井上信子氏にご出場 りがたかった。昨年「川柳家の二 令妹大石鶴子氏が「母、 子氏令息鳳吉氏のご紹介で、氏の 数篇あったため、チョットまごつ 稿がメ切までに間に合わぬものが ほめをいただいた。本号は依頼原 った。毒舌家で鳴る某氏からもお ▼前号は好評でなによりうれしか して思えば残念である。新聞や他 て組みこめなかったのは、いまに を依頼したが、あまりに短かすぎ いて」を書いてくださったのはあ いたが、剣花坊未亡人、故井上信 信子につ

と私が加わった。

新らたにしてまた快筆を執ってい くなられたと書いてあった。 京都杉並区大宮前の鶴子氏宅で亡 ただくことになっている。 た。またご協力を、とは広告部長 柳人交歓広告のシーズンがき 行脚」は本号で終るが、筆陣を 水谷竹荘氏の「全国の名物と川

けます。 の弁である。よろしくお願い申上

謝

では親身も及ばぬ御厚情をたまわ 貴支部創立十周年記念川柳大会 JII 雑備前支部の方々へ

とはない。 先輩としての風竹氏から受けた指 じ日布時事社の隣を食み、その間 導と恩顧とは一日として忘れたこ

立廿五周年を迎えた当市川柳ウイ で十年になる、昨一九五七年に創 平の九名に社外から穀知の遠山氏 柳葉、草一郎、いつ生、暁舟、斧 る者八丁堀、泉水、魔花麗、北海 よりマキキ荘に開催された。集ま 竹忌を兼ねて昨十八日午後六時半 ウイロー社の四月例会はこの風 とした。 ていて、その生前をしのぶよすが、 四〇年四月四日、

ロー社の生みの親である。

九四八年四月歿行年六十三歳とあ れるのであった。 を払う見事なもので、碑面には 取り寄せたという墓碑は、あたり 香を焚いたのであるが、日本から 眠る風竹氏の墓前に並び花を捧げ 先ず一同打揃ってマキキ墓地に 今更のようにその若死が惜ま 風竹氏の作が出ている一九四八年 同人宛に送ったその寄せ書き、又 などがあった。

麻生路郎著

「新川柳講座」

りはなかったが、戦前長い間、 風竹氏と私は川柳によるつなが

風

竹

思

日本に行っていた魔花躍、 されたウイロー社復活第一回句会 り抜き終戦の翌年たる一九四六年 出席者が、当時新聞検閲官として 五月二十九日、石井ガーデンに催 た「太平洋リレー川柳」の新聞切 その中には戦争の前年たる一九 故人の発意で出 北海両

があった。 ンのことを石井雅亭園と書いてい る点など、その面目躍如たるもの 特に風竹氏のペンで石井ガーデ

三人の知慧で読めない伏せ

一三夫 麻 西

0

て置 1 宋朝は近衛首相に似た活字 生きる道 ンテルよコモよ浮かぬが

思いがする。 永年活字と共に生活した新聞人、 座」に収められた故人の作だが、 風竹氏の姿を、 これは、麻生路郎の「新川柳諸 今、眼前に見るの

するのである。 ど風竹氏から叱られている思いが ういう私自身の原稿も悪鑑で、 たなくて文撰泣かせ、最初の句な い原稿ほど厄介なものはない、 新聞の仕事に関係して、読めな

があった。 より「思い出」及び「雨」の披講 てから、四月の選者前山北海氏に 故人に対する献句の披露があっ

らずも選者として披講出来る 年頃で、初歩当時はもっぱら風竹、 北海氏がこの風竹忌の席上、はか ロー社が生れて二年後の一九三五 浪両先輩の指導を受けた。その 北海氏が川柳を始めたのはウイ

り、ここに心からの御礼を申上 げ、益々のご発展を祈りあげます。 本多久 尾 功 莱 单

川雑婦人友の会

丸若 花志

からぬ因縁が思われてしようがな 下の風竹氏も定めし満足だったに いと述懐したが、 ことでしょう。ここに厚く御礼申 上げます。 のあたたかさはいい思い出となる 皆様のお手料理の味と、人情味 故人のお蔭であり、又その浅 川滩婦人友の会 鏡野地区の方々へ―― これを聞いて地 丸麻

潮葭 花乃

話である。 ことになった。布哇文壇近米の佳 句会を特に風竹忌として記念する ウイロー社では今後毎年四月の

一九五七年四月十九日発行 ハワイタイムス

心斉橋筋大丸前

電話②三三四四番

所 小松 句 会	所 探市老松町三丁 題 応援・貧乏・心部 時 5 日(木) 五時	所題 熱帯魚·雀 熱帯魚·雀	所題時 扇辞18交 橋令口通	所題時 玉海19に	所題時 加湿19 阿	所題時	所題時
	堺応援 5 3 市老級 日 3	波带 日海	扇辞18交	玉海19に	4tt 32 10 Kml	I met det die	
(火) 六 時 (火) 六 時 (大) 六 時 (大) 六 時 (日) 六時半 (日) 六時半	松町三丁 島野工業 名 句 会 名 句 会 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日本	難波駅高架下 親和くらば 南海電鉄句会	(種) 交通局 句 会 令・裏街・ネオン	玉出新町通一の一一梅志居海・誘惑・ためいき	旭町二丁目 金塚会館 配道・手不足・バラ 一条 野句 会	大阪信用組合(市電交叉点南一丁) 大阪信用組合(市電交叉点南一丁) 天王寺区南玉造町 天王寺区南玉造町	十三西之町東淀川郵便局 3日(火)六時 3日(火)六時
所題時 所題時	所題時	所題時	所題時	所題時	所題時	所題時	所題時
15 日(日)一時 15 日(日)一時 四宮市鳴尾町明和異業KK 西宮市鳴尾町明和異業KK 西宮市鳴尾町明和異業KK	四条繩寺・仲源寺 夢中・ポスト・報い を	厚南区西宇部駅長公舎 半休居古着・ゴム長・庭 コム長・庭	南区二条町二丁明治小学校前 源·梁夜·手帳 源·梁夜·手帳	末いの 本語が生町四ノ三 相原一善品 末いの 本語・色気・旦那様・自慢 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、	広島市尾長町東山根角上利居 意見・御礼・門限 店見・御礼・門限	** 子 句 会 ** - ト・トラック ** - ト・トゥーク ** - トゥーク ** - トゥ	7日(土) 六時半糸口・欠点・虚勢

人交歓暑中見舞廣告を募

×一口分は五分の

まかせ願います。

★原稿締切は七月

日清便

★広告料は前金のこ 柳 よろしい) と(郵券代用でも 雑 社

っために。 回を重ねる度に高度化 に川柳家の好伴侶にな 小学中学大学と名実と ることになろう。本誌

して来た編集会議。

御注

一三夫

向きのものを近く掲載 には入門講座の外に中 剣花坊門下で名を成した くださる。今夜は久良伎 二木曜日に変更。 ▼六月から編集会議を第 にときどき懐旧談をして 人たちが登場した。 たが八月号の企画完了。 路郎先生が会議の合問

するために読みものも句 も奥儀にも役立つ雑誌に くるを知らず。入門に 情熱の瞳があつまって更 くる。新らしい企凶への なく演説の声がきこえて 勉強も。 総選挙の前夜。 戸 田 古 たえま 方 誌をよくしようとする諸感じ、これで少しでも雑 なく寒くない部屋の空気 氏の論舌も真剣で、暑く 文も次第に厳しくなっ

ことに句の勉 月号へ貴方の ▼雑誌を良くするために 面々に快し。 は、熱を上げた編集子の 機高 薫風

度。活字指定はお 所と姓と雅号程 口でも申込んでく 幾 ずるのである。初 夏の夜、 編集局は苦心して 朽洞を辞した。 く掲聴して一 の懐古談を底銘梁 と判った。アン 連らねてしみじみ 論百出、 めるにしても、 が編集会議に座を 然の事だが、それ いる。と言えば当 めるにしても、説 路郎先生 産れ出ず

*一口分の原稿は

ださい。

文川

柳

か数氏が欠席され ▼ 春集編集局長日

printed in Japan

(禁轉載)

七二〇円 (送料四円)

昭和三十三年 六一 発行所 大阪市住吉局区内万代西五丁月二五番地 大阪市住吉局区内形代西五丁目二五番地 行印刷人 一半カカ 麻生 年年

月一日発行 月廿五日印刷

幸二郎

川柳雜誌社 長春口室 大阪 司 大阪の 七五〇五〇

B 川 列5号 毎月一回

雜誌 定価六〇円

第十三巻 日発行

『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募名雅号を朗記する事。 限る。柳塔』 意略 稿 えの投句は不朽洞会員に 規 定 (毎月二十日締切) 他

指教 特押 元 入 急れ 輪子

近作柳樽 毎 (雑誌廿句以内)

★一口金二百円。

累中見舞広告を

(雑離十句以內)麻生路 北川春 北川春 (廿旬以内) (廿句以内) 河宫 村田 (七月二十日梅切) 日不 路春路 満二 郎巢郎 選選 選選選

募

課

題

募

集

(廿句以内) (廿句以内)

津丸

田尾

麦太楼

選選

集

水虫。

水虫には、断然御好評をいただいているアルバー! 乾いた水虫には液、湿った水虫に は粉末、両方に使える軟膏! 3種で水虫の立体治療を!

DIN'-

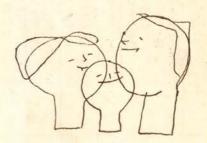






東京·大阪 山之內製薬株式会社 福岡·札幌

一家そろつてホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL @ 551-2

楽しいい お台所に お台外に

新しい経済的な家庭燃料 御一報次第資料送呈又 特約店を御紹介致します





マルヰプロパンカス

岩谷産業株式会社

本 社 大阪市東区本町3 電話大阪 (26) 代表 3 2 5 1 • 8 2 5 1 営業所 東京・名古屋・京都・大阪・堺・尼崎・神戸・松江・広島・小倉